
バカと龍と召喚獣

半月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

バカと龍と召喚獣

【Nコード】

N18540

【作者名】

半月

【あらすじ】

文月学園に二度目の桜の咲く季節がやって来た。主人公は小学校の頃の約束を守るために幼馴染みのいる文月学園へやって来た。毎度お馴染みの真剣にバカをする人達のクラスで主人公は何をするのか、お楽しみくだされば幸いです。10月9日タグ編集

オリ主&召喚獣（前書き）

初めてなんで詰まったりするかもしれませんが、粉骨碎身全身全霊の覚悟でやらせていただきます。

オリ主&召喚獣

神崎 龍斗

身長186cm

体重65kg

得意科目 理科、英語

見た目は秀吉より少し短い黒髪で、高い身長と引き締まった体。感情的で友達が傷つけられているとよくキレる。

努力する人が好きでそのような人たちを馬鹿にするやつらが嫌い。木下優子と秀吉とは幼馴染みで小学校を卒業してから親の転勤でアメリカへ行っていて、高二になってから日本に戻ってきた。

瞬間記憶能力を持っていて勉強は全て出来ていて、特に理科の薬学と植物に長けている。その学力から《龍神》と呼ばれている。

剣術が得意で、小学校の頃に暴走族を一つ壊滅させたことや、常に黒いコートを着ていることや、喧嘩をするときは気絶した人にも容赦しない残虐性から《死神》とも呼ばれている。

コートの裏には様々な薬品（しびれ薬や眠り薬など）や武器（投げナイフやサバイバルナイフなど）や自衛道具（スタンガンやスタングレネードなど）が大量にあり、腰には日本刀と木刀を一本ずつ差している。

召喚獣は黒い服に黒いズボン、黒いコートと全身黒で腰に二本の日本刀を差している。

腕輪の効果

「殺神」
さつじん

一秒につき五点ずつ下がっていくが、その間は攻撃が当たれば即死になる。

第0問 昔の約束

『ゴメンね、優ちゃん。一緒に中学生になれなくて、お父さんの転勤でアメリカに行くことになっちゃった。』

まだ寒さが残るがそれでも徐々に花が咲いてくる3月。ある一軒の家の前で女の子が男の子に詰め寄っていた。

「ごめんねじゃないわよ！ずっと一緒って言ったじゃないのよ！龍くんのバカア！」

女の子、木下優子は泣きながら男の子、神崎龍斗に怒っていた。

『本当にゴメンね、4年たったらお父さんのお仕事が終わるみたいだから、そしたらまた会いに来るから。』

「絶対に会いに来なさいよ！来なかったら腕の関節はずすからね！」

『うん、絶対に会いに来るよ。』

「ね、ねえ龍くん。」

『ん？なに？』

「えっとね、あの、その。帰ってきたら、アタシを龍くんのお嫁にして！」

『えっ！えっと、俺でいいなら喜んで！』

「なら約束ね！アタシ、龍が帰ってきてアタシと付き合ってくれる
まですっと待ってるから！」

第1問 プロローグ

第1問

問 以下の問いに答えなさい。

『調理の為に火にかける鍋を製作する際、重量が軽いのでマグネシウムを材料に選んだのだが、調理を始めると問題が発生した。この時の問題点とマグネシウムの代わりに用いるべき金属合金の例を一つ挙げなさい。』

姫路瑞希の答え

『問題点……マグネシウムは炎にかけると激しく酸素と反応する為危険であるという点。』

合金の例……ジュラルミン』

教師のコメント

正解です。合金なので『鉄』では駄目という引っ掛け問題なのですが、姫路さんは引っかかりませんでしたね。

土屋康太の答え

『問題点……ガス代を払っていなかったこと』

教師のコメント

そこは問題じゃありません。

吉井明久の答え

『合金の例……未来合金（↑すごく強い）』

教師のコメント

すごく強いと言われても。

神崎龍斗の答え

『問題点……マグネシウムは激しく燃焼するので危険であるという

点、そもそも問題とはいえマグネシウムを鍋の材料とした人の頭合金の例……ステンレス』

教師のコメント

……もう少し優しく言ってあげましょう。

「龍斗、そろそろ着くから用意をしとけ。」

『ううーん、あれ？夢か。』

「どうしたんだ？」

『何でもないよ、ただ優ちゃんと秀の夢を見てね。』

「そうか、また会えるといいな。じゃないと腕の関節をはずされるからな。」

外の景色を見ているうちに親父の言葉は聞こえなくなった。代わりに聞こえてきたのは懐かしい優ちゃんや秀の声だった。二人とも元気かなあ。

「ほら着いたぞ、さっさと降りろ。」

もう着いたのか。

『ありがとう親父。じゃあ母さんにもお礼言っといってくれ。』

「ああ、じゃあな。たまには連絡しろよ。」

そう言うのと親父は帰っていった。文月学園だよな、どこだろう。見回してみると不良が四人いた。

『ねえ君たち、文月学園ってどこ?』

「ああ! てめえ俺らのことなめてんのか!」

「調子乗ってんじゃないぞゴラァ!」

ああ、うざいな。次喋ったやつに脅し: 尋も: じゃなくて聞いてみるか。

「聞いてんのへドカツバキッドスツ<ぐはぁ!」

俺の胸ぐらを掴もうとして来たやつ顔面をぶん殴ってよろけたところで側頭部にハイキック。さらに倒れたところで踵落とし。うん、よく決まった。

『文月学園ってどこ? てめえら殺されなくなかったらさっさと吐け。』

「ひいっ! あ、あっちです。」

殺気を軽く放っただけでビビリやがって。まあいいや。

『ありがとう。君たち。助かったよ。』

「いいいや、きき気にしないでくださいよ。こここれくらいお安いでご用です。それでは失礼します!」

不良が指差した方には遠くの方に大きな建物があった。これで優ちゃんや秀に会える！あ、でも転入だからたしかFクラスだったよな、優ちゃんはがんばり屋だからきつとAクラスだろうな。秀は分からないけどね。

やっと来れた学園で迷っているといろんな人の視線が刺さってきた。うん、かなり痛いね。このコートのせいかなあ。

「そこのお前、少し待て。」

『ん？』

ドスのきいた声が聞こえるから振り返ると浅黒い肌をした短髪のいかにもなスポーツマンみたいな男がいた。

「俺は生活指導の西村だ。お前は文月学園の生徒ではないな。誰だ？」

おお、そう言うことか。

『どうも、転入生の神崎龍斗です。よろしく。それよりも学園長はどこにいろの？』

「神崎か、もう少し敬語を習ったらどうだ？俺が特別補修をしてやらんでもないぞ？」

あ、額に青筋が…まずい、言葉を間違えたら死ぬかも。

『それは失礼しました。以後、気を付けます。それで、学園長はど

ちらにいらっしゃいますか?』

「ふん、こっちだ。ついてこい。」

移動開始。というよりもその拳は誰を殴るためだったんだろう、まさかだよな?さすがに転入生を殴ったりはしないよね?っと、ここか。

「失礼します、転入生の神崎龍斗を連れてきました。」

『失礼します、転入してきた神崎龍斗です。』

そこにいたのは腰まで伸びた白髪、更にしわのある顔、そうまさしく

『出たな妖怪!』

「入ってから二言目がそれかい!失礼だねくそジャリ!」

あまりに酷いもんでつい言っちゃった。まあ仕方ないよね。

「まあいいさね、それよりも本当にいいのかい?Fクラスで、アンタならAクラスも行けるのに。」

そんなことでAクラスに行ってたまるか。学園長の配慮は嬉しいが俺には俺のポリシーがある。

『構いません、そう言うことは努力した人に対して申し訳ないんで。あ、もし良ければ俺を観察処分者にしてください。』

さっき少し聞いて興味あったんだよな。

「あんたがどこで聞いたか知らないが大した酔狂さね。観察処分者には出来ないが、特別待遇者ぐらいならいいさね。もうさっさと行くんだね、今行けば自己紹介に間に合えるさね。」

『ありがとうございます。失礼しました。』

ふむ、根はいい人みたいだな。それよりも秀はFクラスだよな、あいつは演技うまいくせに勉強駄目だったもんな。さてはて、全くもって楽しみだ。

第2問 懐かしの再開

第2問

問 以下の意味を持つことわざを答えなさい。

- 『(1) 得意なことでも失敗してしまうこと』
『(2) 悪いことがあった上に更に悪いことが起きる喩え』

姫路瑞希の答え

- 『(1) 弘法も筆の謝り』
『(2) 泣きっ面に蜂』

教師のコメント

正解です。他にも(1)なら『河童の川流れ』や『猿も木から落ちる』、(2)なら『踏んだり蹴ったり』や『弱り目に祟り目』などがありますね。

土屋康太の答え

- 『(1) 弘方の川流れ』
教師のコメント
シュールな光景ですね。

吉井明久の答え

- 『(2) 泣きっ面蹴ったり』
教師のコメント
君は鬼ですか。

神崎龍斗の答え

- 『(1) 秀の演技ミス』
『(2) 泣きっ面を踏み潰す』
教師のコメント

……あなたは鬼畜ですね。

ここか、なかなか汚な……趣のある教室だな。

『失礼します』

「早く座れ、このウジ虫野郎。」

『ほう、この俺をウジ虫野郎呼ばわりか。面白いな。』

出会い頭でウジ虫野郎呼ばわりは人生初だな。

「お、俺が悪かった。だからそんな物騒なもんしまつてくれ。」

『別にそんなの持っていないよ？』

ただ腰に差してる真剣を少し抜刀しただけなのに。

「世間一般ではそれを物騒なもんと言いうんだ！」

『……………そうなの？まあ言いや。おっ、秀！！久しぶり！』

そこにいたのは優ちゃんの弟の秀だった。

R y u t o s i d e e n d

H i d e y o s i s i d e

『……………そうなの？まあ言いや。おっ、秀！！久しぶり！』

はて、ワシの知り合いにこのような人はいたかのう。

「お主は誰じゃ？ワシは記憶にないぞい。」

『本当に？小学校の頃に秀って呼んでいたのは俺一人しかいなかったと思うが？』

小学校の頃？ま、まさか！

「も、もしかして龍か！」

『そのとおり、よく思い出してくれたな。嬉しいよ。』

「本物じゃな？本当に帰ってきたんじゃない？」

『そうだよ。ただいま。元気にしてた？』

「うむ、それよりも、なぜ連絡をくれなかったんじゃない！姉上はずっと龍からの連絡を待っていたんじゃないぞ！」

まったく、ワシたちがどんなに心配したか。

『まあまあ、そんなに怒るとせっかくなにかわいい顔なのに勿体ないよ。なでなでしてあげるから機嫌直して？』

「むう。」

気持ちいいのう。なごむのう。

「総員、狙え！」

明久か！？まずい！

「男の敵を殺せえ！」

『俺がいったい何をした！』

「黙れ！須川くん靴下はまだ早いよ。」

『へえ、てめえらしい度胸じゃないか。その度胸は認めてやる。』

龍がキレてしまったのじゃ！何とかせねば。

「落ち着くんじゃ龍！皆もこれからのクラスメートに何をするんじや！」

『チッ、わかったよ。』

「秀吉に手を出した狼藉者はクラスメートじゃないよ、異端者だよ。」

『いい度胸じゃないか。秀、目え瞑ってて。五分で片付ける。』

もう駄目じゃ、完全に殺る気なのじゃ。

「はあ、わかったのじゃ。あまり手荒にするでないぞ。」

『オーケー』

五分後

「ぐふっ、この怨み必ず『黙ってろ。』その関節はそっちには曲がら………！」

メキメキッ！

…凄い音が聞こえるが無視じゃ。

『もういいよ。』

「な、何があったの？」

確かにこれを見たらそう言わざるを得ないのう。

「やはり龍は強いのう。」

『当たり前だ、これくらいは無傷でいける。』
やはり龍は変わらないのう。

H i d e y o s i s i d e e n d
R y u t o s i d e

まあこんなもんか。今教室で立ってるのは俺を除いて秀、ウジ虫野郎、女子一人だった。え？それ以外？皆に言うには少し憚れるから、死屍累々とでも言っておこうか。

『まだ先生は来ないのか？』

「ああ。だから今クラス代表をやってる俺が前に立っている。」

『そうか。秀の席はどこ？その後ろに座るよ。』

「うむ。ここじゃ。」

朝から少し疲れたな。まあ楽しめそうだからいいけどね。

第3問 引き金は引かれた（前書き）

お願いします！

どんな感想でも批判でもいいから…アドバイスを下さい！（土下座）

第3問 引き金は引かれた

「皆さん席についてもらえますか？HRを始めますので。」

秀と話していると覇気のない声が聞こえた。冴えないおじさんだなあ。

「えー、おはようございます。二年F組担任の福原慎です。よろしくお願いします。」

冴えないおじさん、福原先生は黒板に名前を書こうとしたが、チョークすらない。うん、ここまでひどいとは思わなかった。

「皆さん全員に卓袱台と座布団は支給されてますか？不備があれば申し出て下さい。」

畳と卓袱台と座布団とは、かなり斬新な設備だな。

『秀の分の座布団明日新しいの持ってきてあげようか？』

「いや、大丈夫じゃ。心配してくれてありがとうなのじゃ。」

『ならいいけど。』

「せんせー、俺の座布団に綿がほとんど入ってないですー。」

「あー、はい。我慢してください。」

「先生、俺の卓袱台の脚が折れています。」

「木工ボンドが支給されますので、後で自分で直してください。」

「センス、窓が割れていて風が寒いんですけど。」

「わかりました。ビニール袋とセロハンテープの支給を申請しておきましょう。」

うん、かなりひでえな。

「では、自己紹介でも始めましょうか。そうですね。廊下側の人からお願いします。」

廊下側って、秀からか。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる。神崎龍斗とは幼馴染みじゃ。」

次は俺か。

『神崎龍斗だ。小学校を卒業してから一昨日までアメリカにいた。秀と優ちゃんとは幼馴染みだ。二人に手を出すやつは《死神》の名において処刑する。まあ一年間よろしく。』

こんなもんでいっか。

「おい、死神って…」

「ああ、確か噂じゃあ小学校の頃に暴走族を一つ壊滅させたって…」

「だが死んだって噂も…」

「けど死神の噂も四年前から聞かなくなったし、本物かも…」

まだ《死神》は健在か。確かにあの時はキレちゃったからなあ。まあ今となってはいい思い出だな。

『秀、眠いから膝枕して。』

「むう、仕方ないのう。」

『お休み。』

秀が正座してくれたからそこに頭を置いた。何か殺気とか感じるけど気のせいだな。

R y u t o s i d e e n d
H i d e y o s i s i d e

『秀、眠いから膝枕して。』

「むう、仕方ないのう。」

相変わらずサラサラな髪じゃのう。しかし、こんなことをしてるのが姉上にバレたら、思い出すだけで震えてしまうのじゃ。

『お休み。』

ワシが正座したら龍が頭をのせてきた。それにしても、明久はさすがじゃな。自分でダーリンって呼ばせておきながら言われたら気持ち

ち悪くなっておるし。龍の髪を撫でていたら自己紹介がそろそろ終わりそうになってきた。もう起こした方がいいかのう。

Hideyoshi
Ryuto side end

「起きるのじゃ。代表の自己紹介位は聞いておくのじゃ。」

『ふわあ、おはよう。』

もうそんな時間がたったのか。

『ありがとう。秀。』

「別に構わないのじゃ。」

やっぱり秀は優しいなあ。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。俺のことは代表でも雄二でも、好きなように呼んでくれ。」

ふむ、じゃあ

『ウジ虫野郎』

「それはやめろ！」

ちっ、つまらねえな。まあそれでも呼ぶけどね。

「さて、皆に一つ聞きたい。」

雄二とやらがゆっくりと、全員の目を見るように告げる。こいつは
：できるな、やればAクラスを狙えるんじゃないか？
そいつの視線が教室内の各所に移りだす。

かび臭い教室。

古く汚れた座布団。

薄汚れた卓袱台

思わず俺も釣られて見てしまう。

「Aクラスは冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしい
が――」

一呼吸置いてから告げる。秀の耳は塞いでおいた方がいいか。

「――不満はないか？」

「――「大ありじゃあっ!!」「――」

：すげえ、二年F組魂の叫び。きょんとした秀の顔かわいいなあ。

「何があったのじゃ？何故か皆怒っておるし。」

『この教室に不満があるんだってさ。』

「ふむ、まあ確かに酷すぎるがのう。」

「これは代表としての提案だが――」

雄二は野性味満点の八重歯を見せ、

「――FクラスはAクラスに〈試験召喚戦争〉を仕掛けようと思う。」

こうしてFクラス代表の坂本雄二は戦争の引き金を引いた。

第4問 Dクラスへ宣戦布告

第3問

問 以下の英文を訳しなさい。

「This is the bookshelf that my grandmother had used regularly.」

姫路瑞希の答え

「これは私の祖母が愛用していた本棚です。」

教師のコメント

正解です。きちんと勉強していますね。

土屋康太の答え

「これは」

教師のコメント

訳せたのはThisだけですか。

吉井明久の答え

「☆●◆▽」♪*×

教師のコメント

できれば地球上の言語で

神崎龍斗の答え

「私の祖母は六年前からずっと三途の川を泳いでいます。」

教師のコメント

…その、すいません。

Aクラスへの宣戦布告。常識的に考えたら不可能だよな。

「勝てるわけがない。」

「これ以上設備を落とされるなんて嫌だ。」

「姫路さんがいたら何もいらない。」

それなのにあんな自信ってことは何かしらの策があるんだよな。最後のやつ誰だ？まったくもって関係なくね？

「そんなことはない。必ず勝てる。いや、俺が勝たせてみせる。」

へへ。

『おい雄二。そこまで言うんだ。何かしらの根拠はあるんだよな？』

「ふむ、確かにのう。その根拠を教えてはくれぬか？」

雄二は自信に満ちた目でまっすぐ見てから告げた。

「根拠ならあるさ。このクラスには試験召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている。おい、康太。昼に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に来い。」

「……………！！（ブンブン）」

「は、はわっ」

…………何やってんだか。否定してるけど昼の跡隠しできてないし。

「土屋康太。こいつがあ有名な、寡黙^{ムツツリーニ}なる性識者だ。」

「……………!!（ブンブン）」

『…秀、ムツツリーニって?』

「うむ、ムツツリーニという名は男子には畏怖と畏敬を、女子には軽蔑を以て挙げられる、要するにムツツリスケベというわけじゃ。」なるほど。

「ムツツリーニだと……?」

「馬鹿な、ヤツがそうだというのか……?」

「だが見る。あそこまで明らかな覗きの証拠を未だに隠そうとして
いるぞ……」

「ああ。ムツツリの名に恥じない姿だ……」

……何か、畳の跡を手で押さえてる姿が哀れだな。あそこまでは
とは、確かに異名は伊達じゃない。

「姫路のことは説明する必要もないだろう。」

「えっ? わ、私ですか?」

「ああ。うちの主戦力だ。期待している。」

『秀、あいつは?』

「姫路は本来はAクラス入り確定だったんじゃがテスト当日に熱を出して無得点になったんじゃ。」

ふうん。まあ、それに

『それにお前もいるしな？神童さん？』

「ああ、俺も全力を尽くす。」

「確かになんだかやってくれそうな奴だ。」

「実力はAクラスレベルが二人もいるってことだよな！」

Aクラスレベルが二人いるってだけでクラスの士気が上がりまくってる。

「それに、吉井明久だっている。」

……シン——

士気が一気に下がった。

「ちょっと雄二！どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！全くそんな必要はないよね！」

ハッハッハ、面白いやつだな。

「誰だよ、吉井明久って。」

「聞いたことないぞ。」

吉井、いや明久でいいか。

「そうか。知らないようなら教えてやる。こいつの肩書きは《観察処分者》だ。」

……あれ？観察処分者ってある意味バカの代名詞じゃ……

「……それって、バカの代名詞じゃなかったっけ？」

「ち、違うよっ！ちよっとお茶目な十六歳につけられる愛称で「そ」うだ。バカの代名詞だ。」肯定するな、バカ雄二！

愉快的連中だな、これなら一年間楽しめそうだ。

「龍よ。」

『どうしたの？』

前の席にいる秀が話しかけてきた。

「龍の二つ名は教えてみたらどうかのう？」

『面白そうだね。わかった。』

俺は立ち上がって手を叩いて視線を集めた。

『俺の二つ名は《死神》以外にも《龍神》もあるぜ？』

「「「何だってえ!!!!」」」」

うわぁ、予想以上だ。

「あいつが……」

「確か龍神って小学生の時に薬学の論文とかを発表したって言う、あの龍神か……」

「じゃあAクラスが三人も……」

「これなら、これなら勝てる!」

士気は最高だな。

「とにかくだ。俺達の力の証明として、まずはDクラスを征服してみようと思う。皆、この境遇には大いに不満だろう?」

「当然だ!!!」

「ならば全員筆を執れ!出陣の準備だ!俺たちに必要なのは卓袱台ではない!Aクラスのシステムデスクだ!」

「うおおーっ!!」

「明久にはDクラスへの使者になってもらう。」

確か、下位勢力の宣戦布告の使者って大抵酷い目にあうよね?

「大丈夫、俺を信じろ。俺は友人を騙すような真似はしない。」

いや、思いつきり騙してるよね！

「わかったよ。それなら使者は僕がやるよ。」

「ああ、頼んだぞ。」

ええ！騙されてるからね！

「龍、いつものことなのじゃ。」

ああ、秀が悟ってるよ。

第5問 FクラスがAクラスに勝てる理由（前書き）

サブタイトルって難しい。だれか！俺にサブタイトルをつける才能を！サブタイトル以前に文才がorz

第5問 FクラスがAクラスに勝てる理由

「騙されたあっ！」

やっぱり。こいつは…馬鹿だな。

「やはりそうきたか。」

「やはりって何だよ！使者への暴行は予想ついていたのか！」

「当然だ。そんなことも予想できないで代表が務まるか。」

『予想がついてたんなら少しは教えておいてやれよ。』

「龍の言う通りじゃ、さすがに可愛いそうじゃ。」

「二人の言う通りだよ！僕に謝れ！」

二人は本当に友達なのか？今日だけで4回くらい疑問に思った。

「吉井君、大丈夫ですか？」

ふむ、馬鹿だからそんなことないと思っていたが、意外とモテるのか。

「あ、うん。大丈夫。ほとんどかすり傷。」

「吉井、本当に大丈夫？」

「平気だよ。心配してくれてありがとう。」

おお、二人にも。以外と

「そう、良かった……。ウチが殴る余地はまだあるんだ……。」

……………は？

『なあ秀、これって。』

「うむ、去年からのじゃ。」

『そ、そうか。』

まあ、それなら、なれるしか

「そんなことはどうでもいい。それより今からミーティングを行うぞ。」

ないはずがない！いや、むしろまでもでいたい！

「あの、痛かったら言ってくださいね？」

「……………（サスサス）」

『康太、畳の跡ならもう消えたぞ?』

「……………!!」(ブンブン)」

あそこまでやっておきながらまだ否定か、凄いやつだな。

『じゃあ行くか。』

「そうじゃの。」

秀と話しながら校内を歩いていくと、先頭の雄二が屋上に通じる扉を開けて太陽の下に出た。雲一つない空から眩しい光が差し込む。

「明久。宣戦布告はしてきたな?」

雄二がフェンスの前にある段差に腰を下ろす。

「うん。今日の午後開戦って言ってきたよ。」

『今日の午後か。秀、優ちゃんに放課後教室で待っててって言うておいてくれない?』

「わかったのじゃ。それじゃ、行ってくるかのう。」

秀は立ち上がると屋上を出ていった。

「明久、今日はしっかりと昼飯を食っておけよ。」

「それならパンの一つでもおごってくれるといいな。」

『え? 明久って飯食ってないの?』

「失礼な! 僕だって飯くらいはちゃんと食ってるよ。」

そうだな、さすがにバカでも食ってるよな。

「……あれはあれは食べていると言えるのか?」

「何が言いたいのか、雄二。」

「いや、お前の主食って——水と塩だろう?」

……………え?

「失礼な! きちんと砂糖だって食べているさ!」

おお、ジーザス。俺はこのクラスに染まってしまうのか。

「ただいまなのじゃ。って龍、どうしたのじゃ?」

『ああ秀か、おかえり。いや、水と塩と砂糖で生きていける人は初めて見たから。』

「明久のことか? ワシも初めて聞いたときは驚いたのじゃ。それよりも昼飯はどうするんじゃ?」

『昼はとりあえず携帯食料を持ってる。』

「相変わらずじゃのう。ならワシのお弁当一緒に食べてくれんかのう？今日はワシが作ったのじゃが。」

『いいの？でも、秀の分が無くなっちゃうよ？』

「平気なのじゃ。今日は多めに作ってしまつてのう。」

『ありがとう。じゃあ貰うね。いただきます。』

「召し上がれなのじゃ。」

『美味しい！料理かなりうまくなったね。どうしたの？』

「いつからうまくなったんだ？前はそんなじゃなかったのに。」

「うむ、中学になってから毎日姉上と交代で作っていたからのう。かなり自信があるのじゃ。」

『え？これ秀が作ったの？凄い頑張ったんだね。』

マジで凄いな。

「そろそろ戦争のミーティングを始めるぞ。」

『それで？なぜEクラスからにしまったんだ？』

「あ、それ僕も思った。」

「確かにのう。どうしてじゃ？」

「ああ、Eクラスとは戦う意味がないからな。今の俺なら絶対に勝てる。確かに振り分け試験の時点では向こうが強かったかもしれないが、明久。ここにいる面子をよく見てみる。」

「えーっと、美少女が二人にバカが二人にムツツリが一人、さらに天才が一人だね。」確かに、俺と姫路がいれば二人でEクラスは制圧できそうだ。

「なにっ！誰が美少女だと！」

「……………（ぽっ）」

「どうして二人が！僕だけじゃツツコミ切れない！」

…もはや何も言うまい。

『まあまあ、二人とも落ち着いて。』

「そ、そうだな。」

「いや、むしろそれ以前の問題じゃ。」

本当に大丈夫か？

「ま、要するにだ。姫路に問題のない今、Eクラスとは正面からやり合っても勝てる。Aクラスが目標である以上はEクラス何かとやり合っても意味がないってことだ。」

「？それならDクラスとは正面からぶつかるのは厳しいの？」

「ああ。確實とは言えないな。」

「だったら最初っからAクラスとやり合おうよ。」

なるほど。最初っからAクラスとやれば済む話だが、さすがは雄二だ。神童と言われただけある。

『理由その1、初陣だから派手に決めたい。』

理由その2、召喚獣の操作に慣れさせるため。

理由その3、何か雄二なりの理由があるんだろう？
って所か？』

「ああ、その通りだ。」

「でも、さっきの話は勝てなきゃ意味がないよ？」

「確かにのう。勝てるのか？」

愚問だな。雄二と目配せをしてからはつきりと告げた。

『「負けるわけがないさ。俺らが（お前らが）雄二に（俺に）協力すればな。いいか？俺らのクラスは——最強だ。」』

「いいわね。面白そうじゃない！」

「……………そうじゃの。」

「……………（グッ）」

「が、頑張りますっ。」

打倒Aクラスか。こいつらのためにも頑張ってみるか。

「そうか。それじゃ、作戦を説明しよう。」

R y u t o s i d e e n d
H i d e y o s i s i d e

打倒Aクラス、龍はわかっておるのかのう？ いや、わかってないの

う。Aクラスには、姉上がいることを。

H
i
d
e
y
o
s
i
s
i
d
e
e
n
d

第6問 開戦! Dクラス

第4問

問 以下の問いに答えなさい。

『(1) $4 \sin X + 3 \cos 3X \parallel 2$ の方程式を満たし、かつ第一象限に存在する X の値を一つ答えなさい。

(2) $\sin(A+B)$ と等しい式を示すのは次のどれか、1～4の中から選りなさい。

1 $\sin A + \cos B$

2 $\sin A - \cos B$

3 $\sin A \cos B$

4 $\sin A \cos B + \cos A \sin B$ 』

姫路瑞希の答え

『(1) $X \parallel \pi/6$

(2) 4』

教師のコメント

そうですね。角度を『 $\circ$ 』ではなく『 π 』で書いてありますし、完璧です。

土屋康太の答え

『(1) $X \parallel$ およそ3』

教師のコメント

およそをつけて誤魔化したい気持ちもわかりますが、これでは解答に近くても点数はあげられません。

吉井明久の答え

『(2) およそ3』

教師のコメント

先生は今まで沢山の生徒を見てきましたが、選択問題でおよそをつける生徒は君が初めてです。

神崎龍斗の答え

『めんどくさいから優ちゃんとう秀の昔話をしてもいいですか？』

教師のコメント

後で職員室に来てください……少し興味があります。

『あー、暇だあ。』

「暇と言っておきながらどんなスピードで問題解いてるんだよ。」
ただ今Dクラスと戦争中。でも俺は振り分け試験を受けていないから回復試験を受けているんだが。

『せんせー、お代わり。』

「この教科はもう終わりです。次の強化を受けて下さい。」

そう、テスト教科は十科目で一教科無限なんだが、ここまで解く人はいなかったらしい。つまり。

『せんせー、やっぱり問題少ないでしょ。』

「あなたが凄すぎるんです！高橋先生ですらここまでは解けませんよ！」

はあ。テストが足りないらしい。

『雄二、秀の部隊はどんな感じ？』

「そろそろ撤退し始めるな。」

『そうか、じゃあ横田くん。明久に『秀の援護をしなかったら殺す。』って伝えて。』

「わかった。」

これで不安要素は無しかな。しばらくしたら秀達の前線部隊が帰ってきた。

『秀、大丈夫？怪我してない？』

「うむ、大丈夫じゃ。心配してくれてありがたいのじゃ。それよりも、今どれくらい終わったのじゃ？」

『ああ、今4教科目。』

「まだ三時間位しかたっていないのにもうそんなに解いてしまったのかのう。やっぱり龍は凄いのう。」

『まあね、それよりも秀も回復試験受けたら？』

「うむ、そうするとうかのう。」

前線部隊も大分減ったなあ。

『せんせー、お代わり。』

「もう終わりです！」

「速すぎるぞ！」

うわ！雄二がキレた！

『まあまあ、後は計算科目だから一時間で十枚はいけないし。たぶんこれが最後じゃない？あと一時間かからないでしょ？』

「……まあいい。」

「ちょっと！離しなさい！今から吉井明久を殺してやるんだからーっ！」どうしたんだ？かなり物騒だな。

「落ち着いて！さっきから言ってるように吉井隊長は味方だから！」

『……何やってんだ？今は戦争中だぞ？』

本当に何考えてんだか。「離しなさい！」

「落ち着け島田。今はそれよりも回復しろ。」

『その通りだぞ。あ、ありがとう須川くん。援護しに行つてあげてくれ。』

「わかった。」

さてと、続けるか。

「代表！吉井隊長が偽情報を流して先生の数を減らしてほしいって。」

「なら、船越先生（45歳 独身♀）に明久が体育館裏で生徒と先

生の垣根を越えた話があると放送しろ。」

「わかった。」

かなり邪悪な顔をしているぞ、雄二。

「横溝が戦死。Dクラスは数学の木内を呼び出したか。少しきついな。」

『なら俺が行こうか?』

そろそろ中堅部隊も厳しいだろうし。

「いや、龍斗は次の戦争まで待機だ。お前は我がFクラスの秘密兵器だからな。それよりも何枚目だ?」

『この問題が終われば六枚目にいける。せんせゝ、終わりました。』

「はあ。もう何も言いません。あと十分です。」

『もういいです。終わりでもいいですか?』

「わかりました。お疲れさまでした。」

よし、暇だ!

「戦争には出さんぞ。」

『えっ? 声に出してた?』

「顔に出た。」

『そうか。なら起動。アウエイクン選択日本史。そして試験サモン召喚。』

床に幾何学模様が現れ、黒い服、黒いズボン、黒いコート姿で腰に二本の日本刀を差した召喚獣が現れた。

『へえ、これが俺の。確かに感覚を共有しているのがわかる。けど、動きづらいな。』

まあ最初はこんなもんだよな。けど便利だな。観察処分者じゃなくて特別待遇者ってのは。

「おまえ! 何をしたんだ!?」

はは、ビックリしてるよ。

『俺は特別待遇者でな。物理干渉、感覚の共有、教科指定有りのフィールド展開が出来るんだ。』

神崎龍斗

日本史 998点

『あれ？漢字ミスった？』

「いいえ、選択肢でアをマと書いてましたよ。」先生、なぜ笑顔？
もしかしてこの点数に嫉妬したか。

『まあいい。じゃあ雄二、このまま慣熟訓練してるよ。』

以外と、難しい。確かにこれなら力業しかできないな。

「ああ、こっちもそろそろ最終決戦だ。」

『じゃあモンハ○のラオシャンロ○のBGMでもいる？』

「いらん！」

『ふうん。まあ行っただらっしゃい。』

「ああ、行ってくる。」

最後に拳を合わせてから出ていった。

第7問 早まった再開（前書き）

12月に定期テストがあるので、12月半ばまで更新はできません。今後も粉骨碎身全身全霊の覚悟で頑張りますので、どうか見捨てないでください！

第7問 早まった再開

やっぱ難しいなあ。剣を縦に振り横に振ってからバックステップ、袈裟斬りしてから返してとしていたら皆が戻ってきた。

『どうしたんだ？勝ったのか？』

「ああ、俺らの勝利だ。」

まああんなに嬉しそうにしてたらそうだな。

『ふうん。じゃあどんな取引をして来たんだ？』

いきなり雄二が真剣な顔をしてきた。

「……どこまでわかっている？」

やはり疑問に思うか？

『俺の推測ではこんな感じかな。』

雄二に4つに折った紙を渡したらそれを読んで驚いた、やっぱり合ってたか。

「その通りだ。だが、まだ言うなよ？」

『わかってるさ。それよりも、もう解散でいいか？』

「ああ、じゃあな。」

『おう。じゃあ秀、行こうぜ？案内してくれ。』

「うむ、わかったのじゃ。」

優ちゃんもあれから可愛くなってるのかなあ。

「ほれ、ここじゃ。」

あつ、ちよつとからかつてみようかな。

『じゃあ秀はちよつと待っててね。少し遊んでくるね。』

「はあ、からかい過ぎて関節を壊されないように気を付けるんじゃないぞ。」

『はいはい』

さてと、優ちゃんは…いた。真っ直ぐに進んでいき優ちゃんの前で止まった。

『ねえ君、俺はFクラスの神崎って言うんだけどこれから遊びにい

かない?』

おっ、かなり不機嫌そうな顔だな。

「嫌よ、何でアタシがあなたと遊ばなきゃいけないのよ。」
ちよつと面白いかも、秀が入り口で真っ青になってるし。

『まあまあ、そう言わずにさ。』

「お断りよっ! あなたもさっさと帰って勉強したら? 遊んでばかりだからFクラスになるのよ!」

『はは、あっはっはっはっ!』

こりゃ面白い。俺だとわかってないな。

「何がおかしいのよ!」

『何がって? それは俺のことをさっぱり忘れちゃってるんだもん。やっぱり小学校の頃の思いでは忘れちゃった? ねえ、優ちゃん?』
これだと思い出してくれるかな?

「小学校の頃って?」

これじゃ無理か。なら。

『それとも隣の家の友達も忘れちゃった?』

「えっ! もつ、もしかして龍!? 帰ってきたの?」

『やつと思ひ出してくれたね。ただいま。』

「……………」

あれ? 何もいってくれない。うつむいてるし、どうしたんだろう?

『! ! ! ! !』

なっ、泣いてる! ?

『どっ、どうしたの?』

「ふええええん!」

ええええ! なぜ泣いてるの!

『落ち着いて。ねっ? ほら頭でなでしてあげるから。』

泣いている優ちゃんを抱きしめながらなでしていたら少し落ち着きたみたいだ。ここだけの話、泣いている優ちゃんに見とれてしまった。

「何で…何で連絡…してくれなかったのよお。ずっと…ずっと連絡

してくれるの：待ってたんだからあ。」

『ゴメンね、でもこれからはずっと一緒だよ。取り敢えず、帰ろう？今日は優ちゃんと秀の二人にご飯を作ってあげる。』

「本当に！楽しみにしてるわ。」

「うむ、楽しみじゃのう。」

『あつ、そうだ秀。来週にはあいつもこっちに来るから。』

危ない危ない。忘れるとこだった。

「それは真か！？」

『ああ、来週までには来るってさ。』

「楽しみじゃのう♪」

うわぁ、凄い喜んでる。

「相変わらず天音の事になるとだらしなくなるわね。」

「む、そういう姉上こそり——あつ、姉上、その関節はそっちにはまがらなっ……………」

メキメキッ

相変わらずだねえ。

『取り敢えず、家人ろうよ。』

「うむ、そうじゃのう。」

「ええ、そうね。」

ガチャッ

「……………お帰りなさい、兄さん。」

ボタン

『…………なあ、俺。来週って言ったよね？』

「ええ。」

「うむ、それでも早く会えるなら気にしないのじゃ。」

…はあ。

『ただいま、天音。』

「……………お帰りなさい、兄さん、優子。お帰りなさい、秀君。…
…会いたかった。」

俺の妹、神崎天音は涙を流しながら、普段は無表情な顔に笑みを浮かべて秀に抱きついた。

R y u t o s i d e e n d
Y u k o s i d e

「……………お帰りなさい、兄さん、優子。お帰りなさい、秀君。…
…会いたかった。」

なっ!?!いきなりどうしたのよっ!?

「どっ、どうしたんじゃ!」

「……………四年間、ずっと秀君に会うために、ただそれだけを考えて耐えてきた。もう、離れたくない。」

「うむ、ワシも、もう離れたくない。これからはずっと一緒じゃ。」
はあ。二人とも素直でいいなあ。アタシだって龍に抱きしめてほしいけど、どうしてできないんだろう。

『ほらほら、そんなどこにいないでさっさと入れ。二人は適当にくつろいでいいから。優ちゃん、一緒に夕飯作ろう。』

「……………わかった。」

「うむ。」

「わかったわ。」

『あ、部屋であんなことかしちゃダメだからね。そういうことは二人きりの時にしてね。』

……………

「……………
／／／／／

「なっ、何を言ってるんじゃないっ……／＼／＼／＼」
『どうしたの？ 優ちゃん、何かすごくいい笑顔で——ちよっ、ちよっと待って！ 俺の関節はそっちには曲がらなっ……！！』
何言ってるのよ！

Y u k o S i d e e n d

オリキャラ（前書き）

遅れてすいません！テストは一週間前に終わったんですがモンハン3rdをやっていて更新忘れていました！
本編は明日投稿します。

オリキャラ

神崎 天音

身長155cm

体重????

黒目黒髪で、髪は腰辺りまで伸ばしている。身長が低く細身でよく年下と間違われる。

基本的に無表情で余り表情を変えないが、龍斗か優子か秀吉がいるときだけ少し表情が変わる。特に秀吉にはよくなついている。

無表情だから冷静と間違われやすいが、表情の出し方が分からないだけで実は龍斗以上に感情的。普段はボーっとしている。

龍斗とは違い瞬間記憶能力は持っていないが学力が高く、容姿も良く、龍斗の妹ということもあって《龍の巫女》とも呼ばれている。

龍斗とは違い徒手空拳と薙刀が得意で、龍斗の居合いも白羽取りで止めることが出来る。喧嘩の時は籠手か鉤爪を着けて高速で動きながら攻撃する。

召喚獣は巫女服で籠手を着けていて薙刀を持っている。相手によって徒手空拳と薙刀を使い分ける。
腕輪の効果

徒手空拳

「崩龍拳」

拳に気をためて振り抜くと同時に全てを打ち砕く龍を召喚する。龍の威力は消費する点によって変わる。

薙刀

「月光斬」

薙刀の刃に不可視の刃を付けて離れた敵を斬る。不可視の刃は消費する点に応じて長くなる。

第8問 昼休みの平和な一時

第5問

問 以下の文章の○に正しい言葉を入れなさい。

『光は波であって、○である』

姫路瑞希の答え

『粒子』

教師のコメント

よくできました。

土屋康太の答え

『寄せては返すの』

教師のコメント

君の解答はいつも先生の度肝を抜きます。

吉井明久の答え

『勇者の武器』

教師のコメント

先生もRPGは好きです。

神崎龍斗の答え

『レベルの艦隊を焼き尽くすの』

教師のコメント

先生もガンダムは好きです。

神崎天音の答え

『ソロモンを焼いた連邦は許さないの』

教師のコメント

その後、Fクラスの皆が美少女同士の絡みとか何とかで鼻血を吹き出したが、特に何事もなく昼休みになった。

「うあー……づがれだー。」

『どんな発音したらそんな声が出るんだよ。でもまあ、確かに疲れたな。』

ビックリしたぞ。

「うむ。疲れたのう。」「……………疲れた。」

少し疲れた様子の秀吉に、あまり表情には出ないが疲れた様子の天音もいた。

「……………（コクコク）」

無口で存在感の薄い康太もいる。

「よし、昼飯食いに行くぞ！今日はラーメンとカツ丼と炒飯とカレーにすっかな。」

『食い過ぎだから！』

というより、全然疲れてなさそうだな。昼飯のメニュー含めてどんな体してるんだよ。

「ん？吉井達は食堂に行くの？だったら一緒に一緒にいい？」

『じゃあ俺達は優ちゃんの所に行くか。』

「うむ、そうするかのう。」

「……………わかった。」

じゃあレッツゴー！

『やっぱり広いねえ。Fクラスとは全然違うね。』

「うむ、いつ来ても凄いのう。」

「……………それよりも、優子の所に行こう？」

あ、そうだった。

『えーと、そこの人ちょっといいですか？』

「……誰？」

返事をくれたのは腰まで届きそうな黒い髪、陶磁器のように白い肌、天音みたいに無表情な人だった。

『ああ忘れてた。Fクラスの神崎龍斗です。』

「……………神崎天音です。」

「木下秀吉じゃ。」

Fクラスって言った途端侮蔑するような視線を数人から感じた。やっぱりそういう人もいるんだ。

「……………Aクラス代表、霧島翔子です。」

『木下優子はいる?』

「……………少し待ってて。」

霧島さんはそう言うのと奥の方へ進んでいき、少ししたら優ちゃんを連れて戻ってきた。

「どうしたの?」

『皆で飯食おうと思って。それに優ちゃん、今日弁当忘れたでしょ?』

「あつ、ありがとう。こっちの人も何人かいるけどいい?」

『いいよ。じゃあ早く食べよ?』

「ええ、こっちよ。」

優ちゃんに案内されて着いたところにはさっきの霧島さんと、緑色の髪をショートカットにしたボーイッシュな少女だった。

「はじめまして。ボクは工藤愛子だよ。愛子って呼んでね。」

『神崎龍斗だ。よろしく。』

「……………神崎天音です。」

「木下秀吉じゃ。姉上がいつも世話になっておるのう。」

「ほら、挨拶はその辺で食べましょう?」

「……………昼休みの時間がなくなる。」

『そうだな。いただきます。』

「……………いただきます。」

「「「いただきます。」」」」

飯を食っていたら突然愛子が話しかけてきた。

「そういえば、龍斗と優子って付き合ってるの?」

『げほっげほっ!何を突然聞いてくるんだ!』

「そつ、そうよ！アタシ達はまだ付き合っていないわよっ！」

「ふ〜ん？まだね？それじゃあいつ付き合うのかな？」

「……私も気になる。」

「愛子！それに代表まで！？」

「……………そろそろはつきりさせておくべき。」

「天音までっ！アタシの味方がいないっ！」

そろそろ優ちゃんがピンチだな。さすがに助けた方がいいかな？でも、できれば付き合いたいな。

『それよりも、俺は天音と秀の二人の方が気になるな。』

「ワシらの？」

「……………？」

「そつ、そうよ。二人はどうなのよ。」

動揺しながらも頑張って話を変える優ちゃん。ああ、萌えるなあ。

「何か変なこと考えてない？龍。」

『いや何も？』

鋭い。

「……………私たちは特に、婚約したくらい？」

「うむ。まだそれくらいじゃのう。」

！？ マジか。そこまでいってるのかよ。

「ふ〜ん、二人とも結構進んでるんだね。ボクもいつかそんな人と出会いたいね。」

「……私も雄二になりたい。それよりも、そろそろ時間。」

「あ、ホントだ。じゃあまたね。」

「……三人ならいつ来てもいい。」

『そうか、ありがとう。また来るよ。』

「うむ、また来るかのう。」

「……………うん。」

さてと、午後も大変だなあ。

第9問 開戦前日、悪い予感（前書き）

あけましておめでとうございます。今年も一年間よろしく願います。

4月から受験生になるのでその辺りから更新が不定期になるかもしれません。書くスピードが遅く（モンハンや他の小説を読んだりも原因の1つですが）、さらには塾の冬期講習とその宿題で書くスピードが下がりがまわっています、これからも粉骨碎身全身全霊で頑張りますのでよろしく願います。

第9問 開戦前日、悪い予感

第6問

問 以下の問いに答えなさい。

『ベンゼンの化学式を書きなさい。』

姫路瑞希の答え

『 C_6H_6 』

教師のコメント

簡単でしたかね

土屋康太の答え

『ベン+ゼン=ベンゼン』

教師のコメント

君は科学をなめていますか。

吉井明久の答え

『 $BEENZEN$ 』

教師のコメント

あとで土屋くんと一緒に職員室に来るように。

神崎龍斗の答え

『 C_6 (天音に続く)』

神崎天音の答え

『 H (秀君に続く)』

木下秀吉の答え

『 6 』

教師のコメント

三人で分けないでください。

「……言い訳を聞こうか。」

ん？何だ？明久が雄二に詰め寄ってるぞ？

「予想通りだ。」

「くきいー！ころぐべっ！」

『どうしたんだ？雄二。』

とりあえず鳩尾を蹴つといた。

「ああ、明久にBクラスへ宣戦布告に行ってもらった。」

『ふうん。明日の朝も回復試験だから、午後から？』

「ああ。」

はあ、めんどくさい。転校してばっかの天音にはちょうどいいかもしれないがな。

『なあ雄二。Bクラスの代表ってどんなやつだ？』

「かなり卑怯なやつだ。喧嘩に刃物は標準装備デフォルメ、球技大会では相手チームに一服盛ったりするやつだ。」

かなり卑怯だな。

『だったらこの戦争中、俺と天音はお前の近衛兵にしておいてくれないか？念のために。』

二人がついていれば安心できる。

「…わかった。できれば前線にいてほしかったが、背に腹は代えられないか。頼んだぞ。」

『ああ。任せろ。』

「……………任せて。」

「ワシも近衛ではダメかのう？」

秀のやつ、ただ天音のそばにいたいだけだな？俺だって優ちゃんのそばにいたいのに

「そうだな。じゃあ俺の近衛兵は神崎兄妹、秀吉、近藤、前川、中村の六人で決定だな。」

『ああ。じゃあまた明日。帰ろうか。』

「……………わかった。」

「わかったのじゃ。」

明久がまだうずくまってるけど、平気だよな。

R y u t o s i d e e n d

Y u k o s i d e

授業が終わったから龍と一緒に帰ろうとしたんだけど、

「Fクラスってこんなに酷かったの？」

そこにあっただのは腐りかけた畳に卓袱台の部屋だった。アタシのクラスとは大違いね。それよりも、龍を見つけないと。何処にいるのかしら？

「あれ？木下さんどうしたの？」

「このクラスに神崎龍斗はいないかしら？」

「ああ神崎か。あそこにいるよ。」

「ありがとう。」

どうしよう。ただ一緒に帰ろうと言うだけなのに身だしなみに気を付けるなんて、いつも通りにいけばいいのよ！

「龍、一緒に帰りましょ？」

『いいよ。じゃあ皆で商店街で夕飯の材料でも買って帰るか。何がいい？』

久しぶりに龍のハンバーグが食べたいわね。

「ハンバーグが食べたいわ。」

「ワシもじゃ。」

「……………秀君が食べたいなら何でもいい。」

天音はいつも秀吉にベツタリして、アタシも龍とくつつきたいのに、恥ずかしくないのかしら？

『じゃあ決まりだね。』

「そういえば、何で四人は一緒に夕飯の話をしてるんだ？」

確かFクラス代表の坂本雄二だっけ？代表がいつつも嬉しそうに話してる人。

『あれ？話してなかったっけ？俺らは家が隣だから皆一緒に飯食ってるんだよ。』

「初耳だな。」

「諸君。ここはどこだ？」

「「「最期の審判を下す法廷だ！」」」

「異端者には？」

「「「死の鉄槌を！」」」

「男とは？」

「「「愛を捨て、哀に生きるもの！」」」

「宜しい。これより――――ニ―F異端審問会を開催する！」ニ―F異端審問会？いったいこのクラスは何なのよ！？。

「――――罪状を読み上げたまえ。」

「はっ。須川会長。えー、被告、神崎龍斗（以下、この者を甲とする）は我が文月学園第二学年Fクラスの生徒であり、この者は我らが教理に反した疑いがある。甲の罪状は拉致及び背信行為である。本日未明、甲が二年Aクラスである木下優子及び我がFクラス木下秀吉（以下、この者達を美人姉弟とする）に対して強制的に拉致しようとしていたところを我らが同胞が目撃。現在に至る。今後、甲と美人姉弟の関係に対して十分な調査を行った後、甲に対して然るべき対応を――――」

「御託はいい。結論だけを述べたまえ。」

「一緒に住んでいたので羨ましいであります！」

「うむ。実に分かりやすい報告だ。」

「……………本当に何なのよ。」

「…龍。」

『任せろ優ちゃん。地獄への片道切符をこいつらにプレゼントして殺る』

いくら龍でもこの人数は……………そうでもないかしら。最後の文字が違

うとは突っ込まないでおくわ。

「……………手伝う？」

『いや、いい。一人で殺る。』

「「「異端者には死の鉄槌を！」」」

『よっしゃあ！かかってこいやあ！』

龍が木刀を構えながら叫び始めた。この人達半殺し決定ね。

Y u k o s i d e e n d

R y u t o s i d e

五分後

「神崎龍斗、この恨みはかならぐぎゃあ！」

最後の一人を倒したら教室に残っていたのは俺を除いて優ちゃん、

秀、天音、雄二、島田、姫路の六人だけだった。

『こんなもんか、帰ろうぜ。』

「……………わかった。」

「「「……………」」」」

どうしたんだ？

『どうしたの？』

「いや、五分で全員がやられるとは思ってなくてな。」

「やっぱり龍は強いわね。」

「そうじゃのう。」

『さっさと帰ろうぜ。じゃあな、雄二』

「ああ。じゃあな。」

「あつ、待ってよ。」

「……………秀くんも行こ？」

「うむ？どうして腕を組むのじゃ？」

「……………だめ？」

「いつ、いや。そんなことないのじゃ……………／／／／／」……………

嬉しい……／＼／＼／
少しは自重してくれ。

第10問 龍と卑怯の試獣召還

次の日。午前中にテストを受け、昼食を食べ終えた（相変わらず三人でAクラスの世話になったが）後の午後。

「さて皆、総合科目テストご苦労だった。」

ああ。本当に疲れたぞ。しかし秀のやつ、隣の天音にバレないように答えを教えてもらってたな。

「午後はBクラスとの試召戦争に突入する予定だが、殺る気は充分か？」

「「「おおーっ！」」」

それにしてもこのクラスのモチベーションは一向に下がらないな。唯一の武器と行っても過言ではない。

「今回の戦闘は敵を教室に押し込むことが重要になる。その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいかない。」

「「「おおーっ！」」」

『そこで、前線部隊は明久を副指揮官として足の早い十人で機動部隊を編成、全力で走って渡り廊下に敵よりも先についてほしい。そして、姫路を前線の指揮官として主力部隊を率いて機動部隊の後についていってくれ。機動部隊は主力が来るまでの足止めだから、とにかく避けることに集中して絶対に戦死するな。また、必ず多対一で戦うようにして一人ずつ倒していくように。』

今回は近衛隊隊長と共に参謀長になったから作戦の指示は全て任せられた。

「「「うおおーっ！」」」

キーンコーンカーンコーン

「よし、行ってこい！目指すはシステムデスクだ！」

「「「サー、イエッサー！」」」

返事と共に機動部隊が全力疾走で駆けていき、主力部隊が姫路の足に合わせて進んでいった。

『これで俺らは少し待機だな。』

「ああ、前線の作戦はうまくいくだろう。姫路の火力もそうだが、明久もこういうときには頭が良く回る。」

やっぱり何だかんだで明久のことは信頼してるんだな。

「…何だか異様にイラつく視線だな。」

『いや、明久のことは信頼してるんだなと思っただけだ。』

「うむ、何だかんだでいつも二人で悪さしてるからのう。」

「……………すごい信頼しあってる。」

と、天音を膝の上に乗せながら話してくる秀吉と天音。我が妹がらすごい甘えまくりだな。

「Cクラス代表の小山よ。Fクラス代表の坂本はいる？」

「俺だが、どうした？ご覧の通り俺らは今試召戦争をしているところだが。」

「Bクラス代表の根本が協定を結びたいから特別教室まで来てほし
いって。」

「なら、何故Cクラスの代表であるお前が来たんだ？」

「協定の立ち会いのためよ。」
なるほど。

「わかった。行こう。」

『雄二、俺は一応残しておく。教室を空けるわけにはいかないし、嫌な予感がする。』

「わかった。」

こうして俺を残して全員が行ってから一分もしないうちに誰かの話し声が聞こえてきた。

「もうこの教室には誰もいないよな。」

「ああ。今頃根本と協定を結んでいるはずだ。」

「だがあいつも卑怯なことだけには頭が回るからうまい蜜は吸える
んだけどな。」

「ははは。確かに。」

こいつらはBクラスか。だから協定なんか結ぼうとしたのか。

『おい、お前ら。誰もいなくなんかないぜ？俺がいるぞ。』

やつらが机にナイフを突き立てようとしたときに掃除用具入れから飛び出した。

「なっ。」

「はあ？」

「誰だてめえ！」

三人か。まあ楽勝だな。

『Fクラスの神崎龍斗だ。貴様らに数学で勝負を挑む。アウェイ名セレクト起動選択数

学。召喚^{サモン}』

「なっ、何でお前が使えるんだよ！くそっ、やるぞ！召喚^{サモン}」

「「試獣召喚^{サモン}」」

Fクラス

神崎龍斗

VS

Bクラス

安藤達弥

&

佐藤啓介

&

田中太郎

数学

785点

VS

189点

&

174点

&

199点

「何だって！何でそんな点数取れんだよ！」

あゝ。喧しい。

『黙ってる。』

敵は全員、西洋の鎧を着た……モブキャラ（笑）だった。

「そんな説明の仕方すんな！」

『喧しい。地の文に突っ込むな。ほれほれ、避けなきゃ死ぬぞ。』

俺の召喚獣、黒いコートに黒いズボン、黒い服を着て腰に二本の日本刀を差している召喚獣が走っていた。目標はさっきからツツコンでくるやつ。召喚獣。剣を盾のように前に出してくるが、

『俺って斬鉄が出来るんだが……コツさえ知ってれば召喚獣でも出来るんだな。』

そう。

俺の召喚獣の振るった刀は？相手の剣もろとも（……………）
召喚獣を斬り殺した。

「なっ！」

その勢いで残りの召喚獣を斬り殺した。

「戦死者は補習！」

「いやだぁ！」

「俺は死にたくない」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい。」

……そうとう怖いらしいな。最後のやつ、マジで震えてる。

「ん？そういうえはお前ら何でこの教室で戦死したんだ？」

「えっ、あの、その。」さすがに可哀想だな。

『こいつらは俺の作戦にはまってやられたんですよ。』

「そうか。」

「（どうして助けてくれたんだ？）」

『（別に構わんだろう？まあ、これに懲りてくれたらいいよ。）』

「（ありがとう。）」

こうしてBクラスの奇襲は失敗に終わった。しかし、西村先生も教師の鏡だな。俺らのアイコンタクトが終わるのを待っていてくれたし、何があったのか聞かないでくれた。まあ取り敢えず

『暇だ!』

教室の中心で暇と叫んでみた。

第11問 Bクラス前哨戦(前書き)

今回は少し書き方を変えてみました。台詞の上下を一行開けてみましたので、前の書き方がいいか、今の書き方がいいかコメントをお願いします。それによつては今までのを修正したりしますので。

第11問 Bクラス前哨戦

「あれ？どうして龍斗は一人で残ってるの？」

『ああ、なんか嫌な予感がしてな。明久は？』

Bクラスの襲撃から数分。明久が一人に戻ってきた。

「僕は向こうの代表が根本だからなんかの嫌がらせとか妨害があるんじゃないかと思ってね。」

明久のくせに鋭いな。

「何か失礼なこと考えてなかった？」

『いや、まったく。』

「おう。何かあったか？明久か？脱走ならチョキでしばらくぞ。」

…ふつうグーだろ。

『Bクラスが三人来たから補習室送りにした。それよりも協定の方はどうなった？』

「ああ。四時までには決着がつかなかったら戦況をそのままにして続きは明日午前九時に持ち越し。その間は試召戦争に関わる一切の行為を禁止する。ってな。」

翌日に持ち込み？体力と気力がアドバンテージのこのクラスで？

「じゃが、体力勝負に持ち込んだ方がワシらにとっては有利だと思うんだがのう？」

「姫路以外は、な。神崎兄妹の力も凄いが、姫路もこのクラスの主力だ。」

なるほど。クラス全体の事を考えてか。

『だったら今日の戦争は、向こうを教室に押し込んだら終了って所か。』

「その通り。作戦の本番は明日ということになる。」

『なるほど。じゃあ俺は戦争してきていいのか？』

「ああ。神崎兄妹と秀吉はもう行っていいぞ。」

『さくてと、暴れますか。』

「……………全力を尽くす。」

「うむ、頑張るかのう。」

「僕も全力で頑張るよ。」

お互いを鼓舞しながら前線部隊に戻るとなぜか攻めあぐねていた。

「待たせたね！戦況は？」

出迎えに来てくれたのは副官の島田ではなく須川だった。

「かなりマズいことになっている。」

「え!?! どうして!?!」

『あれは、島田が人質になってる。』

「なっ!?!」

卑怯な、代表が代表なら、クラスもクラスか。

「おかげで相手は残り二人なのに攻めあぐんでいる。どうする?」

「……そうだね。とりあえず状況を見たい。」

明久の顔が一瞬で指揮官の顔に変わった。なるほど、雄二が何だかんだで信頼するわけだ。

部隊の人垣を抜けると須川の言う通り二人のBクラス生徒と捕らえられた島田及びその召喚獣がいた。そして、そばには補習担当講師もいた。

『（いけるか?）』

「（……………問題ない。私の腕輪ならいける。）」

「島田さん!」

「よ、吉井!」

「そこで止まれ！それ以上近寄るなら、召喚獣に止めを刺して、この女を補習室送りにしてやるぞ！」

何かドラマみたいだな。：召喚獣というファンタジーなものがないければ。さて、明久がどういう風に解決するか見させてもらおうか。

「総員突撃用意いーっ！」

あれ？島田が捕虜になってるのに？まあチャンスか。

「……………Fクラス神崎天音、BクラスモブキャラA、Bに英語Wで勝負を挑む。試験^{サモン}召喚」

「「モブキャラ言うな！」」

Fクラス

神崎天音

V S

Bクラス

鈴木二郎

&

吉田卓夫

英語 W

5 2 1 点

V S

3 3 点

&

18点

「なっ！？Fクラスなのに何でそんな点数なんだよ！」

「慌てるな。お前、その召喚獣をちょっとでも動かしてみろ。こいつの召喚獣を殺して補習室に道連れにするぞ。」

「……………どうするの？」

「かまわないよ！」

「ま、待て、吉井！こいつがどうして俺たちに捕まったと思っている？」

馬鹿だから。以外にないと思う。

「馬鹿だから。」

「殺すわよ。」

ぐっ！この俺が人質にされている島田に気圧されているだど？

「こいつ、お前が怪我をしたって偽情報を流したら、部隊を離れて一人で保健室に向かったんだよ。」

「島田さん……」

「な、なによ。」

島田の顔が少し赤い。

「怪我をした僕に止めを刺しに行くなんて、アンタは鬼か！」

そう言うことだったのか、なら

『やっちまえ。』

「……………わかった。〈月光斬〉」

キンッ！という高い音が響くと同時、巫女服に籠手をつけ薙刀を持っている天音の召喚獣が本物の巫女のように舞い、離れたところにいるはずのBクラスの二人の召喚獣

の腕を切り落とした。さらに舞いは続き足を斬り、胴を切り裂き、最後に首を切り落とした。舞いが終わってから数秒経ちやっとなんか動いた。

「なっ！？何が起きたんだ！」

「くそっ！腕輪か。」

「戦死者は補習！」

「ぎゃあああー！」

「たすけてえー！」

Bクラスの二人が補習担当講師に捕まっていた。自業自得だ。

「天音の腕輪の効果って何なのじゃ？」

「……………薙刀を持っている時は不可視の刃で攻撃をすることができる。」

かなり便利だな。まあそれを言うなら、俺もだがな。

「……………ほめて。」

「うむ。天音はすごいもう。」

「……………♪」

なんだこの桃色空間は。俺が空気じゃないか！俺はこの小説の主人公なんだぞ！

「落ち着くのじゃ、龍。」

「……………メタ発言はダメ。」

『頼むから地の文にはツツコまないでくれ。』

それよりも。

『いつまでそうしているつもりだ。早く回復試験を受けてこい。』

「……………作戦の邪魔だから、早く退いて。」

「…………アンタたち。ウチのこと見捨てようとしたわね。」

なんだその事か。

『仮にお前がやられたとしても、あいつら二人をやるのが優先だと思っただけだな。』

「……………Fクラスの一人を生け贄にBクラスの二人を倒せるのなら安い買い物。」

「死になさい！」

しゅっ！！（島田がパンチを繰り出す音）

ぱしっ！（天音が島田の拳をつかむ音）

『何をやってるんだ。島田は早く回復試験を受けてこい。天音も手を離すんだ。』

「……………わかった。」

「フンッ！」

そうとうキレてるな。まあいい。

『作戦継続だ！Bクラスを教室内に押し込むぞ！』

「「「うおおおー！」「」」

「えっ！？でもそれってFクラスとBクラスの間でしょ？」

「ちゃんと考えてみろ。あのクズがそんな風に解釈すると思うか？」

「うっ。確かに。じゃあどうするのさ？このままじゃやられちゃうよ。」

「いや、行こう。」

『どうするんだ？Cクラスにはやつがいると見て間違いないんだぞ？』

雄二だから考え無しとは思えないが。

「いや、行こう。ただし、全員でな。」

そう言ってニヤリと笑う雄二。なるほど、面白そうじゃないか。教室に残っているクラスメイト全員に呼びかけてCクラスへ向かった。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。このクラスの代表は？」

「私だけど、何か用かしら？」

「Fクラス代表としてクラス間交渉に来た。時間はあるか？」

「クラス間交渉？ふうん……」

「ああ。不可侵条約を結びたい」

「不可侵条約ねえ……。どうしようかしらね、根本クン？」

「当然却下。だって、必要ないだろ？」

やっとお出ましか。クズ野郎が。

「なっ！？根本君！Bクラスの君がどうしてこんなところに！」

ナイス演技！明久。

「酷いじゃないかFクラスの皆さん。協定を破るなんて。試召戦争に関する行為を一切禁止したよな？先に協定破ったのはソッチだからな？これはお互い様、だよな！」

「ああ。お互い様だぜ。」

雄二が喋り終えた途端、扉からFクラスのメンバーがなだれ込んだ。

「「『俺らFクラスがCクラス内にいるBクラス全員に勝負を挑む。試召^{サモン}召喚』」」」

「くそっ！試召^{サモン}召喚」

「「^{サモン}試獣召喚」」

Cクラスの中に召喚獣があふれた。

Fクラス15人

&

神崎龍斗

&

神崎天音

V S

Bクラス10人

数学

平均62点

&

726点

&

514点

V S

平均185点

「神崎兄妹は化け物か！」

勝手に言ってる。

『ここは俺に行かせてもらおう。〈殺神〉』

「……………わかった。」

俺の召喚獣の腕輪が光ったので突っ込ませる。

「全員でかれ！」

かかったな。

「お、おい何だよこれ。」

「あり得ない。」

「何か卑怯なことでもしてるんじゃないのか。」俺の召喚獣はまっ

すぐに根本の召喚獣へ突っ込んでいく。邪魔してくるヤツには刀を少しかすらせるだけで戦死していった。

『よく見てみる。腕輪の効果だよ。1秒につき5点失う代わりに俺の攻撃は即死になる。』

そう言っただけで最後の召喚獣を斬り伏せたが、何か足りない気がする。

「ちっ、根本に逃げられた。」

『逃げられた？』

あの卑怯者め！

「ごめん龍斗。あいつ窓から逃げていったから捕まえられなかった。」

申し訳なさそうに謝ってくる明久。だが、今回は悪くないしな。

『いや、気にしなくてもいいよ。とりあえずBクラス何人かは倒せたし。』

「ああ。それにこの罠に気付かなければ逆に俺がやられていたんだ。数人倒せただけで僥幸だ。」

俺の意見に賛成する雄二。ほっとしているのは流石に今回は危なかったからか。

「まあ、後は明日の9時からだ。皆は解散してくれ、今日は疲れただろう。」

『ああ。じゃあな。』

確かに疲れた。早く帰って寝よう。

R y u t o s i d e e n d
o t h e r s i d e

薄暗い路地裏に十人の男子が集まっていて、そのうちの二人が言い争っていた。

「おい、本当にこんなことするのかよ。」

「仕方ないだろ、代表の命令だぞ。従うしかないだろ。」

「だからって、これは犯罪なんだぞ！バレたら退学だけじゃ済まな

いんだぞ！」

「まあまあ、落ち着け。」

二人の争いを見ていた一人がニヤケながら怒鳴っていた方を諷める。
「なら、バレなければいいんだろ？ だったら終わった後に何も話せないようにすればいいじゃないか。」

「何するつもりだ？」

「何って、何も言いたくなくなるような目にあわせてやればいいのさ。」

その言葉を聞いたとたん、今まで怒っていた一人が踵を返した。

「……俺は降りる。そんな真似できるか。木下優子を誘拐して神崎兄妹を脅すなんてな。」

o t h e r s i d e e n d

第13問 龍の逆鱗に触れし愚者 上

「龍! ! 天音! ! 大変じゃ! !」

Cクラスの中でBクラスに奇襲をかけた日の夜。秀がかなり慌てた様子でやって来た。珍しいな。

『まずは落ち着け。』

「……………どうしたの?」

「う、うむ。実はのう、姉上が——誘拐されたのじゃ。」

それを聞いた途端、怒りで我を忘れかけた俺は悪くないと思う。

「……………落ち着いて兄さん!」

『……………そうだな。秀、何で拐われたとわかったんだ?』

「うむ、実はこの手紙が玄関にあったのう。明日、学校を欠席しろ。さもなくばお前の姉はいなくなると思え。神崎兄妹も欠席しなければ同じだ。この事を他の人に話しても同じだ。と、書いてあるのじゃ。」

明日の学校だと? 何故だ? まあいい。

『優ちゃんは俺が小学校の頃にプレゼントしたネックレス持ってる?』

「うむ。毎日風呂の時以外、肌身離さず持っておるが、それがどうしたのじゃ?」

そいつは重々。

『ちよつと、出掛けてくる。多分、夜明けまでには帰ってくると思う。』

「どこに行くのじゃ?」

秀が不思議そうに、だがこの非常事態に何故? という若干の怒りを含んだ顔で見ってくる。だが言うわけにはいかない。

『ちよつと、言えな「……………兄さん。」何だ?』

「……………殺したらダメ。」

秀の腕を掴んでいる天音が俺を真っ直ぐ見ながら言ってきた。

「……………そんなことしたら、優子が悲しむ。」『……………善処しよう。』

誘拐したやつらを見たら殺るかもしれんが。

「ま、待つのじゃ！二人の話を聞く限り、姉上の場所は知っているように聞こえるんじゃないか。」

ああ、秀は知らなかったっけ。時間が惜しいが説明はしておくか。

『俺が優ちゃんに、天音が秀に贈ったペンダントには特殊な電波を発する石を使っている、それがあれば優ちゃんの所に行けるんだよ。じゃあ時間も迫ってるし、行ってくるよ。』

「うむ、姉上を頼む。」

コートの中から龍を模した仮面を顔につけてからフードをかぶって準備完了。くくく、ああ楽しい楽しい時間の始まりだ。

R y u t o s i d e e n d
O t h e r s i d e

「なあ、本当に大丈夫なのか？」

薄暗い倉庫の中、不安そうな声を出す男子がいた。

「大丈夫だよ。つか、何が不安なんだよ。ここなら場所がばれることもないし、終わったらコイツだって喋れないようにしてやればいいんだしよ。見た目もいいし、きっと気持ちいいんじゃないか？ははっ」

そう言いながら歪んだ笑みを浮かべる男子の目線の先には、手足を縛られ、口にはテープを貼られ、恐怖のあまりに泣き出しそうな木下優子がいた。

「まあ確かにそうだな。」

「ああ、ちよっと早いがお楽しみめの時間といかせてもらおうか。」

ズドオオオオン！

男子たちが優子に手を出そうとしたまさにその時、倉庫の鉄製の頑丈な扉が真っ二つに斬られ倒れた。

扉が真っ二つに斬られ倒れる十数分前

『ここか。』

大きな倉庫がたくさんある所に手に携帯のような機械を持った龍斗が現れた。その場で辺りを見回していた視線が何かを捕らえた。

『あいつらか。さあ！パーティーへ招待だ！まずはお二人様あつ！』

龍斗は木刀を構えると弾丸の如く突貫していった。

『ハッハア！避けなきゃ痛いぜえ！』

「なっ！？あいつは誰だ！？」

「くそっ！あれは神崎だ！向こうは一人だ！数で押せ！」

倉庫の影に隠れていたのか、さらに五人が現れ一斉に鉄パイプで殴りかかってきた。

『ハッハア！雑魚が何人集まろうが、かんけえ無いな！』

ゴギッ！ガッ！

「ぐわっ！がああっ！」

笑っているが瞳には確かな殺気と怒気が渦巻いている龍斗は殴りかかってきた男子の鉄パイプを木刀でそらし、柄尻で相手の肋骨を殴り付け、怯んだところで顔面に木刀で一閃。返り血を浴びたが気にすること無く次の標的を見た。

「てめえっ！」

「ぶっ殺してやる！」

今度は二人が左右から殴りかかってきたが、

ヒュッ！ガッ！ゴギッ！

「うぐっ！ぎゃああっ！」一人目はそのままかわし、二人目には木刀で足を斬りはらい転倒したところで足首を踏み抜いた。
「何なんだよこいあがああっ！」

ゴギッ！バギッ！

避けられた一人目が振り返った瞬間、龍斗の木刀が鼻に打ち付けられ、更に肘を逆側に叩き折られた。

『くはは！なんだてめえら、もう終わりかあ！』

「「「ひっ！」「」」」

血にまみれた木刀を肩に寄せ返り血を浴びたにも関わらずまだ笑っている龍斗に睨まれた四人は腰を抜かし倒れながらも、少しでも離れようとした。

『なんだつまらねえ。あつけない。』

仮面を外しながらつまらねえ、と言われたとたん、四人は助かったと思い安堵した。しかし、助かったと思った四人だったが、振り上げられた木刀を見た瞬間絶望にとらわれた。

『くははは！これで終わりにしてやるよ。』

そして悟っただろう。何故龍斗が《死神》と呼ばれていたかを。

そして見えただろう。笑いながら木刀を振り上げる龍斗の後ろにいる、笑いながら大鎌を振るう死神と怒り狂った龍を。
デスサイズ

第14問 龍の逆鱗に触れし愚者 下（前書き）

モンハン3rdに執筆時間をガリガリ削られている今日この頃です。
いやあ、雌火龍の上棘を四個とるのに昨日1日使ってしまった。

……反省しています。

第14問 龍の逆鱗に触れし愚者 下

『さて、ここか。』

手にある機械を頼りに歩いていたら他のより大きな倉庫があった。何かいかにもって感じだよな。中の様子を探ってみるか。とりあえず壁に耳をつけて、中で聞こえた会話にさらにキレそうになった。少し離れて扉を真剣の居合で切り倒した。

『くそ野郎どもがあっ！』

中の会話を聞いて急いで扉を斬り倒したら、手足を縛られ口を塞がれた優ちゃんと、優ちゃんの服を脱がそうとしている男子二人だった。この光景を見た瞬間、少し収まった怒りがまた燃え上がってきた。

「なっ！？何でここがわかったんだぐうっ！」

「くそっ！他のやつはぐはあっ！」

俺が現れたのを見た二人は、驚いて喋ろうとしたが、最後まで喋らせることはない。顔をぶん殴って黙らせた。おっと、今することはこいつらを殺すことじゃなかった。ゆうちゃんは無事かな？

『今すぐ解いてあげるからね。ほら、もう大丈夫だってうわっ！？どうしたの？』

「……ひぐっ…ひつく…り、龍……あ、アタシ…怖かった…ひつく。」

急いで手足を拘束していたものをコートにしまっていたナイフで斬り、口を解放したらいきなり優ちゃんが抱きついてきた。って、返り血浴びてるこの服にいつまでも抱きつかせたら優ちゃんに、血の臭いがついちゃう。

『もう怖がらなくていいよ。それよりも、早く家に帰ろう？それに血生臭いから離れた方がいいよ？』

「もう少し、もう少しだけ、このままがいい。」
『そっか。』

なら、仕方ないか。優ちゃんの気が済むまでこうしてるか。確か家に調合した消臭剤があったはず。……？

『あれ？優ちゃん？』

「すー。すー。」

あれ？寝ちゃった？まあしょうがないか、背負って帰るか。その前に

『おい、起きろ。』

「ぐっ。」

優ちゃんにコートにしまっている上着（そのコートは四次元コートかよ！ by 作者）黙ってるよこのくそ作者。（酷くない！？）上着をかけてから気絶していたやつを蹴り起こした。まだ夜は長いんだ、じっくりかきりばっさりと全てを吐いてもらわなくては。

「おっ、お前こんなことしていいと思ってるのか？」

『黙ってる。殺すぞ。』

「そんなことできるわけ『あの扉を見てまだそんなことが言えるなら、好きなだけ言っていいいぞ？』ひいっ！」

この三流風情が、まあいい。さっさと吐かさないといいつを殺してしまいかねない。

『まず1つ目。お前は誰だ？2つ目。誰がこんなことさせた？余計なことは喋らずに言え。』

「おっ、俺たちはBクラスだ。代表の根本に命令されてやったんだ。仕方がなかったんだ！見のがあがあっ！」

仕方がないだど？命令されてやった？意識が殺気に侵されていくのを感じながら喋っているやつの右肩を蹴り碎いた。

「ひいひいっ、たっ、助けひぐうっ！」

次は左足首を踏み碎く。

「ひいひいっ、た、たすけてくれ！」

『お前は、優ちゃんを犯そうとしていたよな？あれまでが命令だったとは言わせん。本来なら殺していたところだが、優ちゃんが悲しむといけなからこれぐらいで許してやる。』

最後に腹を蹴っ飛ばし、壁に叩きつけた。

『さてと、誘拐されたお姫様も取り戻したし、帰るか。』
さっさと帰ってきちんと寝かせてあげないと。

R y u t o s i d e e n d
A m a n e s i d e

………心配だ。優子がさらわれたと聞いたとき、怒りで我を忘れかけてしまったぐらい。あの時、兄さんが行かなければ私が行っていたかもしれない。

「むう、龍は無事かのう？」

「………兄さんは大丈夫。それよりも、優子が心配。」

………どちらかと言うと、兄さんは相手を殺さないかが心配。昔から優子が絡むと必ず相手を半殺しにしていたから。

「………それよりも、一緒にご飯の用意でもしておこう？」

「うむ、そうじゃのう。夕飯は何がいいかのう？」

「………スパゲッティにしよう？」

「うむ、わかったのじゃ。」

………とりあえず、兄さんと優子は心配ない。だから今は、二人が帰ってきたときの夕飯の心配をしなきゃ。

A m a n e s i d e e n d
R y u t o s i d e

ふう、やっと帰ってきた。倉庫から家まで一人でいくのは簡単だったけど、優ちゃんを背負って、尚且つ誰にも見つからないようにするのはかなり骨が折れた。っと、そろそろ起こすか。

『優ちゃん、そろそろ家だよ。起きて。』

「うーん、あれ？ここって？確かアタシ、誘拐されてその後、龍が、あっ……／／／／／」

？ どうしたんだ？いきなり赤くなってうつむいて。お姫様抱っ

ことか近いとかって。って、俺は何やってるんだ！やばい、俺も赤くなってきたかも。

『そっ、そろそろ降りる？』

「えっ、ええ。そうするわ。あっ、ありがとう。」

お互い気まずくなって家に入るまでそのままだった。

「…………お帰り、兄さんに優子。」

「お帰りなのじゃ、姉上に龍。夕飯の仕度は終わっておるぞ。」

玄関前に天音と秀が立って待っていた。

『ただいま。俺はちよつと着替えて来るから先に食っててよ。』

「ただいま。あら、アタシも着替えに家に戻るからみんなと一緒に食べましょ？」

そうしてこの誘拐事件は？何故か（・・・）重傷者が九人だったが、無事に解決した。

第15問 Bクラス戦 上(前書き)

3月の始めに定期テストなる化け物があるので、それまで更新はストップさせてもらいます。予定としては3月5日に更新します。

……誰か、日本史や科学や英語の覚え方教えてください。マジでピンチです。

第15問 Bクラス戦 上

第7問

問 以下の問いに答えなさい。

『goodおよびのbadの比較級と最上級をそれぞれ答えなさい』

姫路瑞希の答え

『good|better|best』

『bad|worst|worst』

教師のコメント

その通りです。

吉井明久の答え

『good|gooder|goodest』

教師のコメント

まともな間違えで先生驚いています。

goodやbadの比較級と最上級は語尾にーerやーestをつけるだけではダメです。

覚えておきましょう。

土屋康太の答え

『bad|butter|bust』

教師のコメント

『悪い』『乳製品』『おっぱい』『

神崎龍斗の答え

『bad|apple!|!』教師のコメント

先生も東方は好きです。

「Bクラスと手を組んでいるCクラスへの作戦を実行する。」

翌朝、教室にいる俺らに向けて雄二が言い放った。

『あゝ、その必要はないと思うぞ?』

「何故だ?」

『それならもう手は打ってある。もう少ししたら何かわかるんじゃないかな?』

雄二に笑いながらそう告げる。何でか知らないけど秀と天音が卑怯とか言ってた。

「何をした?」

『耳を澄ませて聞いてみなよ。もう始まってるよ。』

「?」

雄二が疑問を浮かべているが気にしないで廊下に注意を向ける。

「Cクラスって可哀想じゃね?」

何を言うか楽しみな。

「確かに、代表もあの根本と付き合ってるとか言う変な趣味のやつだろ?」

確かに、根本と付き合うとかセンス無さすぎてワロタWWW。…つと失礼、少々取り乱した。

「あつ、アンタたち！よくもそんなことしてくれるわね！」

「はっ、でも事実じゃないか。まあお似合いだな。クズな根本にヒステリックな小山とかここまでのベストカップル（笑）とか見たことないぜ。」

「確かにな、ははっ。」

俺もここまで（悪い意味で）お似合いなカップルは見たことがないな。

「アンタ達Aクラスね。ちょっと点数が高からって調子に乗ってるんじゃないわよ！」

ちょっとじゃなくてかなりだけどね。

「じゃあどうするんだ？戦争でもするのか？ちやうど戦争の用意もしてあるしな。」

「やってやろうじゃないの！Aクラスだからって調子に乗ってんじやないわよ！皆、FクラスなんかやめてAクラスを討つわよ！」

ニヤリと笑ってFクラスの皆をしてみる。

「何をしたんだ？」

額を押さえてため息をはいた雄二が質問してきた。ため息はくと幸

せが逃げるよ？

「お前のせいだ！」

とりあえずスルーだ。

『Aクラスの人に三十万円くらいプレゼントしてからCクラスがウザいって独り言を呟いてみた。』

ん？どうして固まったの？

「三十万って、龍斗は金持ちなの？！」 『いや、普通だよ。』

貯金額があと少しで兆になるだけで、いたって問題ないよ。

「……三十万も出せる高校生はそうはいない。」

気配を消しながら康太が近寄ってきた。いつも思うんだが、康太って気配隠すのうまいね。

『それよりもCクラスは？』

「……Aクラスに宣戦布告した。作戦は成功。」

『よし、Eクラスは我関せず、Dクラスは協定を結んだ、CクラスとAクラスは戦争中、これで憂いはなくなった。後は勝つだけだ。頼んだよ、代表？』

「ふっ、任せろ。」

R y u t o s i d e e n d
Y u j i s i d e

本当に神崎兄弟はすごいやつらだな。俺がやろうとしていることをすぐに察することが出来るし、俺ですら気付かない罫を見破ることができる洞察眼を持っていて、圧倒的な学力と圧倒的な武力を持っている。二人を見ているとかつて《神童》とまで言われた俺が、守りたいものを守れなかった俺が本当に情けなくなる。だが、今はそんなことはどうでもいい。今は学力が全てではないと証明するためにも打倒Aクラスを目指さなければ。

「扉と壁を使ってうまく戦うんじゃ！戦線を広げるでないぞ！」

教室で本隊と待機していると秀吉の声が聞こえてきた。本隊にいる天音がそわそわしているが、ここは我慢してもらうしかない。

「雄二っ！」

ん？明久か。

「うん？どうした明久。脱走か？チョキでシバくぞ。」

「話があるんだ。」

いつになく真剣だな。

「……とりあえず、聞こうか。」

「根本君の着ている制服が欲しいんだ。」

は？

「……お前に何があったんだ？」

『明久、まあ、何と言うか、ほどほどにしておかないと将来捕まるぞ？』

「ああ、いや、その。えーっと…。」

龍斗の憐憫のこもった視線にたじろいでいるが、まあ気にしなくていいだろう。

「まあいい。勝利の暁にはそれくらいなんとかしてやろう。で、それだけか？」

それだけじゃないはずだ。それだけなら終わってからでも平気だからな。

「それと、姫路さんを今回戦闘から外して欲しい。」

何だと？ 姫路がFクラスの主力だと言うことはこいつもわかっているハズだが。

「理由は？」

「理由は言えない。」

「……条件がある。」

「条件？」

「姫路が担う役割をお前がやるんだ。どうやってもいい。必ず成功させろ。」

「もちろんやってみせる！絶対に成功させるさ！」

「いい返事だ。」

それでこそ明久だ。

「それで、僕は何をしたらいい？」

「タイミングを見計らって根本に攻撃をしかける。科目は何でもいい。」

「皆のフォローは？」

「ない。しかも、Bクラス教室の出入り口は今の状態のままだ。」

「……難しいことを言ってくれるね。もし、失敗したら？」

ふっ、愚問だな。

「失敗するな、必ず成功させろ。」

『雄二、そろそろ頃合いだ。』

龍斗に言われて時間を確認して、そろそろ頃合いだと思って教室を出ようとしたら明久に質問をされた。

「え？どこか行くの？」

「Dクラスに指示を出してくる。例の件でな。」

教室を出る前に明久にアドバイスをしておくか。

「明久、確かに点数は低いが、秀吉やムツリーニ、神崎兄妹のようにお前にも秀でた部分がある。だから俺はお前を信賴している。」

「∴雄二」

「うまくやれ。計画に変更はない。」

第16問 Bクラス戦 下（前書き）

テスト終わった…

俺の人生も終わった。

テスト頑張ったのにノート提出忘れとか、ありえない。

今週から再開します。お待たせてすいませんでした。

第16問 Bクラス戦 下

第8問

問 以下の問いに答えなさい

『女性は（ ）を迎える事で第二次成長期になり、特有の体付きになり始める』

姫路瑞希の答え

『初潮』

教師のコメント

正解です

吉井明久の答え

『明日』

教師のコメント

随分と急な話ですね

土屋康太の答え

『初潮と呼ばれる生まれて初めての生理。医学用語では、生理の事を月経、初潮の事を初経という。初潮年齢は体重と密接な関係があり、体重が1.5kgに達する頃に初潮を見るものが多い為、その訪れる年齢には個人差がある。日本では平均12歳。また、体重の他にも初潮年齢は人種、気候、社会的環境栄養状態などに影響される』

教師のコメント

詳しくすぎです

神崎龍斗の答え

『本当の自分と向き合えた日』

教師のコメント
哲学みたいですネ

神崎天音の答え

『……………セクハラ』

教師のコメント

※担当教師が泣きながら走り去って行ったのでコメントは無しです

「僕に秀でたところ？」

雄二が明久にアドバイスをしたが、まだよくわかっていないらしい。
俺も一言アドバイスしておくかな。

『なあ明久。』

「何？龍斗。」

『確かに明久は頭は悪いし人の心に疎いし行動が一々バカだけど、だからってダメな人間？違うでしょ？明久には明久のいいところは必ずある。自分がどんな肩書きを持っているか、どんな能力を持っているかをきちんと見極めた方がいいよ。』

「僕がどんな肩書きを？えっと、観察処分者だけど…そうか！ありがとう。龍斗。」

『どういたしまして。』

やっとわかったようだね。なら俺は扉の援護に行くか。

☆

『援護に来たよ。秀、戦況は?』

「むう、天音と龍か。姫路が参加できないせいで少し押されぎみや。すまんが龍は向こうの扉の援護を、天音はこちらの扉の援護を頼むのじゃ。」

秀に言われた通りに援護に行ったら、残りはいと少しですぐにでも突破されそうなほどひどかった。

『Fクラス、神崎龍斗がこっちにいるBクラスに勝負を挑む。試獣^サ召喚^{モン}。』

Fクラス

神崎龍斗

VS

Bクラス×5

古典

701点

VS

平均185点

「くそっ! 化け物め。」

……何だと? 優子を誘拐させておいて、人質をとらせておいて、それで俺を化け物扱いだとか? 化け物だということは理解しているが、クズに言われる筋合いはない!!

『物理干涉…有効。…〈殺神〉』

俺の召喚獣の物理干涉を有効にしてから周りの召喚獣を全て斬る。
俺の召喚獣に斬られた召喚獣は即死していき、全ていなくなっ
て根本の方へ歩かせていく。

「くっ！お前らあいつを止めろ！」

根本の周りにいたやつの召喚獣が襲ってくるが、無駄なことを。全
て斬り伏せてやる！

「……………〈崩龍拳〉」

後ろの方で天音の召喚獣が腕輪を光らせながら腕を振り抜き、そこ
から龍を召喚して根本以外全ての召喚獣を噛み砕いた。

『これでお前だけだな。Fクラス神崎龍斗が根本に勝負を挑む。』

「くそっ！試獣サモン召喚。」

Fクラス

神崎龍斗

VS

Bクラス

根本恭二

古典

401点

VS

232点

殺神の使いすぎか。もう解除するか。一発で終わらせるつもりはないし。

『須川、作戦失敗だと雄二に伝えてくれ。こいつは俺が殺る。明久にも伝えてきてくれ。』

「わかった。」

須川は返事をするらずぐに走っていつてくれた。さてと、どう料理してやろうかな？

「死ねっ！」

『どっちが！』

根本の召喚獣が斬りかかってくるが、両腕両足を輪切りにしながら切り刻んだ。

神崎龍斗

V S

根本恭二

401点

V S

2点

達磨になった召喚獣を根本の方に放り投げる。そして、

ドガッ！

「あぐっ！」

『くくく。すまない、間違えた。』

物理干渉を有効にした召喚獣で根本本人もろとも殴る。

「やりすぎじゃないのか？」

須川の伝言を聞いた雄二と明久が走ってきた。

『そうかな？』

「はあ、まあいいか。根本だし。」

雄二はそう言って痛みで這いつくばっている根本を見下ろしてから
Bクラスに冷酷とも言える一言を告げる。

「さてと、それじゃ嬉し恥ずかし戦後対談といこうか、負け組代表
？」

さっきまでの強気が嘘のように、痛みと悔しさで顔を歪ませている。
まあ、原因の半分が俺にあるとは言え（もしかしたら七割くらいか
もしれないけど）気持ち悪い。

「本来なら設備を明け渡してもらい、お前らには素敵なちやぶ台を
プレゼントするところだが、特別に免除してやらんでもない。」

俺や天音など、ミーティングにいた連中は予想通りだったけど、他
のメンバーはそうではなかったみたいだ。周りがざわざわと騒ぎ始

めた。

『落ち着け。俺らの目標はAクラスだろ？なら、Bクラスで満足しちゃダメだろ？ゴールはここじゃない、Aクラスなんだから。』

「そうだな、神崎の言う通りだ。」

「ああ、俺らのゴールはAクラスだったな。」

何とか皆も納得してくれたようだ。

「そうだ。だから、俺もコイツらがある条件を飲んだら解放してやろうと思う。」

思いつきり悪人面だぞ、雄二。

「……条件は何だ？」

「条件？それはお前だよ。負け組代表さん。」

第17問 戦後対談と卑怯者の末路（前書き）

テスト明けの初投稿の3月5日のアクセス数が今までで一番高かった。こんな駄作を三週間も待って読んでくださってありがとうございます！！

今後もよろしく願います！！

あと、後書きにお知らせがあります、できれば読んでください。

第17問 戦後対談と卑怯者の末路

「条件？それはお前だよ。負け組代表さん。」

間違っではない。だけど、この台詞だけ聞くと雄二はそっちの人かと思ってしまう。まあ、ここは空気を読んで黙っておくけど。

「俺、だと？」

「ああ、お前には散々好き勝手やってもらったし、正直去年から目障りだったんだよな。」

コイツが去年何をやったかは知らないけど、周りが否定しないってことはその通りなんだよな。きっと。

「そこで、お前らBクラスに特別チャンスだ。」

これはちょうどいいタイミングだな。

『雄二。条件は俺が決めてもいい？』

「ん？ああ、構わないが。だが1つだけ外せない条件がある。」

『わかってる。まかせとけ。』

「なら構わない。」

よっしゃ！これで昨日の恨み、まとめてお返しだ！

『よし、じゃあ条件を言うぞ。根本、お前はAクラスに試召戦争の用意があるとだけ伝えてこい。ただし、宣戦布告だけはするな。すると戦争は避けられないからな。』

「それだけでいいのか？」

くっくく、そんなわけないだろ。お前にはもっとふさわしいものがあるよ。罪にはそれ相応の罰を。

『ああ、ただし、これを着てな。』

ミニスカートのメイド服を取り出すと、根本が逃げ出したからとりあえず、根本の顔を挟むように左右に三本ずつ頬をかするように投擲した。

「ひいっ！」

『はあ、お前には拒否権なんか無いんだよ。お前にはこれを着て新旧校舎全ての階を歩いた上でAクラスに行ってもらおう。ああ勿論、その後には撮影会をしてもらうぞ？それをしたら、設備交換は免除してやる。』

「ふっ、ふざけるな！だれがそんなぎゃああっ！！！」

まだ拒否するから思いつき蹴っ飛ばして気絶させる。まだこいつが犯した罪には足りないと言うのにそれでも文句を言うとは。あり得ないね。

「さすがにキツくないか？」

「そうだよ、もう少し軽くしてもいいんじゃない？」

雄二と明久もコイツをかばうのか。って、そういえば何があったか話してなかったな。

『雄二、昨日誘拐事件があった。しかも強姦未遂がな。』

「何？」

『誘拐された人は優ちゃん。誘拐したやつらは：Bクラスの人たち9人だ。誰かに指令を出されたいが、果たして誰だろうなあ。』

「なら、仕方ないな。因果応報ってやつだな。よし、条件はそれで決まりだ。」

「そうだね、仕方ないね。」

よし、決まりだな。

『じゃあ、誰が着付けする？俺は嫌だぞ？雄二やってくれ。』

「俺も嫌だぞ。明久がやれ。」

「何で僕が。龍斗がやってよ。」

ふむ、そうきたか。

『（雄二、やるか？）』

「（ああ、奥の手だ。）」

雄二とアイコンタクトをする。向こうも同じ考えだったらしく、すぐに決まった。

『じゃあ仕方がない。俺がやるよ。』

「いや、押し付けて悪かった。俺に任せろ。」

「じゃあ、僕がやるよ。」

『「どうぞどうぞ！」』

「ちくしょう！」

「私がやってあげるよ。」

日頃の恨みでもあるのかな？すごい綺麗な笑顔を浮かべるBクラスの女子達がこの戦争で一番印象的だった。

『がんばって着飾れよ、できるだけ可愛くな。』

「無理よ。土台が腐ってるから。」

『「「……………」」』

あまりにも晴れ晴れとした笑顔での発言に俺と雄二と明久の三人は絶句してしまった。日本人ってこんなにひどい人種だったわけ？四年間アメリカにいたせいで俺の常識がおかしくなったのかな？まあ、今はそれよりも

『雄二。』

「何だ？」

『Aクラスにないで挑むかは知らないが、その科目は勉強しておけよ。お前が《神童》と呼ばれていたのは昔だからな。』

今一番気になるのはここだ。まあ雄二だから無いとは思うが。

「……ああ。わかってる。安心しろ、任せておけ。」

そう言って自信満々な顔で告げる雄二。これなら安心だな。

☆

「こ、この服、ヤケにスカートが短いぞ！」

「いいからキリキリ歩け。」

「か、神崎と坂本め！よくも俺にこんなことをー」

ふと、俺と坂本の名前を叫ぶやつがいたからそっちを見て、すぐに目をそらした。あれはダメだ、これ以上見たらこの世の常識が崩れる気がする。なぜなら、ミニスカメイド服をきた根本が、脛毛だらけの足をさらしながら歩いていたから。

「……………きゃっ！」

「大丈夫じゃ。ワシがついておるから。」

天音もさすがにダメみたいだな。悲鳴をあげながら秀にしがみつ

てる。それにしても、アメリカにいた頃はあまり感情を出さなかったのに。俺と優ちゃんがいる時は少しだけど、秀といるとかなり感情を表現できるようになったみたいだな。兄としても喜ばしいな。

「ワシらはもう帰らぬか？」

「……………は、早く帰ろ。」

『そうだね。優ちゃんと合流してから帰ろっか。』

この後、Aクラスの前で根本と再開してしまい天音がブルブルと震えて秀にしがみついたのは、果たして補足しておくべきか本気で迷ったのは言うまでもない。

無事に（？）優ちゃんと合流してから帰宅して家に入ったとたん、優ちゃんが耐えてきたのを吐き出すように喋り始めた。

「何なのよアイツ、あんなおぞましい格好して、正気じゃないわ！」

あの格好をさせたのが俺だなんて言えないね、これは。

「それよりも、FクラスってDクラスとBクラスを倒したんでしょ？ やっぱ目標はAクラス？」

『それは夕食の時に話すよ。今日はハンバーグでいいね？』

「わかったわ。でも絶対に話してね？」

『わかった。』

☆

皆で夕食を食べて少しした頃。

「ふう。それで、さっきの話だけど、目的はAクラスなの？」

『そうだよ。雄二は学力だけが全てではないことを証明するために、打倒Aクラスを目指している。』

「ふーん。なら宣戦布告は明日？」

あんまり驚いてないのかな？多分Fクラスだからって考えてるのかな？

『いや、点数補充をするから、多分二日くらい経ってからだと思う。』

「じゃあさ、1つ賭でもしない？」

人差し指を立てていたずらっ子みたいな顔で笑う優ちゃん。やばい、可愛すぎる。……／／／／／

『いいよ。何を賭けるの？』

「負けた方は勝った方の言うことを何でも1つだけ、言うことを聞くってのはどう？」

『わかった。やるからには全力だよ？』

「ふふっ、当たり前よ。あれからすごい頑張ったんだから、必ず勝ってみせるわ。」

その後は雑談をして二人は帰っていった。ああ、二日後の勝負が楽しみだ。

……この時に、Aクラスとの勝負がどういことになるかをきちんと考えていれば、優ちゃんとの勝負でカッコ悪いことしなくて済んだのと思ったのは、全てが終わってからだった。

第17問 戦後対談と卑怯者の末路（後書き）

タグにテスト独自ルール有りであるのに説明してなかったの、ここで説明しておきます。

科目は

現国

古典

数学

英語W

生物

物理

科学

日本史

世界史

保体

の十科目です。なので、他の科目が原作に出てきてもこのどれかに変えたり、ところどころ点が変わったりしますが、どうか寛大な心でスルーしてください。

第18問 ラストブリーフィング

第9問

問 以下の問いに答えなさい

『人が生きていく上で必要となる5大栄養素をすべて書きなさい』

姫路瑞希の答え

『? 脂質 ? 炭水化物 ? たんぱく質 ? ビタミン ? ミネラル』

教師のコメント

流石は姫路さん。優秀ですね。

吉井明久の答え

『? 砂糖 ? 塩 ? 水道水 ? 雨水 ? 湧水』

教師のコメント

それで生きていけるのは君だけです。

土屋康太の答え

『初潮年齢が十歳未満の時は早発月経という。また、十五歳になっても初潮がない時を遅発月経、更に十八歳になっても所長がない時を原発性無月経といい……』

教師のコメント

保健体育のテストは一時間前に終わりました。

神崎天音の答え

『? 秀君 ? 秀君 ? 秀君 ? 秀君 ? 栄養』

木下秀吉の答え

『? 天音 ? 天音 ? 天音 ? 天音 ? 栄養』

教師のコメント

あなた達がお互いにどれ程想っているかは分かりましたので問題を解いてください。

神崎龍斗の答え

『?優ちゃん(訂正)脂質 ?炭水化物 ?たんぱく質 ?ビタミン
ン ?ミネラル』

木下優子の答え

『?龍(訂正)脂質 ?炭水化物 ?たんぱく質 ?ビタミン ?
ミネラル』

教師のコメント

2人はもう少し素直になってもいいと思います。先生は応援していますよ。

Bクラス戦が終わってから点数補充のテストを終えた2日後の朝、後は優ちゃんのいるAクラスとの戦争を残すのみとなった俺らはもうじきお別れになるかもしれないFクラスで最後のブリーフィングを受けていた。

「まずは皆に礼を言いたい。周りの連中には不可能だと言われているにも関わらずここまで来れたのは、他でもない皆の協力があったことだ。感謝している。」

なぜだろう、雄二から礼を言われるとすごく変な感じがする。明久達も困惑している

「ゆ、雄二、どうしたのさ。らしくないよ?」

『そうだぞ雄二。雄二から礼を言われると、気持ち悪い。』

どのくらいかっというと、鳥肌が立つくらいな。

「うるせえ！自分でも合わないことくらいわかってる！だが、これは偽らざる俺の本心だ。」

そっか。本心からの礼を言われると、たとえ雄二からだとしても嬉しいな。

「ここまで来た以上、絶対にAクラスにも勝ちたい。勝って、生き残るには勉強すればいいってもんじゃないという現実を、教師どもに突きつけるんだ！」

「「おおーっ！」」

「「そうだーっ！」」

「「勉強だけじゃねえんだーっ！」」

何の努力もしないでFクラスに来て、それでもまだそんなことを言うのか。Fクラスの皆は嫌いじゃないけど、そこだけは嫌いだね。まあ、士気に関わるから指摘はしないけどね。

「皆ありがとう。そして残るAクラス戦だが、これは一騎討ちで決着をつけたいと考えている。」

この間のブリーフィングの時に話したのか、昼食メンバーは驚いてなかったが、他のクラスメート達はかなり驚いてる。

「……………兄さんはあまり驚いてないね。」

「予想外ではなかったのか？」

『予想通りだよ。二人とも、まさかとは思うけど集団戦で勝てると思ってた？』

二人は顔を見合わせてから首をかしげて顔を少し赤らめてから俺の方を向いて頷いた。

「……………違うの？」

「違うの？」

二人揃って何同時に顔を赤くして同時に頷いて同時に答えるの？バカなの？バカップルなの？

『二人とも、ちょっと考えればわかるでしょ？』

また二人は顔を見合わせてから首をかしげて顔を少し赤らめてから俺の方を向いて頷いた。

「……………わからない。」

「ワシもじゃ。」

『もう砂糖はいらないからね！はぁ。確かにBクラスまでは集団戦でいけたけど、それはAクラスにはいけない。』

「なんでじゃ？」

『Bクラスまでは点数は負けてもその差は作戦で埋められたけどね。天音、相手の作戦に対して作戦を立てる必要なく勝つには何が必要？』

「……………圧倒的な数。」

「AクラスにはFクラスの作戦なんか関係なく叩き潰すだけの戦力、つまり点数があると言いたいのか？」

『そうだよ。だから雄二は勝つ可能性が高い一騎討ちで決着をつけたいと思ってるんだよ。』

「……………確かに。」

「確かにのう。」

こっちが話してる間に向こうも終わったみたいだ。でもなんで教室の後ろにカッターナイフが刺さってるんだ？角度と距離から測ってみたら雄二から明久に向けて投げられているから、また明久がバカでもしたのかな？

「Aクラスに宣戦布告しに行くぞ。三人もついてこい。」

『わかった。』

「了解なのじゃ。」

「……………わかった。」

さてと、最終決戦だ。この騒動に終止符を打つAクラスとの戦争、

少しでも有利になるようにしますか。

第19問 Aクラスとの交渉

「一騎討ち？」

「ああ。Fクラスは試召戦争として、Aクラス代表に一騎打ちを申し込む。」

宣戦布告。まさか、こんな短期間に三回もやるとは予測もできなかった。まあ、楽しいからいいけどね。今回は交渉をするために代表の雄二を筆頭に明久、姫路、康太、秀、天音、そして俺の計七人でAクラスに来ている。

「うーん、何が狙いなの？」

そしてAクラス側の交渉人は優ちゃん一人だ。

「もちろん俺達Fクラスの勝利が狙いだ。」

俺個人としては優ちゃんとの決闘の勝利だけどね。

「面倒な試召戦争を手軽に終わらせることが出来るのはありがたいけどね、だからと言ってわざわざリスクを犯す必要は無いかな。」

「賢明だな。ところで、Cクラスとの試召戦争はどうだった？」

「時間は取られたけど、それだけだったわよ？何の問題もなし。」

「Bクラスとやりあう気はあるか？」

「Bクラスって……一昨日来ていたあの……。」

ビクッ！

誰かが震えたから確認してみたら、天音が震えて秀にしがみついていた。

「安心するのじゃ。ワシがついておる。」

「……………（コクコク）」

「…ああ。アレが代表をやっているクラスだ。幸い戦線布告はまだされていないようだが、さてさて。どうなることやら。」

ああ、そこはスルーですか。そして康太は鼻血出すなカメラで撮るな。まずは止血しろよ

「でも、BクラスはFクラスと戦争したから、三ヶ月間の準備期間を取らない限り試召戦争は出来ないはずだね？」

「知っているだろ？ 実情はどうあれ、対外的にはあの戦争は『平和交渉にて終結』ってなっているってことを。規則的にはなんの問題もない。……Bクラスだけじゃなくて、Dクラスもな。」

「……それって脅迫？」

「人聞きが悪い。ただのお願いだよ」

どう聞いても脅迫にしか聞こえない。すごい悪人面だぞ。

「うーん……わかったよ。何を企んでいるかは知らないけど、代表が負けるなんてありえないからね。その提案受けるよ。」

「え？ 本当？」

あっさりと決まったから拍子抜けたのか声を出した明久。もう少し気を引き締めろよ。

「だって、あんな格好した代表のいるクラスと戦争なんて嫌だもん……」

本当に嫌そうな顔だな。確かにあれは気持ち悪かった。

「ちなみにだが、あれは龍斗が提案したヤツだ。」

『デメエ！ 何バラしてるんだよ！』

「龍、後で話があるんだけど、平気よね？」

『う、うん。大丈夫。』

やばい、本気で怒ってる。これは腕の一本は覚悟しなきゃ。

「でも、こちらからも提案。代表同士の一騎打ちじゃなくて、そうだね、お互い五人ずつ選んで、一騎打ち五回で三回勝った方の勝ち、っていうなら受けてもいいよ。」

「う……」

「なるほど。こっちから神崎兄妹か姫路が出てくる可能性を警戒し

「ているんだな？」

「うん。多分大丈夫だと思うけど、代表が調子悪くて姫路さんが絶好調だったら、問題次第では万が一があるかもしれないし。そもそも天音だと代表にも勝てちゃうからね。」

「龍斗が出てくる心配はしないのか？」

『ああ、雄二。言い忘れてたけど俺は優ちゃんと勝負することになつてゐるから。』

「そうか。だが安心してくれ。うちからは俺が出る。」

「無理だよ。その言葉を鵜呑みには出来ないよ。これは競争じゃなくて戦争だからね。」

「そうか。それなら、その条件を呑んでも良い。」

「ホント？嬉しいな♪」

やばい、すごく可愛い。こういう時にカメラって必要だな。今度買おっかな。

「……一枚500円」

なっ！？さすが康太！

『全て買おう。』

「……毎度あり。これからは木下優子の写真は優先的に回す。」

『サンキュー。』

なかなか良い買い物だった。

「けど、勝負する内容はこちらで決めさせて貰う。そのくらいのハ
ンデはあってもいいはずだ」

「え？うーん……」

やっぱりクラスの代表として交渉に来てるから迂闊な返事はできな
いか。…っ！？

『誰だ！って霧島さんか。』

不意に後ろから気配を感じたから振り返ったら霧島さんがいた。

「……雄二の条件を受けてもいい。」

「あれ？代表。いいの？」

「……その代わり、条件がある。」

「条件だと？」

「……うん。」

霧島さんが雄二を見てから姫路を見て、また雄二を見てからこう言
った。

「……負けた方は何でも一つ言うことを聞く。」

負けた方が言うことを聞く？よくわからないが雄二に何か一つ聞かせたいことでもあるのかな？まあ、ちょうどいいね。

『いや、二つにしよう。』

「どうしてなんだ？」

「……どうして？」

俺の発言で雄二と霧島さんの二人が振り向いた。

『Aクラスが勝ったら霧島さんと優ちゃんの、Fクラスが勝ったら雄二と俺の言うことを何でも一つだけ聞くっていう感じにしてほしい。』

「代表、私的な理由かもしれないけどアタシからもお願い。」

「……わかった。」

優ちゃんの一言で納得してくれてよかった。

『雄二もいいよね？』

「ああ。条件はこれで決まりだな。」

「ゆ、雄二！それに龍斗も！何を勝手に！まだ姫路さんが了承していないじゃないか！」

は？どうしたんだいきなり？

『クラス代表は雄二であって姫路じゃないだろ？何で姫路の了承がいるんだ？』

「これは姫路さんの問題じゃないか！」

『違うな。これはクラスの問題であると同時に雄二と霧島さん二人の問題だ。』

「その通りだ。それに心配するな。絶対に姫路には迷惑はかけない。」

「……勝負はいつ？」

「そうだな、十時からでいいか？」

「……わかった。」

「よし、交渉は成立だ。一旦教室に戻るぞ。」

「そうだね。皆にも報告しなくちゃいけないからね。」

交渉は無事に成立した。あとは戦争に臨むだけ――

「龍？どこにいくのかしら？すこしだけあっちでOHANASHIしましょ？Bクラスのこととか、あとCクラスのことも。」

――とはいかなかった。Cクラスのことまでもバレてるし、雄二に目を向けたら合掌された。ハハハ、生きて戻れるかな。

☆

あの後、優ちゃんとのOHANASHIを済ませた俺は何とか満身創痍な体を引きずってFクラスに戻った。

『ただいま戻った。』

「む、無事か？」

「もう少し遅かったらお前の卓袱台に花を添えるところだったぞ。」

秀の心配が嬉しい。そして雄二

『素晴らしいジョークをありがとう。実に……笑えないジョークだよこの野郎!』

腹いせに雄二と明久にナイフを投擲しまくる。あとちょっとで本気でヤバかったんだぞ!

「おっ、お前何を投げてるんだ!? つーか、どっから出した!」

「僕を狙う意味ないよね!？」

『ハッハッハ、ほらほらほら! 避けなきゃ当たるうばおっ!』

ナイフを投擲していたら後ろから何かで叩かれた。

「……………落ち着いた? 兄さん。」

そこに立っていたのは天音だった。けど、

『なんでハリセン持ってるの?』

そう、天音が持っているのはハリセンだった。

「ワシの舞台道具じゃ。」

なるほど。ん? ハリセンを使う演劇ってどうかと思うよ?

「お前よくそんなナイフ投げられるよな。数も異常だし。」

『まあね。それに投げナイフは料理ができる人なら必須項目でしょ。師匠が料理人には投げナイフは必須だって言ってたよ。』

それぐらいは料理人の常識だろ。

「ありえないだろ!?’」

『当たり前だろ。そんなわけあるか。ただの冗談だ。』

「…ハア、もういくぞ、時間だ。」

第20問 第二回戦（前書き）

今回はもしかしたら皆さん納得のいかない話かもしれませんが（まあ確実だと思いますが）、どうかお付き合いください。

第20問 第二回戦

「では、両名共準備は良いですか？」

今回の立会人は学年主任の高橋先生だ。確かAクラスの担任でもあるんだよな。それと、会場はAクラスだ。まあ2クラス分の人を入れるにはこのクラスしかないよな。

「ああ。」

「……問題ない。」

「それでは一人目の方、どうぞ。」

代表の二人が準備完了の合図をすると第一回戦が始まった。

「こっちはアタシが出るよっ！」

優ちゃんか。

『なら、俺が出よう。』

「科目は現国でいいわね？」

『いいよ。』

「わかりました。」

俺が選択科目に了承すると高橋先生はすぐに召喚フィールドを形成

した。

「龍。アタシはね、龍が外国に行ってからがんばって勉強してきたわ。」

いきなりどうしたんだ？

「龍がいなくなってから考えてみたの。龍が帰ってきたときにアタシが龍のとなりにも釣り合うのになって。だから、少しでも龍と釣り合うようにって思って勉強したわ。龍、この勝負にアタシの四年間の努力を全部かけるから龍も全力でかかってきて。」

そう言って強い意思を宿した瞳でこっちをまっすぐ見つめてきた。

『……わかった。全力を出すよ。』

「では第一回戦、始め！」

『「試獣^{サモン}召喚！」』

Fクラス

神崎龍斗

V S

Aクラス

木下優子

現国

613点

V S

613点

俺と優ちゃんの足元に幾何学模様の魔方陣が出現し、召喚獣が召喚された。俺の方は黒いコートを着て腰に二本の日本刀を差した召喚獣で、優ちゃんの方は西洋鎧に巨大なランスを持った召喚獣だった。俺は一本だけ抜き正眼に構えた。

『かかってこい優ちゃん！』

俺は全神経を優ちゃんの召喚獣に集中した。

「いくわよっ！」

優ちゃんの召喚獣はランスを抱えて腰を落としてからすごいスピードで突進してきた。

『はあっ！』

ランスの先端が剣の先端と交差した瞬間、剣の腹でランスをずらしながら空きの腹を斬りつける。

「くっ！」

けど優ちゃんは直前に気づいたのか突進の姿勢から無理矢理横にずらしたせいで斬りつけが浅くなった。

神崎龍斗

613点

VS

木下優子

581点

「まだいけるわっ！」

また突進してきたから同じようにずらそうかと思ったら、直前で一回転して遠心力を加えてランスで横殴りしてきた。俺は咄嗟の事で反応が少し遅れて完全にガードすることができずに少し飛ばされた。

神崎龍斗

521点

VS

木下優子

581点

ダメージが大きいな。だが今度は俺からだ。俺は召喚獣をランスの攻撃範囲より内側へ急接近させて連続で斬りつけていった。

「くっ、この！ちょこまかとしっこいわよ！」

ランスをうまく使えない距離だからどうしても防御に専念せざるを得ない優ちゃんはランスを振り回しながら俺の召喚獣を蹴っ飛ばしてから後退して距離をとった。

神崎龍斗

499点

VS

木下優子

499点

『優ちゃん、少し早いけど決着といこうか。』

「ええ、そうね。」

優ちゃんの手承をえた俺は左半身を優ちゃんに向けるように立ち腰を落とし、左手を優ちゃんに向けて伸ばし剣先を優ちゃんに向けるように右手で刀を持つ牙突の構えをすると、優ちゃんもランスを抱えて突進の構えをとった。

『……………』

「……………」

教室の空気がピンとはりつめていくのがわかる。誰も喋らず静かにこの勝負の結果を見ようとしているのがわかる。ペンが落ちる音が聞こえた瞬間、俺と優ちゃんは同時に突進した。

『はあっ！』

「やあっ！」

すれ違いざまにお互いに突きを放つ。優ちゃんの突きで俺の召喚獣の左腕がちぎれ飛び、俺の突きで優ちゃんの召喚獣の胸を切り裂いたが、また浅かった。

『まだだっ！』

「これでトドメよっ！」

俺は振り向くと同時に、おなじく振り向こうとした優ちゃんの召喚獣の腕を両方とも斬った。

神崎龍斗

54点

VS

木下優子

9点

「くっ、アタシの負けね。トドメをさして。」

自分の負けを認め抵抗をやめた優ちゃんの召喚獣に向けて逆手に持った刀を振り上げた途端、あることに気づいた。いや、もともと分かっていたハズだ。この後の勝負、姫路と雄二はわからないが天音と康太は必ず勝つだろう。そこで俺が勝ったらどうなる？ 答えは簡単だ。FクラスがAクラスに勝ち設備を交換してAクラス、優ちゃんが今のFクラスの教室にいくだろう。それでも勝つのか？ そんなこと、俺にはできない。

「龍？」

『ふっ、カッコ悪いな俺は。雄二、すまないが——』

そう言って振り上げた刀を思いっきり降り下ろした……自分の召喚獣の心臓部分に。

『——俺の負けだ。』

神崎龍斗

0点

VS

木下優子

9点

「「「えっ!?!」」」

「やっぱりのう。」

「……………やっぱり兄さんは兄さん。」

ほとんどの人が驚いていたが、秀と天音はとくに気づいていたみたいだ。直前で気づくって、なんかカッコ悪い。

「えっ? どうしたのよ、龍。」

『俺には、優ちゃんを倒せない。本当ならクラスを優先しなくちゃいけないのかもしれないけど、それでも俺には、優ちゃんを倒せない。』

「それって、アタシとは全力では戦えないってこと? ずっと手を抜いていたの?」

悲しそうな顔で優ちゃんが聞いてきた。けど、そうじゃない。

『そうじゃない、全力で戦ったよ。』

「じゃあ! 何で自分を刺したのよ!」

『優ちゃんをFクラスに送りたいくなかったからだよ。』

俺が理由を言うとうわからない、って顔で見えてきたから理由を言う。

『次の試合、天音は勝つでしょ? それに姫路は学年でトップクラス

だって聞くし、他の二人だって強い、どっちが勝つかわからない。もしFクラスが勝ったら、Aクラス、優ちゃんがあの設備に行くことになる。自分勝手な考えだけどそれは嫌だからね。だから、この勝負は俺の負け。納得してくれないかな？」

あまりの自分勝手な考えについて笑ってしまう。この勝負には雄二の大切な理想がかかっているのに、俺は自分のエゴのためにそれを不意にしようとしている。

「……わかったわよ。」

拗ねちゃったかな？ まあ、頬を膨らませた優ちゃんも可愛いけどね。

『機嫌直してよ。ね？』

とりあえず小学校の頃に機嫌を悪くした優ちゃんをなだめるときみたいに頭を撫でてみた。

「う〜〜……／／／／／」

かつ、可愛すぎる！ 小学校の頃も可愛いけど今も可愛い！

『ま、後は他の人に任せるか。』

「そうね。アタシ達の出番は終わりだし、ゆっくりしてましょ？」

『そうだね。あ、ケーキでも食べる？』

昨日作ってみたやつうまくいったから、優ちゃんも気に入ってくれるでしょ。

「そのケーキってどこから出したの？」

『もちろんコートだけど？』

なにを当たり前のことを。どうしたんだろ？いきなり頭抱えて。

『食べないの？』

「……食べる。ショートケーキある？」

第20問 第一回戦（後書き）

最近小説を書くモチベーションとクオリティーが若干下がってきました。それはもうバリバリと。今月から受験生なので週一更新ができなくなるかもしれませんが、土曜日に更新されなくてもストック切れであって連載凍結と言うわけではないのでどうか、今後もしよろしくお願いします。

一応言っておきますが、四月馬鹿ではないです。

作者「最近東方projectのもこけーねのカップリングにハマりでした。モチベーションの低下と言うよりは、色々な人の小説を読んでいて執筆時間が足りないと言うだけかもしれないが、反省も後悔もない（キリッ!）もこけーねマジで最高だよもこけーね。」

龍斗『反省も後悔もしやがれ! この堕作者が!』

作者「「だ」の字違くない!? つか、その刀は何!? 振りかぶってるけど俺に振る訳じゃないよね!?!」

龍斗『問答無用! 天誅!』

作者「うぎゃあああああああ!」

天音「……………作者が堕作者でごめんなさい。でも、更新は頑張ってくださいませます。」

作者「いだあああああああ!」

天音「……………黙れ。」

作者「ええっ!? 天音まで!? ちよっ、薙刀はダメエ!」

第21問 第2、3回戦(前書き)

秀吉暴走警報発令中。

……なぜこうなったorz

あの純粋な秀吉は何処へ!?

第21問 第2、3回戦

H i d e y o s h i s i d e

「龍が姉上と一緒にケーキを食べてるので第二回戦はワシが解説をするのじゃ。」

「……………どうしたの？」

「気にしないでいいのじゃ。」

「……………??」

うむ、天音はいつ見ても可愛いもう。

「では、次の方どうぞ。」

む、もう二回戦が始まるのじゃ。一回戦目は龍が負けてしまったのでこれからワシらは三回も勝たねばなんのか。天音は勝ってくれるとしても不安じゃのう。

「私が出ます。科目は物理でお願いします。」

Aクラスからは佐藤美穂さん。ワシらFクラスからは天音じゃな。

「……………私が出ます。秀君、私頑張るから見えてね？」

「うむ。勝ったらご褒美をあげるのじゃ。」

む、目の色が変わったのじゃ。すごい食い付きじゃのう。

「……………本当？」

「うむ。だから頑張るのじゃ。」

「「サモン試獣召喚」」

それぞれが召喚して——一瞬で勝敗が決まってしまったのじゃ。すごい頑張りようじゃのう。

「……………秀君、ご褒美は？」

すごい目がキラキラしておる。きっと尻尾があつたらすごい振っているのじゃろうな。むう、ご褒美はどうしようかのう。天音の顔を見て唇を見てあることを思い付いてしまったのじゃが、ここでそれをするのは何か恥ずかしいのう。

「……………秀君？」

天音がキョトンとした顔でワシの顔を見てきた瞬間、心の中が熱くなっていき何かが弾け飛ぶのを感じたのじゃ。

「天音。」

「……………どうし——んっ!？」

返事をしようと口を開いた天音を引き寄せてキスをしたのじゃ。まあ、その、止められなかったのじゃ!仕方ないじゃろ!

「……………あう…ひ、秀君?…え、えっと…みゆう…」

真っ赤になってアワアワした天音を見ると、もっと心の中が熱くなっていくのがわかる。まだアワアワしている天音に今度はディープキスとやらをするかのう。

「……………えっと…秀君——んっ!? あっ…んむっ…はあっ…んっ…ちゅっ……………」

一旦顔を離して天音を見ると、顔を赤くしていて目が潤んでいて何とも扇情的でなんかそられるのう。また続けようとしたら

「ちよっ、秀吉!? 年齢制限を考えなさいよ!」

『そうだよ。そういうことは人のいないところでやりなよ。』

「そういう問題じゃない! ていうか、周りを見なさい!」

姉上と龍に邪魔されてしまったのじゃ。むう、せつかくいいところだったのに残念じゃのう。とりあえず腰砕けになっておる天音をソファに座らせてワシも隣に座って次の試合の観戦じゃ

「つつ、次の方どうぞ!」

む? どうしたのじゃ、高橋女史は? 顔を赤くして。よく見てみるとほとんどの人が赤くなっておるしのう。

「……(スック。ダバダバ!)」

ムツツリーニは鼻血まで出しておるし、本当に不思議じゃのう。

「アハハ、優子の弟って大胆だったんだね。」

Aクラスからは工藤が出るようじゃな。しかし、大胆とはどういうことかの？ こういう時はやったことを思い出してみればいいのじゃな。

天音とキスをする

←

次にディープキスをする

←

皆の顔が赤い

←

…もしかして、見られておったのか？

「なあ秀吉。」

「どうしたのじゃ、雄二？」

「もしかしくなくても、見られてたぞ？」

……………！？

「なぬっ！？」

「最初っから自分で気づけ！」

「な、なんという不覚。天音の可愛い顔を皆に見られてしまうとは。」

「あくまでそこか!？」

そこ以外に何があるのじゃ？

「ゴホンッ！第三回戦始めてください！教科は何にしますか？」

「……保健体育。」

ムツツリーニの唯一にして最強の武器じゃな。

「土屋君だっけ？随分と保健体育が得意みたいだね？」

む？工藤は転入生だからムツツリーニの実力がわからんのか？

「でも、ボクだってかなり得意なんだよ？……キミとは違って、実技で、ね♪」

む？何故かFクラス全員がときめいておるぞ？

「そっちのキミ、吉井君だっけ？勉強苦手そうだし、保健体育で良かったらボクが教えてあげようか？もちろん実技で。」

「フッ。望むところ——」

「吉井には永遠にそんな機会なんて来ないから、保健体育の勉強なんて要らないのよ！」

「そうです！永遠に必要ありません！」

「……………」

明久が不憫でならないのう。

「島田に姫路。明久が死ぬほど哀しそうな顔をしているんだが。」

クイクイツ

「む？どうしたのじゃ、天音？」

「……………秀君には私がいる。」

「うむ、ありがたいのじゃ。」

癒されるのう。

「そろそろ召喚を開始して下さい。」

「はい。試獣^{サモン}召喚っと。」

「……………試獣^{サモン}召喚。」

ふむ、ムツツリーニは忍装束に小太刀の二刀流で、工藤はセーラー服にでかい斧じやのう。

「実戦派と理論派、どっちが強いか見せてあげるよ。」

点数が高いとスピードも段違いじゃな、腕輪の効果で雷も纏っておるしのう。

「それじゃ、バイバイ。ムツツリーニくん。」

「……………加速。」

「え？」

「……………加速、終了」

む？姿が消えたぞ？何があったのじゃ？

「天音、今何が起きたのじゃ？」

「……………康太の召喚獣が工藤の召喚獣を切り刻んだ。」

「聞いておいてなんじゃが、見えたのか？」

「……………うん。」

相変わらずすごいのう。まあ、それよりも今は第四回戦目じゃな。
二勝一敗じゃから次の試合で決まる可能性もあるしのう。

「……………兄さんが勝ってればもう終わってたのに。」

「それは言わないお約束じゃ。」

第22問 第4、5回戦

「これで2対1ですね。次の方は？」

「あ、は、はいっ。私ですっ。」

「それなら僕が相手をしよう。」

たしか久保利光、学年次席だったか？

「やはり来たか、学年次席。」

この勝負で、俺らがどうなるか決まりそうだな。姫路が勝てばFクラスの勝利、久保が勝てば崖っぷち。まさしく分水嶺といったところだな。

「科目はどうしますか？」

「総合科目でお願いします。」

即答だね。こっちの番なのに。

「ちょっと待った！何を勝手に――」

「構いません。」

「姫路さん？」

そうとう自信がありそうだな。この試合も楽しみだ。

「「試獣召喚」^{サモン}」

二人の召喚獣が召喚され、一瞬で交わって鏝迫り合いになった。さすが、高得点だと速いな。姫路の召喚獣が西洋鎧に大剣で、久保が西洋鎧に大鎌か。

Fクラス

姫路瑞希

VS

Aクラス

久保利光

総合科目

4409点

VS

4395点

『二人とも点数高いなあ。』

「何言ってるのよ。秀吉に聞いたわよ？総合科目9000点越えるそうじゃない。」

あ、そうだった。

『天音だってそうでしょ？』

「……………私は6000点くらい、兄さんと一緒にしないで。」

「天音もすごい高い点数じゃよ。」

「代表ですら5000点もいかないわよ。」

『それよりも、優ちゃん現国の点数すごかったね。さすがだよ。』

「当たり前じゃない。龍の隣に立てるように努力したのよ。これくらい取れて当然よ。」

そうやって向日葵が咲いたように笑う優ちゃんを見てると、すごく胸が暖かくなる。こっちまで幸せになれるよ。

「これで二対二です。最後の一人、どうぞ。」

もう終わったのか？二対二ってことは、負けたのか。

「うう…」

「ひ、姫路さん…」

姫路が落ち込んで明久が慰めてるけど、まあ、いいや。俺には関係ないし。

「これで2対2です。最後の1人、どうぞ。」

最大の危機である姫路が敗れたおかげか、Aクラスの面々は余裕そうな顔だった。もう勝った気にいるのかな？でも高橋先生は驚いてるね。FクラスがAクラスと渡り合ってるからかな？

「……はい。」

「俺の出演だな。」

「教科はどうしますか？」

「教科は日本史、内容は小学生レベルで方式は百点満点の上限ありだ！」

「上限ありだって？」

「しかも小学生レベル。満点確実じゃないか。」

「注意力と集中力の勝負になるぞ……」

やっぱり以外だよな。今でも雄二の言う弱点が本当か疑っちゃうくらいだし。

「わかりました。そうなると問題を用意しなくてははいけませんね。少しこのまま待っていてください。」

一度ノートパソコンを閉じて高橋先生が教室から出ていく。真面目そうな先生だし、資料でも取りに行くのかな？先生が教室から出たら明久が雄二に近づいていった。

「雄二、後は任せたよ。」

「ああ、任された。」

グッと力強く握手をする二人、二人が離れると今度は康太が歩み寄りピースサインを雄二に向けた。

「お前の力には随分助けられた。感謝している。」

「……………（フツ）」

口の端を軽く持ち上げるように笑うと元の位置に戻った。次は姫路が近寄っていった。

「坂本君、あのこと、教えてくれてありがとうございます。」

「ああ、明久の事か。気にするな、後は頑張れよ。」

「はいっ！」

何のことかよくわからないけど、まあいいかな。次は俺だな。

『勝てる？』

「もちろん。」

フツと、自信に満ち溢れている笑みを浮かべる雄二、勝てそうだな。

『ならいい、がんばれよ。』

「ああ、任せろ。」

最後に握手をして戻った。

「……………信じてる。」

「頑張るのじゃ。」

「ああ。大船に乗ったつもりでいろ。」

「……………タイタニック？」

「それは沈んでしまうのじゃ!？」

最後に天音がボケる必要の無いボケをかましたところで先生が戻ってきた。

「では、最後の勝負、日本史を行います。参加者の霧島さんと坂本君は視聴覚室に向かってください。」

「……………はい。」

「じゃ、行ってくるか。」

「皆さんはここでモニターを見ていて下さい。」

☆

『では、問題を配ります。制限時間は五十分。満点は100点です。不正行為等は即失格になります。いいですね?』

『……………はい。』

『わかってるさ。』

『では、始めてください。』

いよいよ、最後の勝負だ。これであの問題が出れば俺らの勝ち。だ

けど、だけどさあ

『何で一番最初の問題間違えてるのかなあ。』

「……………また間違えた。」

《次の○に正しい年号を記入しなさい。》

() 年 平城京に遷都

() 年 平安京に遷都

() 年 鎌倉幕府設立

() 年 大化の改新

「あ……!」

「よ、吉井君っ!」

「うん。」

「これで、私たちっ…………!」

「うん!これで僕らの卓袱台が!」

『システムデスクに。』

「最下層に位置した僕らの、歴史的勝利だ！」

『うおおおおお！』

確かに、大化の改新でたけど、これだね。

「やっぱり、FクラスはFクラスね。」

『はあ。何も言い返せない。』

《日本史勝負 限定テスト 100点満点》

《Aクラス 霧島翔子 97点》

V
S

《Fクラス 坂本雄二 53点》

俺らFクラスの卓袱台がみかん箱になった。

第23問 戦後処理と婚約（前書き）

何か最近スランプなのか、この作品のクオリティが下がっている気がします。まあ、もともとクオリティなんてこの作品には無いんですがね（笑）。

第23問 戦後処理と婚約

第10問

問 次の（ ）に正しい年号を記入しなさい。

『（ ）年 キリスト教伝来』

霧島翔子の答え

『1549年』

教師のコメント

正解。特にコメントはありません。

坂本雄二の答え

『雪の降り積もる中、寒さに震えるキミの手を握った1993』

教師のコメント

ロマンチックな表現をしても、間違いは間違いです

神崎龍斗の答え

『雨が降り注ぐ中、キミと斬り合った1549年』

教師のコメント

どんな状況ですか？あっていますが、普通に答えてください。

神崎天音の答え

『桜吹雪の中、秀君と一緒に踊った1549年』教師のコメント

絵になりますね。

「3対2でAクラスの勝利です。」

視聴覚室へ雪崩れ込んだ俺らに高橋先生の言葉が突き刺さった。

「……雄二、私の勝ち。」

「……殺せ。」

そこまで後悔するなら復習くらいしておけばよかったのに。

「いい覚悟だ、殺してやる！歯をくいしばれ！」

「吉井君、落ち着いてください！」

怒り狂った明久が雄二を処刑しようと雄二に近づくが姫路が後ろから抱きついてその場に踏みとどまった。

「だいたい53点ってなんだよ！0点なら名前の書き忘れとか考えられるのにこの点数だと――」

「いかにも俺の全力だ。」

「この阿呆がぁーっ！」

「アキ、落ち着きなさい！アンタだったら30点も取れないでしようが！」

お前ならもっと点が低いだろ、とは言わない。

『雄二、俺も負けたから強くは言えないが、Bクラス戦が終わったときに言ったよな？神童は昔の話だって、復習くらいしておけばもう少し変わったのに。』

「……ああ。悪かった。あの時もう少しく聞いておけばよかったな。」

本気で悔しがっている雄二にこれ以上言うのは酷かな。

『まあ、終わったことは気にするな。』

「……お前は俺のこと責めないのか？」

『俺も責められる側だしな。それに、ほっとしてしまいう俺がいるのも事実だから。なあ雄二、三ヶ月たったらBクラスに挑もうぜ。それなら俺もお前も心置きなく戦えるだろ？それに、今回の戦争は一応戦術的には負けても戦略的には勝ちだろ？』

「戦略的には勝ち、だと？」

『ああ、Aクラスには負けたが、FクラスがBクラスに勝ったってのはへ学力が全てではない』という証明になるだろ？』

俺の言葉で雄二が少し考えてから頷いて立ち上がった。

「そうだな。よし、三ヶ月待ってBクラスをまた、倒してあの卑怯者に卓袱台をプレゼントするか。手伝えよ？」

『もちろん。任せろよ、代表。とりあえず、首を出せ雄二。』

刀を抜刀して雄二の首に押し当てる。

「さて！？それはシャレにならねえ！お前は責めないって言ったよな！？」

『責めはしないが、処刑をしないとは言っていないよ?』

まったく、あんな点数をとってくるとは。死んで償うべきだな。

「少しは落ち着きなさいよ。」

「……雄二も静かに。」

あ、優ちゃんだ。まあ冗談だしもういっか。

「……ところで、約束。」

「龍も覚えてるよね?」

あ、忘れてた。

「……………! (カチャカチャカチャ!)」

康太は何を始めてるの!? ものすごい速さでカメラをセッティングしてるけど。

「わかっている。何でも言え。」

潔い返事だな。

「……それじゃ——」

霧島が姫路を見てからもう一度雄二を見て

「……雄二、私と付き合って。」

と言い放った。大胆だねえ。

「やっぱりな。お前、まだ諦めてなかったのか。」

「……私は諦めない。ずっと、雄二のことが好き。」

「その話は何度も断っただろ？他の男と付き合う気はないのか？」

「……私には雄二しかない。他の人なんて、興味ない。」

「拒否権は？」

「……ない。約束だから。今からデートに行く。」

「ぐあっ！放せ！やっぱこの約束はなかったことに——」

ぐいっ

「」「……………」

あまりの急展開についていけなかった。次は俺か。

『さてと、今度は優ちゃんの番だよ。俺にできることなら何でもするよ。』

「えっ！？ええ、そうね。えっと、あの、小学生の頃の約束覚えてる？」

小学校の頃？

『一緒に学校に行こうとか？』

「じゃなくて。」

『優ちゃんのいる前では他の女の子とはあまり仲良くしないとか？』

「それはもう忘れて！」

顔真っ赤にして焦ってる優ちゃんもかわいいなあ。あれ？俺ってS
っ気あったっけ？

『誕生日には俺が手作りケーキを作るだっけ？』

「そうじゃなくって！」

もういいかな、涙目の優ちゃんもかわいいけどね。

『帰ってきたら、優ちゃんを俺のお嫁さんにするって約束？』

「……うん。……／／／／／」

優ちゃんを抱き締めてから耳元で囁くと、顔を真っ赤にして頷いた。
本当は俺から言いたかったんだけどな。

『これ、もらってくれるかな？』

いったん優ちゃんを離してから小さな箱を取り出して優ちゃんに渡す。

「これは？」

『開けてみて？』

R y u t o s i d e e n d
Y u k o s i d e

『さてと、今度は優ちゃんの番だよ。俺にできることなら何でもするよ。』

「えっ！？ええ、そうね。えっと、あの、小学生の頃の約束覚えてる？」

どうしよう、焦りすぎて声が上がっちゃったけど、変に思われてないかな？

『一緒に学校に行こうとか？』

「じゃなくて。」

『優ちゃんのいる前では他の女の子とはあまり仲良くしないとか？』

「それはもう忘れて！」

うう、それは忘れたかったことなのに。

『誕生日には俺が手作りケーキを作るだっけ？』

「そうじゃなくって！」

もう、忘れちゃったのかな。小学校の頃にアタシの人生の中でも一番頑張ったのに、龍にとってはどうでもいい小学生の冗談にしか思われてなかったのかな。

『帰ってきたら、優ちゃんを俺のお嫁さんにするって約束?』

「……うん。……／／／／／」

泣きそうになって下を向くと龍がアタシのことを抱き締めて耳元で囁いてきたせいで小さい声でしか答えられなかった。う、嬉しいけど、ここでやらなくてもいいじゃない!

『これ、もらってくれるかな?』

「これは?」

『開けてみて?』

龍にもらった箱は手に乗るサイズの小さな箱だった。何かしら?

「……え?」

箱を開けて中を見ると、意外なものが入っていて驚くと同時に胸が高鳴った。

「り、龍?これって。」

どうしても信じられなくて聞いてしまう。

『エンゲージリング勿論婚約指輪だよ。優ちゃんに受け取ってほしい。』

それって、つまり：

『卒業してからになるけど、結婚しよう。』

涙が溢れてくるのがわかる。きっと、今のアタシの顔は涙でぐちゃぐちゃかもしれないけど

「…はい。喜んで。」

笑っているのかな。龍に思いっきり抱きつくと、龍も抱き締めてくれた。

Y u k o s i d e e n d
R y u t o s i d e

「諸君。ここはどこだ？」

「「「最期の審判を下す法廷だ！」」「」」

「異端者には？」

「「「死の鉄槌を！」」「」」

「男とは？」

「「「愛を捨て、哀に生きるもの！」」「」」

……うぜえ。

『てめえらまとめて地獄に送ってやる!』

「ヤツは一人だ! 囲んで殺せ!」

「「「おう!」「」」

二分後

『弱すぎ。それによく懲りないよね。』

俺にかかってきたF F F団は全員例外なく地面に伏していた。

「さて、Fクラスの諸君、お遊びの時間は終わりだ。って、何だこの惨状は?」

『どうしたんですか? 西村先生。』

俺がF F F団を全員倒して少しすると西村先生がやって来た。

「ああ。今から我がFクラスに補習について説明しようと思ってな。」

え? 我がFクラス

「おめでとう。お前らは戦争に負けたおかげで、福原先生から俺に担任が変わるそうだ。これから1年、死に物狂いで勉強できるぞ。」

「「「なにいつ!?!」「」」

復活するの早いな。

「いいか。確かにお前たちはよくやった。Fクラスがここまで来るとは、正直思わなかった。でもな、幾ら“学力が全てではない”と言っても、人生を渡っていく上では強力な武器の一つなんだ。全てじゃないからと言って、蔑にしていいい物じゃない」

まあ、確かにそうだな。そもそも蔑ろにしてなかったらFクラスやEクラスにはいないよな。

「吉井に坂本、お前たちは特に念入りに監視してやる。何せ開校以来初の観察処分者とA級戦犯だからな。」

「そうはいきませんよ。何としても監視の目を掻い潜り今まで通り楽しい学園生活を送って見せますよ。」

「……お前には悔い改めると言う発想はないのか？」

完璧なまでに無さそうだね。

「とりあえず明日から授業とは別に補習の時間を2時間設けてやるう。」

うわ、めんどくさっ。

「アタシも学校で自習して帰ろうかな。」

『どうして?』

夜遅くになると心配だから優ちゃんには早く帰っておいてほしいん

だけどな。

「だって、そうしたら龍と帰れるじゃない。……／＼／＼／＼」

うわ、今の優ちゃんめっちゃ可愛い。

第25問 初デート（前書き）

なんかイマイチ……

アドバイスお願いします。

第25問 初デート

「ねえ龍、デートに行かない？」

あの激動の試召戦争が終わった次の休日、朝食を食べ終わって一息ついた時に優ちゃんがこう切り出してきた。

『いいよ。どこに行く？映画でもいいし、ショッピングでもいいよ？』

返事はもちろんOKだ。そういえば、ここら辺も少し町並みが変わったよな。今度散策でもするか。

「えっと、観たい映画があるんだけど。」

『OK。行こっか。』

財布には十分な金額も入ってるし、大丈夫だな。

☆

「チケット代、コーラ、ポップコーン……映画館、何と恐ろしい場所!？」

映画館につくと何とも情けないセリフが聞こえた。

「今のって、Fクラスの吉井君？」

『そうだよ。隣には、姫路と島田がいるな。可哀想に、三人分も払

うことになりそうだな。』

「男ならそれぐらいしてもいいんじゃない？」

『主食が水と塩と砂糖しかないヤツだよ？』

「……まあ、たまには例外がいてもいいんじゃないの。」

ふいっと、横を向く優ちゃんの頭を撫でながら映画館の方へ向かう。

『よう、三人とも。』

「あ、おはよう龍斗。隣にいるのは秀吉のお姉さん？」

「ええそうよ。おはよう吉井君。それに姫路さんと島田さんもおはよう。」

「二人はデート中？」

『ああ、明久も両手に花とはよくやるじゃないか。』

優ちゃんは二人と話始めたから俺は明久と話すことにした。

「それにしても参っちゃうよね。映画館がこんなにも高いなんて。」

『いや、それはお前が趣味に全部注ぎ込むのが悪い。』

「……趣味ってお金かかるよね。」

顔をそらしても何も解決しないぞ？まあ、趣味に金がかかるのはわ

かるけど。

『ほれ、これやるよ。今回だけだよ。』

財布から一万円札を取り出して明久に渡す。本当に今回だけだからな。

「ありがとう！でも本当にいいの？」

『趣味に金使うのは俺も理解できるからな。』

「……俺も今回ばかりは、負けを認めざるを得ないぜ。」

声のした方を向くと、手枷をつけられた雄二と霧島がいた。

『どうしたんだ？そんな趣味があるって顔でもないし。』

とりあえず手枷を刀で斬り落としてから尋ねてみると、なぜか霧島が嫌な顔をした。何なんだ？

「ああすまない。それよりお前はいつでもそれ持ってるんだな。警察に捕まったりしないのか？」

『…そろそろ映画の時間だな。』

警察？何それ美味しいの？

「話そらすな！…まあいい。そういえば、秀吉と天音はどうしたんだ？」

『二人は演劇を見に行ったよ。』

「秀吉らしいな。」

確かにね。

『そうだ、折角だし全員で映画見ないか？チケット代は俺が出してやるよ。』

「そうだね！そうしよう！（これでチケット代は浮く！）」

「そうだな！皆で行く方が楽しいしな！（これなら翔子もあまり変なことはしないだろう！）」

何か男二人の本音が垣間見えたけど、まあいいかな。その後七人分のチケットとコーラ、ポップコーンを買ってそれぞれに一個づつ渡して映画を見た。席は明久の隣に姫路と島田が、雄二の隣に霧島が、俺の隣に優ちゃんが座るといった感じだ。

☆

「……………う、……………ゆう！」

ううん、眠いな。誰かが呼んでる気がするけど、まだ眠ってようかな。

「龍！おきなさい！」

『うわ！何だ優ちゃんか。どうしたの？』

あれ？もう映画終わってる？つまり寝ちゃったのか。

「もう。この後みんなどこかに遊びに行くことになったんだけど、龍はどこか行きたいところある？」

行きたいところか、んー、特に無いかな。

『皆に任せるよ。』

皆で話し合った結果、ゲームセンターに行くことになった。

☆

『最近のゲームセンターって色々あるんだね。』

「そうね、アタシも最近ここに来たこともないし、見たこともないのばかりよ。」

回りを見るとレーシングゲームで勝負している明久と雄二がいた。画面を見てみると二人の車がお互いにぶつかり合ってるけど、それって順位を競い合うゲームじゃないの？あ、殴り合いを始めだした。

「龍はあれ止めなくていいの？」

『別にいいでしょ。それよりも優ちゃんはやりたいことあるの？』

「そうねえ、あつ、あのクレーンゲームのぬいぐるみが欲しい。」

そう言って指差したのは大きなリラ○クマのぬいぐるみだった。

『オッケー。一発で取ってあげるよ。』

「次はエアホッケーで勝負だ！雄二！」

「望むところだ！」

まだやってるのか。っと。

『はい、優ちゃん。』

「ありがとう！」

ぬいぐるみを渡すと、笑顔で抱きついてきた。

「次はあれにしない？」

『オッケー。』

その後いろいろなゲームをやったら夕方になったから解散して帰ることになった。

第26問 人生最大の一大事（珍事）！？

優ちゃんとのデートから二週間たった次の休みの日。俺は天音と優ちゃんと秀を合わせた四人で空港に来ていた。

『そろそろだな。』

「……………ほんの二週間なのに懐かしい気分」

「龍と天音の友達ってどういう人なの？」

「気になるのう。」

『あつてからのお楽しみってヤツだよ。』

「龍斗君、天音さん。お久しぶりです。」

俺らが話していると声をかけられたから振り返ると、白いコートで全身を覆っている人がいた。

『久しぶりだね、サラ。』

「……………久しぶり。」

「龍の友達ってこの人？はじめまして、木下優子です。」

「はじめまして、ワシは木下秀吉じゃ。念のために言っておくが、ワシは男じゃ。」

「はじめまして、私はサラトガ・ヨークタウンです。サラ、と呼んでください。」

『とりあえず、まずは俺んちに行こう。サラも長旅疲れたでしょ？』

俺と天音が挨拶をすると優ちゃんと秀とサラが自己紹介を始めたけど、長旅で疲れただろうサラを休ませるために、皆で俺んちに移ることにした。

☆

「そういえば、サラはいつまでそのコート着てるの？もう室内だし脱いだ方がいいんじゃない？」

「えっ？ああ、これはですね。ええっと……」

俺の家についてから少したってもいまだにコートを脱がないサラに疑問を持ったのか、優ちゃんが質問をすると、サラが少し困ったように挙動不審になった。どうしたのかな？

「ええっと、龍斗君。この二人は信用できる人ですか？」

信用できる人？ああ、そういうことか。

『もちろん。だって、俺の嫁と天音の旦那だぞ？信用できるに決まってる。』

「そうですか。では優子さんに秀吉君、このことは誰にも言わないでくださいね。」

そう言うサラはコートを脱ぎ自身の姿を表した。うーん、本人は特異って言ってあまり好きじゃないみたいだけど、俺はきれいだと思うんだけどね。

「白い髪に、紅い眼？」

「はい。実は私、アルビノなんです。それで、この見た目のせいで昔はよくいじめられて。あの、あなた方は変に思いませんか？」

「何とも思わないわ。それに、変って言うよりは綺麗じゃない。その白い髪も紅い眼も誇ってもいいと思うわ。」

「うむ、お主は綺麗なんじゃから自信を持った方がいいのじゃ」

二人の言った言葉が嬉しかったのか目尻に光るものを湛えながらも微笑んで礼を言っていた。

『それよりも、サラがこっちに来るのって親父さんのことどうやって説得したの？』

たしかあの人ってかなりの親バカだったよな？

「ああ、それはですね、文月学園に入れてくれないと嫌いになりますって言ったらさせてくれました。」

親父さんも可哀想に。相当傷ついたに違いない。

「……………それでも、来てくれて嬉しい。」

「私も会えて嬉しいです。あつ、そうだ。お父さんから龍斗君に渡

してくれって言われたものがあるんです。」

『渡すもの?』

何だろう?特に頼んだものはないけど。

「これです。」

サラから受け取ったものはオ○ナミンCだった。なぜに?サラの親父さんは発明家だから何を作ったか気になるけど、まあ、飲んでみるか。

「あと、お父さんから手紙を預かっているんで読めますね。「久しぶりだね。今回は龍斗君に頼みたいことがあって手紙を書かせてもらうよ。実は僕、性別転換薬を発明したんだけど、実験室を爆破しちゃって調合方法を書いた紙が無くなっちゃってね。だから龍斗君に残ってた試作品を渡すから調べてくれないかな?容器はちょうどいいのが無かったからオロナミンCに入れておいたから。」だそうです。」

……え?

「龍?今、それ飲まなかった?」

「えっ!?飲んじやったんですか!?!」

『ぐっ!!!ぐあああっ!!』

性別転換薬を飲んでから数秒すると身体中に碎けるような激痛がし
て思わず膝をついた。

「龍!どうしたの!？」

そして、優ちゃんの声が聞こえた瞬間に俺は意識を手離した。

☆

『うう。あれ?ここは俺の部屋?』

目が覚めると自分の部屋にいた。あれ?さっきサラの親父さんが作った性別転換薬を飲んで、それで気を失って……

『ああ!!』

下を見ると胸が大きくなってる。もしかして、

『ない。』

男の象徴があるべき所を触ってみると、無くなった。

バタンツ!

「龍!」

『ひゃあっ!?!』

あれ?いきなりドアが開いたから驚いたけど、なんか変な声出ちゃった。

「龍、だよね?」

今の俺の姿を見てビックリしたのか確認してきた。残念ながら本物だよ。

『そうだよ。俺が龍だよ。』

「……………兄さん！」

「龍斗君！」

「龍！」

俺と優ちゃんが気まずい雰囲気になると、タイミングを計ったかのように三人が部屋に入ってきた。

「……………に、兄さんが姉さんになった？」

そこはもう少し驚いてほしいな。

「龍斗君！えっと、性別以外でおかしな所はありませんか！？」

うん、そこは性別も含めて聞いてほしかったな。

「む、義兄上が義姉上になってしまったのじゃ。」

『三人とももう少し別のリアクション無いの！？』

「……………だって、かわいいから。」

「そのままでも。」

「いいじゃろ。」

『うわあああん！優ちゃん！皆がいじめてくる！』

ゆ、優ちゃんなら守ってくれるはず。

「そ、そのままでも、いいんじゃない？……／＼／＼／＼（か、かわいいし）」

優ちゃんまで俺の敵なのか！？

「ふふふ。龍、今晚は徹夜で女の子の仕草を仕込むわよ？出来が悪いとオシオキだからね？」

優ちゃんが一番乗り気だった！？

『えっ！？ちよつ、ちよつと待って！？今俺ものすごく貞操の危機を感じるんだけど！？』

「俺、じゃなくて私でしょ？」

『あ……っ！』

優ちゃんの部屋に連れ込まれてから優ちゃんに抗議すると、言葉遣いで注意されると同時に胸の突起を摘ままれた。

『ゆ、優ちゃん、待って。落ち着いて、ね？』

「ふふふ。夜はまだ長いわよ？」

『ちよっ、待って!？ん、あ……っ!』

その後、一晩中女の子の矯正が聞こえたとか。

オリキャラ 2 (前書き)

今回は新キャラ、サラトガ・ヨークタウンのプロファイルです。次回は性別転換した龍斗です

オリキャラ 2

サラトガ・ヨークタウン

身長151cm

体重???

白髪赤眼で肌が真っ白で触れるだけで壊れてしまいそうな華奢な身体、穏やかで誰にでも優しい性格の美少女。明久に被害がいく事に對しては少し攻撃的になる。大体のイメージは「死神のバラッド。」のモモを赤眼にした感じ。

先天性のアルビノだが、龍斗が作り出した紫外線反射率驚異の150%を誇る（そこにあるだけで自分に当たるものだけでなく周囲に当たるものも反射する）植物の繊維を使って作った白色のフード付きコートで全身を覆うことで普通の人と同じ生活を送ることができるようになったので、文月学園に転入してきた。

武術や体を動かすことは苦手だが、紐や鋼線での拘束や攻撃が得意。

召喚獣は白髪赤眼で白いワンピースに赤い靴で巨大な大鎌をもっている。こっちはそのまま「しにがみのバラッド。」のモモ。

腕輪の効果

「魔眼」

眼がさらに赤く光るようになり見られた召喚獣は徐々に点数が減っていく。一度見られたらサラトガの召喚獣を倒すか、自分の召喚獣が倒されるか、サラトガが魔眼を解除する以外点数が減り続ける。

オリ主 性別転換後（前書き）

次回から本編にいきます

オリ主 性別転換後

神崎 龍斗

身長186cm↓167cm

体重65kg↓???kg

性別男↓女

性別転換薬を飲んで性別が変わってしまった龍斗のなれの果て（笑）。身長が縮み、胸も大きすぎず小さすぎずというサイズになった。顔つきは凛々しく、髪の毛は膝辺りまで長くなり邪魔だから切ろうとしたが優子に止められ、そのままにすることにした。

コートは身長が変わったから新しくしたが、刀はそのまま同じ物を帯刀している。

召喚獣は黒い服と黒いミニスカートと黒いコートを着て、腰に二本の日本刀を差している。

腕輪の効果

「殺神」↓「投擲」

点数を消費してナイフを生成し射出する。

第27問 驚愕の事実

「へえー、お前も大変な目にあったな。」

『他人事みたいに言わないでよ。本当に大変だったんだから。』

性別が変わってから優子（今回を機に呼び方を変えた）に徹夜で教育（調教）された次の日。学校に行きたくないのに優子に引きずられて登校した私は教室で雄二に愚痴ってた。え？口調が違うって？それは優子の教育の賜物だよ。だって、一回間違えるだけで、胸を揉まれたり、……もうダメッ！この先は言えないっ！！

「何を思い出してるのかは知らないが、顔が赤いぞ？」

『あうう。』

「……………姉さん、昨日はあんなに喘いでたからね。」

『お願いだからもう思い出させないでえっ！』

「昨日は眠れなかったのじゃ。」

『うゝゝ。』

ミカン箱に突っ伏して顔を隠す。皆酷いよ。

「席に着け！出席をとるぞ！」

西村先生が教室に入ってきて皆が席に着いた。

「安藤！」

「はい。」

「遠藤！」

「はい。」

「尾川！」

「はい。」

「神崎天音！」

「……………はい。」

「神崎龍斗！」

『はい。』

「……………神崎龍斗。」

『……………はい。』

もうイヤ。

「本物…なのか？」

『そうです。』

「……そうか。」

西村先生はそのまま出席を再開した。うう…

「……………姉さん、ドンマイ。」

『うう…挫けそうだよお。』

どうしよう、涙が出てきそう。

「……………大丈夫。きちんと女らしく見えるから問題ない。」

『うわああああん!』

もうイヤだあ!

「落ち着かんか!」

『……………はい。すいませんでした。』

「まったく。神崎、学園長室まで行くぞ、ついてこい。」

西村先生に言われたから渋々ついていく。学園長ってことは召喚獣関係かな。

「失礼します、学園長。」

っと、考え事してたらもう着いた。はあ、どんな話になるんだろ。

「失礼します。」

「あれ？龍斗君、どうしたんですか？」

学園長室に入ると学園長の他にサラがいた。

『性別のことを話そうかと思ってね。』

「それなら安心してください。今、私が説明してましたから。」

『そう、じゃあ私はもう戻ってもいいの？』

「ちょっと待つさね。アンタには確認してもらわなくちゃいけないことがあるさね。」

もう用無しかと思って退室しようとしたら、学園長に呼び止められた。

『確認したいこと、ですか？』

「ああ、今からアンタの召喚獣をだしてくれさね。」

召喚獣？もしかして、そっちの性別も見るとはなのかな？

『サモン
試獣召喚』

私の目の前に魔方阵が出現すると、一体の召喚獣が出てきた。

『はあ。やっぱりか。』

そこに現れた召喚獣は黒い服と黒いミニスカートと黒いコートを着て、腰に二本の日本刀を差している私をデフォルメしたものだっ

「可愛いですね。私もやってみていいですか？」

「ああ、いいさね。」

サラが私の召喚獣を見てそう言うのと学園長も許可を出した。

「では、試獣召喚^{サモン}」

サラの目の前に魔方陣が現れると、白髪赤眼で白いワンピースに赤い靴で巨大な大鎌をもっている召喚獣が出てきた。

「これが私の召喚獣。」

召喚獣にジャンプさせたり大鎌を振ったりさせながらサラは感慨深そうにそう呟いた。

「どうさね、気に入ったかい？それは私が自ら作った自信作さね。」

そういえば、学園長とサラって何か仲良さそうだな。

「はい、ありがとうございます。カヲルおばあちゃん^{……}。」

……へ？今、何て？

『ね、ねえサラ。今、おばあちゃんって言わなかった？』

「正確には親戚ですけど、どうかしたんですか？」

『うつそおお！？なんの冗談！？』

あ、ありえない！

「アンタは黙ってるさね！！まったく。サラ、アンタのクラスはコイツと同じFクラスさね。」

「はい、わかりました。では、失礼しました。」

『失礼しました。じゃあ、行こっか。』

「はい。そういえば、吉井明久君ってこの学校でしたね？」

『うん。そうだけど、どうして知ってるの？』

「ふふっ♪秘密です♪」

？？どうしたんだろ、いきなり機嫌良くなって。まあ、いいか。

『ここがFクラスだよ。』

「わかりました。」

二人で教室に入るとそこには天音、秀吉（今回を機に呼び方を変えた）、姫路、島田の四人しかいなかった。

『他の皆は？』

「……………野球。」

「西村先生が向かったから直に帰るじゃろ。」

他の人が気になったから聞いてみると、自分の場所に座っている秀吉と、秀吉に膝枕をしてもらっている天音が応えてくれた。そういえば、西村先生私を送るとすぐにどこかに行ったもんな。

『そっか。サラ、座って待ってよ?』

「はい。」

「まったく、鉄人にも加減って言う言葉を知ってほしいよね。」

「同感だ。」

おっ、皆帰ってきたね。

ガラガラ

「ただいまーっと。」

「ふう、疲れたな。」

ボロボロになったFクラスクラスのメンバー達が帰ってきた。まったく、野球をするからそうなるんだよ。

「明久君っ!」

『わひゃっ!』

明久が姿を現すとサラがすごい勢いで明久に抱きついた。と同時にクラス中が殺気だった。怖すぎるよアンタら、特に島田と姫路。

「誰なのいきなり抱きついてきて、ってサラ!？」

「お久しぶりです!」

二人とも知り合いなのかな？

「「「異端者吉井明久を殺せえっ!!」」」

「アキ、ちょーっと来てくれる? あっちまで逝きましょ?」

「吉井君! 話を聞かせてください! これはどういうことですか!？」

ドゴシャアッ!

『皆、とりあえず落ち着こう、ね?』

「「「ハイ!」」」

これ以上騒ぎが大きくなるとめんどくさいから、近くにいる男子の頭を掴んで地面に叩きつけてからそう言う。うーん、やっぱり体が変わってから力が弱くなっちゃったかな。

「……………それで、二人はどういう関係?」

「え? どういうって、サラは僕の許嫁だけど?」

「「「……………」」」

クラスの皆が固まった。
ついでに私も固まった。
サラが頬を赤らめた。

『ええっ!?!』

「……………!?!」

マジかよ。

「「殺せえっ!」」

「アキ! 一体どういうことよ! 説明しなさい!」

「吉井君! ということか説明してください!」

また五月蠅くなってきたね。また沈めるか。

「……………っ!」

「え?」

「か、体が動かない。」

明久に詰め寄ろうとした（殺そうとしたかな?）人たちが急に動きを止めた。ん? これは、糸か。

「皆さん、動かないで下さい。下手に動くと……………死にますよ?」

声のした方を向くと、そこにはいつの間にか明久から離れて両手から大量の糸を教室中に張り巡らせたサラがいた。確かに、サラは糸を使うのはうまいけど、これはどうやったの？

「禁則事項です♪」

あ、そうなんだ。

第28問 学園祭実行委員決め

第11問

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力下さい。

『あなたが今欲しい物はなんですか？』

姫路瑞希の答え

『クラスメイトとの思い出』

教師のコメント

なるほど。お客さんの思い出になる様な、そういった出し物も良いかもしれませんね。写真館とかも候補になり得ると覚えておきます。

土屋康太の答え

『Hな本（訂正）成人向けの本』

教師のコメント

取り消し線の意味があるのででしょうか。

吉井明久の答え

『カロリー』

教師のコメント

この回答に君の生命の危機が感じられます。

神崎龍斗の答え

『性別転換薬』

教師のコメント

君に一体何があったんですか？

Fクラスの暴動もサラが抑えて何とかいつも通りに戻った教室で、あと何週間か先にある文化祭に向けての話し合いがされていた。

「さて。そろそろ春の学園祭、『清涼祭』の出し物を決めなくちゃいけない時期が来たんだが。とりあえず、議事進行並びに実行委員として誰かを任命する。そいつに全権を委ねるので、後は任せた。」

だるそうに立ちながら話を進めていく雄二。清涼祭には興味がないのかな？ 試召戦争の時とは大違いだね。

「んじゃ、学園祭実行委員は島田ということでもいいか？」

雄二はクラスを一瞥すると島田を指名した。ふむ、お……じゃなくて私や天音やサラだとこっちに来てばかりだから当てにはできず、姫路だと皆の意見を聞いている間に時間切れになりそうで、他の人は……まあ、適任だよな。

「え？ ウチがやるの？ うーん……、ウチは召喚大会に出るから、ちよつと困るかな。」

「雄二。実行委員なら、美波より姫路さんの方が適任なんじゃないの？」

「え？ 私ですか？」

「姫路には無理だな。多分全員の意見を丁寧に聞いているうちにタイムアップになる。」

やっぱりその通りか。それにしても、すごい眠そうだね、雄二。

「それにね、アキ。瑞希も召喚大会に出るのよ。」

「え？ そうなの？」

「はい。美波ちゃんと組んで出場するつもりなんです。」

へへ、何か以外だなあ。ああいう見せ物みたいな大会に出るなんて。

「学校の宣伝みたいな行事なのに。二人とも物好きだなあ。」

「ウチは瑞希に誘われてんだけどね。瑞希ってば、お父さんを見返したいって言ってきかないんだから。」

『お父さんを見返す？ ということ？』

「うん。家で色々言われたんだって。『Fクラスのことをバカにされたんです！ 許せません！』って怒ってるの。」

「……………そうなの？」

天音も以外だったらしく姫路に聞いていた。

『姫路が怒るなんて珍しそうだね。』

見た目というか、おとなしそうな性格なのに。

「だって、皆のことを何にもわかっていないくせに、Fクラスっていう理由だけでバカにするんですよ？ 許せませんっ！」

……………はあ？

『それは間違っていないと思うよ?』

「どうしてですか?」

『だって、学年のバカ達が入るクラスがFクラスだから、バカにされるのも当たり前でしょ? 特に姫路の成績だと学年最高のAクラスは確実だったのに学年最低のFクラスに入ることになったんだから、そんな風に思われても仕方ないと思うよ。』

それを言ったら俺と天音とサラもだけどね。

「そつ、それでも許せないんです!」

『……ふうん。』

まあいいけどね。

「まっ、まあ、だからFクラスのウチと組んで、召喚大会で優勝してお父さんの鼻をあかそうってワケ。」

なるほど。でも、片方が学年トップクラスだと、その効果も薄そうだなあ。

「お前ら。こっちの話が続けていいか?」

「あ、ごめん雄二。美波が実行委員になる話だったよね?」

『でも、島田は召喚大会に出るんでしょ?』

「……………なら、サポートをつければいい。」

「そうだな。よし、サポートとして副実行委員を選出しよう。島田もそれならいいだろう?」

チラッと明久のことを見てからそう言う雄二。もしかして、明久を人身御供にするつもりなのかな。

「んゝ……。そうね、その副実行委員次第でやってもいいけど……」
そう言いながら島田は明久のことをチラッと見た。

「そうか。では、まず皆に副実行委員の候補を挙げてもらう。その中から島田が二人を選んで決選投票をしたらいいだろう。」

なんかもう決まってそうな気がするなあ。

「吉井が適任だと思う。」

「やはり坂本がやるべきじゃないか?」

「姫路さんと結婚したい。」

「ここは須川にやってもらった方が。」

「秀吉は俺のよもうべああっ!?!」

最後のやつ、憐れ。

「ワシは明久が適任じゃと思うがの。」

「って、秀吉。僕もそういう面倒な役は、できればパスしたいな～なんて。」

秀吉の推薦に明久が面倒だと言ってやんわりと否定していた。まったく、誰だってそれは同じなのに。

『それは他の皆も一緒でしょ？なら適任の者にやってもらった方が良いじゃん？』

「むう……。それはそうだけど……。」

「よし。じゃあ島田。今挙がった連中から二人を選んでくれ。」

「そうね～。それじゃ……。」

明久を説得すると、タイミングを測ったかのように雄二が島田を催促し、島田はボロボロの黒板に候補を書き始めた。

「候補？……吉井。」

うん、予想通りだね。

「候補？……明久。」

え？

「さて。この二人のどちらが良いか、選んでくれ。」

『ちょっと待って。その挙げ方はおかしいと思うよ。』

「良いじゃないそれくらい。」

『ルールには従いなさい。島田が挙げたのは一人だけでしょ?』

本気でいいと思ってたのなら悲しいな。島田はある程度の常識はあると思ってたのに。

「……わかったわよ。」

「候補?……須川。」

島田がきちんと二人を選んだ所で皆がお互いに考えを話し始めた。

「ありがとう。龍斗。」

明久が私にお礼を言ってきた。やっぱり無理矢理は嫌よね。

『ううん、気にしないで。』

その場で少し話していたら向こうは終わったらしく、結局、副実行委員は明久に決まった。

第29問 クラスの出し物

「それじゃ、ちゃっちゃと決めるわよ。クラスの出し物でやりたいものがあれば挙手してもらえる？」

島田が告げると何人かが手を挙げた。全員が全員やる気無しってわけじゃないんだ。

「はい、土屋。」

「……（スクツ）写真館。」

「……土屋の言う写真館ってかなり危険な予感がするんだけど。」
そもそも何を撮って販売するのかな？

「アキ、一応意見だから黒板に書いてもらえる？」

「あいよー。」

【候補？ 写真館《秘密の覗き部屋》】

それなんてネーミングセンス？

「次。はい、横溝。」

「メイド喫茶——と言いたいけど、流石に使い古されていると思うので、ここは斬新にウェディング喫茶を提案します。」

ウェディング喫茶？何をするんだろ？

「ウェディング喫茶？それってどういうの？」

「別に普通の喫茶店だけど、ウェイトレスがウェディングドレスを着ているんだ。」

それって必然的に女子がだよね？嫌だなあ。

「斬新ではあるな。」

「憧れる女子也多そうだ。」

「でも、ウェディングドレスって動きにくくないか？」

「調達するのも大変だぞ？」

「それに、男は嫌がらないか？人生の墓場、とかいうくらいだしな。」

「ほら、アキ。今の意見を黒板に書いて。」

「あ、うん。」

次は何て書くのかな？あ、今の話だと人生の墓場って書きそうな気がする。

【候補？ ウェディング喫茶《人生の墓場》】

これ、西村先生に見られたらどうするのかな？

「さて、他に意見は——はい、須川。」

「俺は中華喫茶を提案する。」

須川はそう言いながら立ち上がった。

「中華喫茶？チャイナドレスでも着せようっていうの？」

えー、それはそれでなんか嫌だなあ。

「いや、違う。俺の提案する中華喫茶は本格的なウーロン茶と簡単な飲茶^{ヤムチャ}を出す店だ。そうやってイロモノ的な格好をして稼ごうってワケじゃない。そもそも、食の起源は中国にあるという言葉があることからわかるように、こと《食べる》という文化に対しては中華ほど奥の深いジャンルはない。近年、ヨーロッパ文化による中華料理の淘汰が世間では見られるが、本来食というものは——」

すごい知識だなあ。でも私は、中華料理はあんまり好きじゃないからなあ。脂っこいし。

「アキ。それじゃ、須川の意見も黒板に書いてくれる？」

「あ、うん。」

どうしたのかな？なかなか手を動かさないけど。……もしかして、思いつきで書いてるとか？

「どうしたの？早く書いてよ。」

「りよ、了解。」

【候補？ ヨーロッパ 中華喫茶】

「明久君……」

サラも呆れたのか額に手をあてた。

「じゃあ最後に、神崎。」

『私は純和風喫茶がいいな。下に畳を置いて、お団子とかの和菓子を作って販売をする喫茶店。あと、私が風邪薬とか漢方薬なら作って販売するし結構な利益が出ると思うよ？。』

多分違法にはならないよね？まあなるとしても権力で何とかしちゃうばいよね。

「アキ、これも書いておいてもらえる？」

「うん、わかった。」

変な名前はやめてよ？お願いだから。

【候補？ 和風喫茶兼薬屋《永遠亭》】

何かすごい名前がついちやった！？この名前はダメな気がするんだけど、主に著作権的な感じで。

ガラガラッ

教室の扉が音を立てて開いたからそっちを見ると、西村先生が現れた。

「皆、清涼祭の出し物は決まったか？」

「今のところ、候補は黒板に書いてある三つです。」

【候補？ 写真館《秘密の覗き部屋》】

【候補？ ウェディング喫茶《人生の墓場》】

【候補？ 中華喫茶 ヨーロピアン】

【候補？ 和風喫茶兼薬屋《永遠亭》】

「……補修の時間を倍にした方が良くかもしれんな。」

私もそう思います。

「せ、先生！それは違うんです！」

「そうです！それは吉井が勝手に書いたんです！」

「僕らがバカなわけじゃありません！」

うわぁ、皆ひどいなあ。いくら補習が嫌だからって明久を身代わりにするなんて。

「皆さん、最低です。」

「「「すいませんでした先生！僕らが悪かったです！」」」

サラがボソツと一言言々と皆が一斉に謝りだした。このクラスって団結力だけならすごいなあ。

「まったくお前達は……。少しは真面目にやったらどうだ。稼ぎを出してクラスの設備を向上させようとか、そういった気持ちすらないのか？」

あ、その手があったか。ゴザだとお尻が痛いんだよね。私も本気で頑張ろっかな。

「そうか！その手があったか！」

「なにも試召戦争だけが設備向上のチャンスじゃないよな！」

「いい加減この設備にも我慢の限界だ！」

皆も最低クラスの更に下の設備には我慢の限界だったみたい。

『皆頑張ろ！頑張って設備向上しよ！』

「……………私も頑張る。」

「「「うおおおお！やるぞおおおお！」」」

私と天音が鼓舞をすると皆がやる気を出してくれた。

「うむ、ワシも頑張るとするかのう。」

「……………うん。頑張ろうね。」

やっぱり天音も初めての文化祭だからヤル気満々だね。

「出し物はどうする？利潤の多い喫茶店が良いんじゃないか？」

「それなら永遠亭が良いんじゃないか？」

「だけど薬屋って学生がやっても良いのか？」

『それならご心配なく。私と天音は薬剤師その他諸々の免許持っているから。』

全部アメリカで取ったやつだけど。

「それなら良いんじゃないか？」

「いや、簡単なカジノを作ろう。」

「はいはい！ちょっと静かにして！」

「オバケ屋敷とかの方が受けると思う。」

「焼きとうもろこしを売ろう。」

うわあ。どんどん意見がバラバラになっていくなあ。

「……………秀君はどれが良いの？」

「ふむ、そうじゃな。和風喫茶兼薬屋の永遠亭にするかのう。」

「……………よかった、私もそれが良い。」

「じゃが、二人とも本当に薬剤師の免許を持っておるのか？」

『うん、それに向こうじゃ、ちょっと有名だったし。』

「……………神崎グループがここ四年で販売した新しい薬の3分の1は兄さんが作った。」

『それでもサラの父親と一緒に開発したやつがほとんどだよ。』

「それでもすごいんじゃない。」

「Fクラスの出し物は和風喫茶兼薬屋にします！全員、協力するよ
うに！」

天音と秀吉と話していると、向こうも話し終わったらしく永遠亭に決まった。

第30問 キレルシスター（前書き）

サブタイトル決めるのってすごい難しい。
こんなタイトルでいいのかなあ……

第30問 キレルシスター

第12問

問 以下の問いに答えなさい。

『バルト三国と呼ばれる国名を全て挙げなさい。』

姫路瑞希の答え

『リトアニア エストニア ラトビア』

教師のコメント

そのとおりです。

土屋康太の答え

『アジア ヨーロッパ 浦安』

教師のコメント

土屋君にとっての国の定義が気になります

吉井明久の答え

『香川 徳島 愛媛 高地』

サラトガ・ヨークタウンのコメント

明久君、それは四国ですよ。

神崎龍斗の答え

『魏 呉 蜀』

教師のコメント

それは三国志です。

「それじゃあ、まずは厨房係から決めたいと思います。料理ができる人は立ってください。」

「料理なら俺に任せろ。」

「……（スクツ）」

須川に康太も料理できるんだ。でも、人数は少ないなあ。よし、私もやろうかな。

『私もやるよ。』

「……………兄さんほどじゃないけど、私もできる。」

「私もできます。」

そういえば、サラも料理できるんだっけ。まあ、お父さんがあれだからできるようになるのもわかるなあ。

「うーん、三人ともかわいいからできればホールに行ってもらいたいんだけどな。」

そんな決めでいいのかなあ。確かに、そっちの方が客は入りそうだけどなあ。

「それなら暇なときにはホールにいます。」

「うん。そうしてくれると嬉しいな。」

「はい、わかりました。」

「アキ。ウチも厨房係にしようかな？」

明久とサラが話していると島田が明久にそう言ってきた。厨房係になりたいんならそうすればいいのに、どうしたのかな？

「うん。適任だと思う。ってうわぁっ！」

明久がそう返事しようとしたら島田がいきなり明久を殴ろうとし、その体勢で固まった。よく見ると身体中に糸が張り巡らせてあった。

「……アナタは、明久君に一体何をしようとしたんですか？」

聞いただけで背筋が凍るような声を発していたのはサラで、フードでよく見えない目を見ると身体中が震えるほど怖かった。

「な、何って体罰を与えようとしただけよ！早くこれをほどきなさい！痛いじゃない！」

そのセリフを聞いたサラは目に侮蔑の色を湛えると少しずつ糸をきつくしていった。あゝあ、そのセリフをここで言うのはナンセンスだったね。

「アナタには何を言っても無駄そうですね。……このまま、殺してしまった方がいいのかしら？」

っ！？それはマズイ！！

「サラ！それはま——」

「冗談ですよ。」

「え？」

「私が明久君が悲しむことをするわけじゃないですか。ただ、少し怒っただけですよ。大丈夫です、気にしないでください。」

「うん、サラがそう言うなら良かったけど……」

止めようとした明久にそう言いながら糸をしまうサラを見て思わず溜め息をついてしまった。本当に殺るつもりかと思っちゃったよ。

「さ、続きをしませんか？」

「えっ、そうね！皆厨房とホールに別れて！」

サラがいつもの調子に戻ると他の皆もそれまで通りに動き出した。よし、決めた！サラは絶対に怒らせないようにしよう！

☆

「アキ、ちょっといい？」

帰りのホームルームが終わって皆が帰っているなか、島田がサラと帰ろうとしていた明久を呼び止めた。

「ん、何か用？」

「用って言うか、相談なんだけど。」

「相談？僕で良ければ聞かせてもらおうけど。いいよね、サウ？」

「はい。大丈夫です。」

『私も良ければ相談に乗るよ。』

何か真剣な話しそうだし。

「うん。三人ともありがとう。多分、アキが言うのが一番だと思うんだけど——その、やっぱり坂本をなんとか学園祭に引っ張り出せないかな？」

やっぱり、ちゃんとしたリーダーがいた方がうまくいくんだよね。

「うーん、それは難しいなあ……。さっきも言ったけど、雄二は興味の無い事には徹底的に無関心だからね。」

「真剣にお願いしてみたらいいのでは？」

「うーん、それでも聞いてくれるかなあ。」

「でも、アキが頼めばきっと動いてくれるよね。」

どこか確信しているような期待の眼差し。何か根拠でもあるのかな？

「え？別に僕が頼んだからって、アイツの返事は変わらないと思うけど。」

「ううん、そんなことない。きっとアキの頼みなら引き受けてくれるはず。だって——」

「そりゃ確かに、よくつるんではいるけど、だからと言って別に。」

「だってアンタたち、愛し合っているんでしょう？」

それはないでしょ。そもそも明久にはサラがいるし。

「もう僕お婿にいけないっ！」

「大丈夫です、明久君。私がいいますよ。」

頭を押さえて叫び始めた明久の手をサラが優しく握り、聖母のような笑みを浮かべながらそう言った。

「うん、そうだったね。ありがとうサラ。」

「それじゃ、坂本は動いてくれないってこと？」

島田が残念そうな顔をしながら明久に聞いた。

「え？ あ、うん。そういうことになるのかなあ。」

「なんとかできないの？ このままじゃ喫茶店が失敗に終わるような……」

明久の返事に目を伏せ、かなり沈んだ表情になった。流石に、この件を放っておくのは後味悪いからなあ。

『まあ、詳しい事情はわからないけど、喫茶店を成功させるには雄二の協力は必要不可欠だね。微力ながら手伝わせてもらうよ。』

「そうだね、任せてよ！なんとしても雄二を焚き付けてやるさ！それじゃ、まずは雄二に連絡を取らないとね。」

明久はそう言いながらポケットから携帯を取り出して、電話をかけ始めた。そういえば、校内で携帯って使っているの？

「あ、雄二。ちょっと話が――え？雄二。今何してるの？――雄二！？もしもし！もしもーし！」

何かすごく不安を煽る会話をしてるよ。大丈夫なのかな？

『雄二どうかしたの？何か言ってた？』

「えっと、「見つかった。」とか「鞆を頼む。」とか言ってた。」

「……なんか、あったんですか？」

『予想だけど、霧島から逃げ回ってるんじゃないの？意外と異性には弱そうだし。』

でも、どうして逃げ回ってるんだろ？普通の男ならむしろ喜びそうなのに。

「そうすると、坂本と連絡をとるのは難しいわね」

「いや、これはチャンスだ。」

『そうなの？なんか雄二は絶体絶命みたいな感じなんだけど？』

「雄二を喫茶店に引っ張り出すには丁度いい状況なんだよ。うん。ちょっと皆も協力してくれるかな？」

「それは構いませんが、坂本君の居場所はわかるんですか？」

確かにサラの言う通りだ。雄二の居場所のアテはあるのかな？

「大丈夫。相手の考えが読めるのは、なにも雄二だけじゃない。」

『何かいい案でもあるの？』

「まあね。」

ニヤリと笑ってそう答える明久に果てしなく不安を感じるんだけど、大丈夫かなあ？

第31問 学園最低コンビ結成(前書き)

どうしてだろう。優子が壊れてきてる気がする

第31問 学園最低コンビ結成

「やあ雄二。奇遇だね。」

女子更衣室の中、部屋の中の物陰で雄二が体を小さくしていた。体が大きいから小さくする意味が無い気がするよ。

「……こういう偶然があれば女子更衣室で鉢合わせるのか教えてくれ。」

うん。私も教えてほしいな。なんで雄二がここにいるのか。

「やだな。ただの偶然だよ。」

「嘘をつけ。こんな場所で偶然会うワケが——」

ガチャッ

……え？

『ゆ、優子!?!』

「えーっと……あれ？龍とFクラスの問題児コンビ？ここ、女子更衣室だね？」

「やあ木下優子さん。奇遇だね。」

「秀吉の姉さんか。奇遇じゃないか。」

「あ、うん。奇遇だね。」

そう言いながら爽やかに笑い合う三人。何かすごいマズイことになりそう。

「……龍を置いていけば見逃してあげるわよ？」

「じゃあな龍斗。また後で。」

「また後で。」

『ちよっ！？待って！？なんかおかしいよ！？』

そう叫ぶ私を置いて無情にもドアが閉まった。

「さてと。男子を女子更衣室に入れる悪い子にはお仕置きをしなきゃ。」

『ま、待って！？……あっ……／／／／／』

そう言いながら、背筋を指で優しくなぞられて私は腰が抜けて座り込んでしまった。うう、変な声が出ちゃった。

「ふふっ。女の子になってからスゴい可愛くなったわね、龍。」

そう言うと優子は左手で太股を撫でながらスカートを上げようとしてきた。

『そ、それはダメエツ！！』

「甘いわね、龍。」

『ひゃうっ……／＼／＼／』

私が両手でスカートを押さえると、それを狙っていたかのように右手で私の胸を揉んできた。

「簡単にイケるとは思わないことね。」

『あうっ……ハア、ハア……な、何で？……／＼／＼／』

「何で？って、決まってるじゃない、これはお仕置きだからよ♪」

※これより先は過激な性描写になる為カットします。ゆっくり妄想
していったね！！

あう。学校だからほどほどで許してくれて助かったあ。

「ん？龍斗か、無事だったか？」

「あ、大丈夫？」

こ、こいつら！！他人事だと思って！！

「ま、待て！お前は何を持っているんだ！？」

『うるさいうるさいうるさい！！私が酷い目にあっただんだから二人

も地獄へ逝っちゃえ!』

そう言いながらナイフを投げるけど、こいつら避けるの上手すぎ!

『いい加減に当たりなさいよお!』

「無茶言うな!! 当たったらマズイだろうが!」

「うわっ!? ちょっと待って!?!」

『……っ!?!』

「……………姉さん、落ち着いて。」

ナイフを投げていると突然、後ろから誰かに羽交い締めをされたから見てみると天音が私のことを羽交い締めしていた。

「……………落ち着いた?」

『うん。ありがとう。』

やっぱり、ちょっと暴れすぎたかな?

「はあ、まあいいか。それよりも、今から学園長に会いに行くんだが、行くか?」

『行くよ。私に手伝えることがあれば手伝うし。』

「……………行く。」

って言っても、学園長室はすぐそこなんだよね。

「……賞品の……として隠し……」

「……こそ……勝手に……如月ハイランドに……」

誰かが学園長と話してる？それに如月ハイランドって、今度神崎グループが新しくオープンする遊園地じゃん。

「どうした、明久？」

「いや、中で何か話をしているみたいなんだけど。」

「そうか。つまり中には学園長がいるというわけだな。無駄足にならなくて何よりだ。さっさと中に入るぞ。」

普通そこは話が終わるまで待つんじゃないの！？明久も何納得したような表情してるの！？

「失礼しまーす！」

結局、本当に入っちゃった。

「本当に失礼なガキどもだねえ。普通は返事を待つもんだよ。」

第一声でガキどもって言うてくるアンタにだけは失礼とは言われたくないなあ。

「やれやれ。取り込み中だというのに、とんだ来客ですね。これでは話を続けることもできません。……まさか、貴女の差し金ですか

「？」

えーっと、たしか、教頭の竹原先生だっけ？なんか好きになれない人だなあ。

「馬鹿を言わないでくれ。どうしてこのアタシがそんなセコい手を使わなきゃいけないのさ。負い目があるというわけでもないのに。」

「それはどうだか、学園長は隠し事がお得意のようですから。」

さっきから何の話をしてるのかな？経営に関することなのかな？

「さっきから言っているように隠し事なんて無いね。アンタの見当違いだよ。」

「……そうですか。そこまで否定されるならこの場はそういうことにしておきましょう。」

ん？今部屋を出ていくとき隅を一瞬見たけど、何かあるのかなあ。

『雄二、話はそっちで進めておいて。私は気になることがあるから。』

「ああ、わかった。」

雄二に許可を取ってから、内ポケットにある盗聴器や盗撮カメラを発見するための機械を取り出して部屋の隅から調べていくと、鉢植えの下に盗聴器が見つかった。何か、隠すところがベタだね。って、これ送信器でもあるの！？

『雄二、教頭にバレたらマズイ話とかもうしちゃった?』

「ん? まあな。だが何で教頭にバレたらマズイんだ?」

ええ。

『多分、教頭は学園長の失脚を狙ってる。それで、盗聴器とその送信器が隠してあったんだ。たぶんその話は筒抜けになってるよ。』

「何だと!?!」

「え? どういうことなの?」

明久って、やっぱり馬鹿だなあ。

『つまり、学園長の失脚を狙ってる教頭にこの話がバレたってことだよ。』

「ええ!?! それってマズイんじゃないの!?!」

「……まあいい。それよりも、取引は成立でいいな?」

「いいさね。そこまで協力するんだ。当然召喚大会で、優勝できるんだろうね?」

学園長の問いかけに雄二は不敵な笑みを浮かべながらこう答えた。

「無論だ。俺たちを誰だと思っている?」

……学園の問題児コンビ、かな？

第32問 開店直前（前書き）

気づいたらテスト5日前……

第32問 開店直前

第13問

学園祭の出し物を決める為のアンケートにご協力ください。

『喫茶店を経営する場合、制服はどんなものが良いですか?』

姫路瑞希の答え

『家庭用の可愛いエプロン』

教師のコメント

いかにも学園祭らしいですね。コストもかからないですし、いい考えです。

土屋康太の答え

『スカートは膝上15センチ、胸元はエプロンドレスのように若干の強調をしながらも品を保つ。色は白を基調とした薄い青が望ましい。トレイは輝く銀で照り返しが得られるくらいのもを用意し裏にはロゴを入れる。靴は5センチ程度のヒールを――』

教師のコメント

裏面にまでびっしりと書き込まなくても。

吉井明久の答え

『ブラジャー』

サラトガ・ヨークタウンのコメント

ブレザーとの間違いだと信じています。

神崎龍斗の答え

『和服』

教師のコメント

貴女にはそれが一番合っていると思います。巫女さんの衣装なんか

いかがですか？

神崎天音の答え

『……………秀君以外に見せるつもりは無い』

教師のコメント

そうですか。

「いつもはただのバカに見えるけど、坂本の統率力は凄いわね。」

「ホント、いつもはただのバカなのにね。」

島田と明久が言えることではないと思うんだけどなあ。今日は清涼祭初日の朝。私たちの教室はいつもの汚さを一新して純和風な喫茶店に変わっていた。

「でも、龍斗のおかげで本当に助かったよ。まさかこんなにきれいな畳を使えるとは思ってなかったよ。」

『いいよいいよ。皆で楽しみたいからやったわけだし。』

私にとっては初めての文化祭だもん。成功させたいし。

「室内の装飾も綺麗だし、これならうまくいくよね？」

「……………抹茶も完璧。」

『そっちもできたの？ってことは天音の試験に合格したんだ。』

「……厳しかったが、問題ない。」

後ろから現れた康太は私にピースをしてきた。

『じゃあ他も?』

「……味見用。」

うなずいてから差し出してきた手には皆の分の羊羹がのっている皿があった。うん見た目も良さそうだし大丈夫そうだね。

『じゃあ、頂きます。』

皿にのっている羊羹の1つにつまようじを刺して口に入れてみた。
うん、おいしい。

『おいしいよ。これなら成功間違いなしだね。』

「本当に?じゃあ僕も。」

明久はそう言うのと羊羹を1つ掴んで口に入れた。つまようじあるのに。

「ふむふむ、外はゴリゴリでありながら中はギトギト、甘すぎず酸っぱすぎる味わいが何ともンゴバァッ!？」

『明久!?!』

気絶した明久の気道を確保して呼吸を確認、無い!?! 脈拍の確認、

止まってる！？仕方ない、確かコートの内ポケットに電気ショックが、あった！

『皆少し離れて！』

皆が離れたのを確認してから電気ショックを開始した。

「ゴフツ！」

ふう、何とか一回で回復した。とりあえずこっちは置いておいて今は。

『誰がこれを作った！！？』

今は誰がこれを作ったか、を確認しなきゃ。

「あ、それは私です。」

私が何で怒っているのかわかっていない顔をして姫路が自ら名乗り出た。

『……姫路は、これに一体、何を入れた？』

「えっとですね、隠し味にクロロフィルを……ひいっ！？」

『貴様は、料理を馬鹿にしてるのかっ！！』

コイツが隠し味と一言って（偽って）入れた一材料（毒物）を聞いたとたん、私は怒りを押さえきれずコイツの胸ぐらを掴んで怒鳴っていた。

「ちょ、ちよつと。そこまで怒らなくても……」

『黙れっ!!じゃあお前はこの水酸化ナトリウムを調味料だからと言って飲めるのか!?!』

コイツのことを庇おうとした島田に対して、コートから出した水酸化ナトリウムを出して見せるとそこで押し黙った。

『そんなことで黙るなら最初から庇うなっ!!』

おおかた、友達だから庇おうとしたんだろうな。

「……………姉さん、その辺でストップ。そろそろ時間になる。」

『……………わかった。姫路、金輪際料理を作るな。』

「……………姫路、時間がないから止めたけど、私も姉さんと同じ気持ち。料理を愚弄するな。」

「……………はい。」

『じゃあ皆は着替えてね!』

沈んでいる姫路を放っておいて他の人たちへ指示を出す。ちなみに私、天音、サラ、姫路、島田の五人は浴衣を着ている。まあ、サラはその上からコートを着ているからわかりづらいけどね。それと、男子達には板前さんみたいな服を着てもらってる。

「ところで、雄二はどこへ行っておったのじゃ?」

『あれ？いつのまに帰ってきたの？』

秀吉が雄二に話しかけるまで気づかなかった。

「ああ、ちよつと話し合いにな。」

雄二にしては歯切れが悪いな。多分、学園長と話し合ってたんだろ
うけど。

「それより、喫茶店はいつでもいけるな？」

「バッチリじゃ。」

「……抹茶も茶菓子も大丈夫。」

「よし。少しの間、喫茶店は龍斗に天音と秀吉、ムッツリーニに任
せる。俺は明久と召喚大会の一回戦を済ませてくるからな。」

そう言って私達の肩をポンポン、と叩いてきた。

「あれ？アンタ達も召喚大会に出るの？」

「え？あ、うん。色々あってね。」

「もしかして、賞品が目的とか……？」

そう言って島田は明久を探るように睨み付けていた。

「う、うん。まあね。」

その視線に耐えながら答える明久。

「……誰と行くつもり？」

島田は明久のこと嫌ってるのかな？ じゃなきゃそんな風に睨んだり
はしないはずだね。

「えっ？ 一応、サラとだけど。」

「……そう。」

明久が誰と行くかを言うと、島田はなぜか悲しそうな顔をした。ま
あ、私には関係無いし放っておいてもいいか。

『二人ともがんばってきてね。私達もがんばるし。』

「……期待してる。」

「頑張るのじゃぞ。」

「うん。」

「おう。任せろ。」

私達が応援すると、二人はそう言って大会へ行った。さて、私達も
頑張りますか。

第33問 開店とクレーマー

「何だよこの不味い和菓子は！よく商品にしようと思ったな！」

「申し訳ありませんお客様。」

雄二と明久が試合に行ってから数分がたった頃、順調にいったると思ってたのにクレーマーがやってきた。

「代表を呼べよ！文句言ってやるよ！」

「今、代表は私事でいません。」

「はあ！よくそんなので代表やってるよな！」

最悪だ。これもう実力で排除しても良いよね？異論なんて認めないからね？

『秀吉、西村先生を呼んできて。』

「うむ、わかったのじゃ。」

秀吉が教室を出たのを確認してからもう一度、クレーマーの二人を見た。坊主頭とソフトモヒカンね、よし覚えた。

「さっさと代表ごべあつ！」

ドガッ！！

『他のお客様の迷惑になるので、少し黙ってください。それで、何かご用ですか？代表がいないので私が代理をやらせていただきます。』

「用も何も、今こいつが殴られたんだけど。」

一々煩い男だなあ。一度済んだことは気にすんなっての。

『他のお客様の迷惑になると判断したので、僭越ながら私が沈静化させていただきました。ご安心ください、この人は責任を持って西村先生に引き渡しますのです。』

「ふ、ふざけんじゃねえぞ！？何で鉄人に……」

「ほう？誰が鉄人だと？」

「なっ！？てつじ……じゃなくて西村先生！？」

モヒカンが私に掴みにかかろうとしたとき、ちょうどよく西村先生がやってきた。

「夏川に常村じゃないか。言い訳は生徒指導室でたっぷり聞いてやるぞ。」

うわあ。二人を同時に持ち上げるって、見た目通りの力持ちだなあ。

「……………先生、少し待って。」

「ん？何だ神崎？」

先生が二人を脇に抱えたまま出ていこうとしたとき、天音が料理を手にしながら先生を呼び止めた。

「……………味見用。この喫茶店、どう？」

「よくわからないが……フム、美味しいじゃないか。良くできているぞ。それに内装もしっかりしているし、清潔で良くできているじゃないか。」

西村先生の感想のおかげで立とうとしていたお客さん達がまた座り直した。はあ、西村先生の声が大きい人でよかった。ん？

『天音、これ狙ってた？』

「……………（コクツ）」

やっぱりそうか。結構いい作戦だね。じゃあ私も天音に負けないくらいがんばらなくちゃね。

『お客様、大変ご迷惑をおかけしました。謝罪としてみたらし団子を一皿ずつ無料で提供させていただきますので、どうか席を立たないでください。』

まあ、私払いなんだけどね。クラスの為だし、少しの出費くらいはいいかな。そういえば、言い忘れてたけど私の薬屋は禁止になって、ただの和風喫茶になった。まあ、高校生だし当たり前だよな。って、あれ？私誰に説明してるんだろ？

「おう、結構繁盛しているな。」

「本当だね。」

『お疲れさま。二人とも勝った?』

「当たり前だ、俺らが負けるわけないだろう。」

まあ、それもそうだね。

「それよりも、問題はなかったか?」

『ああ、そういえばあったよ。もう追い払って、今は生徒指導室にいるんじゃない?』

「そうか。そいつらの特徴は?」

『名前は夏川と常村、特徴はボウズとモヒカン、あとは……下品な顔かな?』

これくらいかな? やっぱ、下品なのは顔じゃなくて雰囲気? うゝん。あ、全部か。

「了解。じゃあ、二回戦が始まるまで手伝ってやるよ。」

「結構大変そうだし、僕も手伝うよ。」

『それなら、二人とも料理できるよね? 厨房に行ってくれる?』

天音からOKもらえた人って少ないから厨房も大変なんだよね。二人とも天音からOKをもらってるから、厨房に入ってもらえとすぐく助かるよ。

「任せとけ。行くぞ明久。」

「うん。」

「あ、明久君ですか。お疲れ様です。」

明久が厨房に行こうとしたときにちょうどよくサラが出てきた。

「うん。ありがとうサ……ラ……？」

「？」

どうしたんだろ？あ、もしかしてサラに見惚れてたのかな？確かに今の衣装だとそれも仕方ないかな。まあ、赤い眼と白い髪に合うような着物を選んだからね。コートの中だけど、それでもサラの魅力を引き立たせるには十分だしね。

「僕もう死んでもいいかもしれない。」

さすがにそれはいきすぎでしょ。

『ほら、厨房が大変そうだから早く行ってあげて。サラも、お客さんの注文とってきて。』

「あ、うん。」

「はい。」

二人のままだとどっちも動かなそうだったから、とりあえず指示を

出しておく。さてと、私も自分のやることをやらなきゃね。

第34問 更なる妨害の予感

「……………暇。」

「うむ、そうじゃのう。」

どうしちやったのかな？もしかして、また何かの妨害でもあるのかな？

『雄二が帰ってきたら相談してみるか。』

そろそろ試合も終わる時間だし。

「……………うん。」

「うむ。」

暇だなあ。

「ただいま……………って、あんまりお客さんがいないなあ……………」

あ、戻ってきた。

「おかえりなさい。明久君。」

『お帰り。ちゃんと勝ってきた？って、あれ？雄二は？』

「ただいま。無事勝ったよ。雄二はトイレに寄ってくるってさ。」

事情を知らないとはいえ、のんきだね。

「それよりも龍斗、お客さんがあまりいないけどどうかしたの？」

『特にないと思うよ？秀吉、あれから変な客とか来てないよね？』

「うむ。ワシはずっとここにおったが、妙な客はあれ以来来ておらんぞ？」

うーん、だとすると原因は外しかないよなあ。

「お兄さん、すみませんです。」

「いや。気にするな、チビッ子。」

「チビッ子じゃなくて葉月ですっ！」

ん？この声は、雄二と女の子？

「雄二が戻ってきたようじゃな。」

「……………うん。」

ガラッ

「んで、探しているのはどんなヤツだ？」

「あれ？どうしたの雄二？」

「妹さんですか？」

ドアを大きな音を出しながら開けて入ってきた雄二の陰に小さな女の子がいた。けど、あんま似てないなあ。

「いや、探している人がいるらしい。」

ふん。

「あっ！バカなお兄ちゃんだっ！」

と言ってその女の子は明久に抱きついた。確かにバカだけど、小学生に言われるのはどうかと思うよ。

「えっ！？えっと、キミは誰？見たところ小学生だけど、僕にそんな年の知り合いはいないよ？」

「え？お兄ちゃん……。知らないって、ひどい……」

あ、泣きそう。

「バカなお兄ちゃんのバカあっ！バカなお兄ちゃんに会いたくて、葉月、一生懸命『バカなお兄ちゃんを知りませんか？』って聞きながら来たのに！」

うわあ。明久も悲しそう。

「あの、明久君。元気出してくださいね？」

「うん。ありがとう。サラだけがいつも僕の味方だよ。」

そう言って明久はサラに抱きついた。うん。それで顔を赤くしながら

らも、はにかんでるサラがすごく可愛かった。

「むく！無視すんなですっ！バカなお兄ちゃんのバカあつ！」

あつ。女の子がいるの忘れてた。

「むう。明久——じゃなくて、バカなお兄ちゃんがバカでごめんな？」

「そうじゃな。バカなお兄ちゃんはバカなんじゃ。許してやってくれんかのう？」

「……………秀君、明久が泣きそう。」

というより、もうすでに泣いている気がするのは気のせいなのだろうか？

「でもでも、バカなお兄ちゃん、葉月と結婚の約束までしたのに——」

……………は？

「あ、あの、明久君？私はもう、用済みなんですか？」

あ、今度はサラが泣きそう。サラが泣いたら、明久は処刑だな。

「いや、ちょっと待って！絶対に何かの勘違いだからね！？僕にはサラだけだよ！」

「うう。本当ですか？」

「そうだよ！」

「よかった。」

そう言うときサラは明久に抱きついて静かに肩を震わせていた。というシリ阿斯もいいんだけどね。

「ちょっと！離しなさいよ！」

「離してください！吉井くんにはお仕置が必要なんです！」

この空気をぶち壊そうとする二人はどうしよう。

『はあ。二人とも、少しは冷静になるってことをしなさいよ。そもそも、どうして明久にお仕置きなんて必要なの？私にはそこがよくわからないんだけど。』

最近、女の子らしい言葉遣いに慣れてきちゃった気がする。精神が肉体に引っ張られるって、こういうことなのかなあ。

「ん？姫路に島田か。勝ったのか？」

やっと気づいてくれたか。

「坂本！コイツに今すぐ離すように言いなさい！」

「ん？何があったのかよくわからないが、そろそろ離してやつ——」

カシャンッ

という音と共に、ナイフが私のコートから落ちてきた。

『あ、ごめんね？でも次に私の邪魔したらナイフが横に落ちるかもしれないね？』

「——たほうがいいと思ったが、気のせいだったようだな！」

と言って雄二は持ち場へ戻っていった。はぁ。コイツらを見るのも面倒だし気絶させて端に置いとくか。

「あ、龍斗。これから偵察ついでに昼食を食べに行くんだけど、行く？」

『うん。行くよ。』

ちょうど腹も減ってきたし。

第35問

「明久、龍斗、ここはやめよう。」

今現在、私達は私、雄二、明久、サラ、女の子——葉月ちゃんというらしい。あの島田の妹とは思えないほど素直な子だった——の5人でAクラスの前で立ち往生している。というより、雄二が駄々をこねている。

『はぁ。早く入ろうよ。男ならちゃっちゃと覚悟決めちゃってよ。』

「そうだよ！ここまで来て何を言ってるのさ！早く中に入るよ！」

「頼む！ここだけは、Aクラスだけは勘弁してくれ！」

何でそんなに嫌なんだろう？

「そっか。ここって雄二の好きな霧島さんのいるクラスだもんね。」

あっ、そっか。

『雄二、いい加減諦めなよ。それに、これは敵情視察でもあるんだからね。』

「それはそうだが……」

ええい！いつまでもちまちまと男らしくない！

『問答無用！』

「ぬぐあつ！」

ドカツ

と、雄二を蹴飛ばしてAクラスに入る。早く優子のメイド姿を見てみたいのに。

「……おかえりなさいませ、ご主人様にお嬢様。」

うわあ。霧島さんかなり綺麗になってる。長い黒髪にエプロンドレスの白がよく映えてるし、黒いストッキングもすごいあってる。

「……チッ！」

やっと起き上がった。それよりも、雄二の反応が気になるな――

「……おかえりなさいませ。今夜は帰らせません、ダーリン。」

と思ったけど、あまりのアレンジに反応すらできなかったようだ。

「あのお姉さん、寝ないで一緒に遊ぶのかな？」

「葉月ちゃんはまだ知らなくてもいいことだから、気にしなくてもいいんですよ。」

私もサラの意見に同意だなあ。葉月ちゃんにはまだ純心で無垢なまままでいてほしい。

「……お席にご案内します。」

霧島さんが何事もなかったかのように歩き出したから、私達もそれについていった。

「ね、お兄ちゃん。凄いお客さんの数だね。」

葉月ちゃんが明久の袖を引っ張りながらそう言った。たしかに、Aクラスは学年一の広さを誇るのに、それを感じさせないほどお客さんが一杯いた。それに、メイド喫茶だから男ばかりだと思ったら、以外と女の人も多いね。

「……では、メニューをどうぞ。」

そういいながら霧島さんがメニューを渡してきた。うわっ、装丁までキチンとしてるよ。

『ここは私がおくるから好きな頼んでいいよ。』

「ありがとうございます、龍斗君。なら私は、ふわふわシフォンケーキをお願いします。」

「じゃあ僕もそれで。」

「葉月もー!」

『うーん、私は……』

「……ご注文を繰り返します。ふわふわシフォンケーキを三つ、メイドのご奉仕を一つ、メイドとの婚姻届を一つ。以上でよろしいですね?」

うえっ！？私何も注文してないよ！？

「全然よろしくねえぞっ!？」

「……では食器をご用意致します。」

ふわふわシフォンケーキを頼んだ三人のところにはケーキとフォークが、雄二のところには実印と朱肉が用意された。私の分は？

「お、お嬢様。」

優子の声が聞こえたからそっちを向くと、メイド服を着た優子がケーキを載せた皿を持って立っていた。

『え？ゆ、優子？』

「えっと、はい、あゝん……／／／／／」

！？

『え、あの、優子？』

「食べてくれないの？」

メイド服に潤んだ目と上目使いは卑怯すぎる。うう、断りきれないよお。

『い、いただきます……うん、おいしいよ……／／／／／』

「あ、ありがとう……／／／／／」

今の私達絶対に赤いだろうなあ。

「あ、唇に少しついちゃった。取るから動かないでね。」

『うん……ん!?!』

な、舐められた!?!

「うん、取れた……／＼／＼／＼／」

『あ、ありがとう……／＼／＼／＼／』

か、顔が熱すぎて溶けちゃいそう。

「あ、あの。お二人とも、その、ごちそうさまで……／＼／＼／＼／」

『「……／＼／＼／」』

皆に見られてるの忘れてた、穴があったら入りたいよ。それよりも話題を変えなきゃ。

『あ、あのサラ、雄二と明久は?』

「あちらです。」

サラが指差した方を見ると、なぜかメイド服を着た明久が夏川と常村の方へ向かっていた。というより、あの二人はもう解放されたんだ。

「お客様、足元を掃除しますので、少々よろしいでしょうか？」

何やってんのかな？

「掃除？さっさと済ませてくれよ？」

「ありがとうございます。それでは――」

そこでなぜか明久が夏川坊主、じゃなくて夏川、もう坊主先輩でいいか。坊主先輩の腰に抱きついた。

「ん？何で俺の腰に抱きつくんだ？まさか俺に惚れたか？」

絶対に無いと思う。

「くたばれええっ！」

ドガッ！

「ごばあぁっ！」

うわぁ。プロ顔負けのバックドロップだ。あれは痛い。

「き、キサマは、えfうぐおおっ！」

とりあえずFクラスの名前を出されるのは不味いから、パチンコ玉を指弾で打ち出してこめかみに打ち当てておく。

「こ、この人、今私の胸を触りました！」

「ちょっと待て！バックドロップするために当ててきたのはそっちだし、だいたいお前はおとくうぐがぶあつ！」

明久の男としての威厳を守るために、今度は眉間に当てた直後に雄二のストレートが腹にめり込んだ。

「こんな公衆の面前で痴漢行為とは、このゲス野郎が！」

「何を見ていたんだ！？明らかに被害者はこっちだろ！」

沈黙した坊主先輩の代わりにモヒカン先輩が現れた。

「黙れ！たった今、コイツはこのウェイトレスの胸をもみしだいていただろうが！俺の目は節穴ではないぞ！」

なら風鈴みたいに空洞なガラス玉か！

「……さすがは、Fクラスね。恐れ入ったわ。」

『う、うん。』

その後、少しあってから教室を出ていった雄二達を見ながらそう呟いた。私が見られているわけじゃないのに、優子の凍てついた視線がすごく痛かった。

「あ、そろそろ仕事に戻るわね。」

『私達もう行くからお会計お願いしていい？』

「わかった。えーっと、お会計は夏目漱石が一枚と――」

「……坂本雄二を一名」

「——と、神崎龍斗を一名ね。」

『うん、わかつ……ちょっと待って。何かおかしくない?』

私の耳がおかしくなければ、2つほど変なのが聞こえた気がする。

「なによ、払えないの?」

『払えないっていうか、払っちゃいけないのが混じってる気がする。』

「冗談よ。」

『アハハ、さすがにそうだよな。じゃあ会計は——』

「この三人を払えないんだったら龍を一人でもいいわ。」

福沢諭吉さんを一人置いてダッシュで逃げた私は悪くないはず。

第36問 妨害続きでホントに参っちゃうよ（b v 龍斗）

『で、三回戦は不戦勝になったの?』

「うん。相手が食中毒で棄権したんだ。」

Aクラスから逃げた後、Fクラスの手伝いをしていると、試合があるハズの明久と雄二が帰ってきた。

「ならば、済まぬがこっちの建て直しに協力してくれんか?」

と、秀吉が申し訳なさそうに表情を曇らせた。私達が悪いわけじゃないのに。

「そうだな。一度失った客を取り戻す為にも、何かインパクトのあることをやる必要があるそうだな。」

『インパクトは足りないと思うけど、水羊羹を小さく切って試食品として校内で配るのは?』

「そうだな。それをやるか。じゃあ、秀吉と天音の二人で宣伝に行ってくれないか?」

「うむ、任せるのじゃ。」

「……………わかった。」

これでお客さんが戻ってきてくれるといいね。

「それと、姫路に島田。二人も少しいいか？」

「どうしたの？」

「何ですか？」

「二人も、浴衣を着たまま試合に出てくれないか？そこでFクラスの宣伝をしてもらいたいんだが。」

「こ、このまま、これを着て出場しろって言うの……？」

「流石に恥ずかしいです……」

まあ、その気持ちはわかるよ。店内とかならまだしも、そのまま大会はちよつとね。

「二人とも、お願いだ。」

二人が迷っていると、明久が二人に頭を下げた。

「明久……お前は本当に——コスプレが好きなんだな……」

それは否定できないと思うけど、今言うことじゃないと思う。

「もしかして吉井君、私の事情を知って——」

「仕方ないわね。クラスの設備の為だし、協力してあげるわ。ね、瑞希？」

「あ。は、はいっ！これぐらいお安い御用です！」

なんとか二人も同意してくれたみたいだね。これでもっと人が来てくれれば、結構な巻き返しができそう。

「そうか、助かる。大会では自分たちの所属がFクラスであることを強調するんだぞ。」

「オッケー。任せておいて。行くわよ瑞希。」

「はいっ!」

『秀吉に天音も、できるだけ広範囲でお願いね。秀吉はFクラスの宣伝もお願い。』

「……………了解。」

「任せるのじゃ。」

『あ、そうだ。二人は終わったらそのまま休憩に入ってもいいよ。』

今Fクラスの鍵を握っているのは、向こうの二人とこの二人のペアだけだからね。一皇国（Fクラス）ノ興廃一コノ一戦（四人の活躍）ニアリ、各員一層奮励努力セヨって感じかな。私達も頑張らなきゃ。

☆

四人が行ってから十分もするとかなり客が入ってくるようになった。と言うより、入りすぎて大変。どっちな二人帰ってきてくれないかなあ。

「ただいまー。」

「ただいま戻りました。」

グッドタイミング！やっと戻ってきた！

「丁度良いところに来てくれた。二人とも疲れているところ悪いが、今すぐにホールに入ってくれ。」

『須川と近藤はもうキッチンだけに集中して！』

「わかった。」

「おう！」

よかった。これでやっと両手同時調理から解放される。って、あれは教頭？何で明久と話してんの？

「……………姉さん。団子がそろそろ終わる。」

『わかった。須川、明久に団子を持ってくるように言ってくれる？あと、私も少し抜けるね。』

「わかった。」

『はあ。問題なく学園祭を楽しみたかったのになあ。』

と呟きながら明久のいる空き教室へ入っていった三人の男を追って私も入った。

『失礼しまーす。』

「え？龍斗？」

「誰だてめえ。」

「こいつも一緒にやっちゃまうか。」

「でもこいつ女だぞ？」

『そんなに話してる暇があったらさあ、前見なよ。』

と言うと同時に一番手前にいた男の顔面を殴り飛ばす。あ、壁に激突したけど死んでないよね？

「なっ！？」

「くそ野郎が！」

後ろに回ってきた二人目の腹を肘打ちして体勢を崩したところを背負い投げの要領で三人目に向けてぶん投げた。これっってもう女らしさの欠片もないよね。

『明久。団子早く持ってきてよ。』

「う、うん。」

私も戻って頑張りますか。

☆

それから二時間くらいたって明久と雄二と姫路と島田が大会に行った。四人もいなくなったせいで今キッチンもホールもすごい大変なことになっている。

『みたらし団子4つと水羊羹2つと芋羊羹五つできたよ!』

「こっちも抹茶入ったぞ!」

「新しい注文だ!みたらし団子と抹茶を五つずつと懷石料理だって!」

『京都にいったろ!』

「注文だ!ウドンゲを1つ!」

『永夜○でもやってろ!』

というふうには火の車状態がずっと続いている。四人とも早く帰ってきて!

「ほう。なかなか盛況じゃないか。」

やっと帰ってきた!

『みんな手伝って!人の手が足らなすぎる!』

「そうだな。大変そうだし、今は喫茶店に集中するぞ。」

「そうですね。喫茶店のお手伝いをしないといけませんよね。」

「そうね。ちょっと視線が気になるけど、売り上げの為に頑張りますか！」

「ん、そうだね。」

これでやっと少しは楽になれる！

第37問 黒幕との取引

「それじゃ、準決勝に行ってくるね。」

もうそんな時間か。決勝は明日だから今日はこの試合でラストか。

「がんばってください、明久君に坂本君も。」

「はい。頑張ってくださいね。」

「アキ、負けたら承知しないからね！」

「わかってるって。」

「ああ、任せておけ。」

今雄二の目がすごい燃えてる。まあ、次の対戦相手がね。

「霧島さんと優子さんが次の相手なんですか？がんばってくださいね。」

とサラが言ったように、次の相手が私と天音を抜いたら学年トップの霧島さんと、優子が相手だからね。特に弱点となる科目も無さそうだし、大丈夫かな？

「大丈夫だよ。雄二に作戦があるみたいだし。」

「まあな。あんなバケモノどもとともに勝負するほどバカじゃない。うまくやってやるさ。」

バケモノって。確かに優子は現代国語と古典なら私に匹敵するし、霧島さんも全教科400点越えだから否定はできないけど。

「アキなら不安だけど、坂本がそう言うなら大丈夫ね。キツチリ勝ってきなさいよ！」

「明久君頑張ってくださいね。応援してます。」

「任せておいてよ。」

『まあ、とりあえず二人とも頑張って。』

「おう。任せておけ。」

と言って二人は試合会場に行った。

「ふむ。ワシらもそろそろ行くかの。」

「……（コクッ）」

『どうしたの？ 秀吉に康太。』

さらに二人がいなくなるのはかなりきついのに。

「うむ、雄二の作戦らしいのじゃ。」

秀吉を使った作戦って、もしかして。

『優子と入れ替わるつもり？』

「よくわかったのう。」

『やめたほうがいいと思うよ？多分、死ぬよ？』

「ハッハッハ。ワシも男じゃ。姉上にそうやられたりはせんよ。」

やったら多分、優子に殺される。

「……………秀君。それやったら死んじゃう。」

天音も同意見らしい。

「大丈夫じゃ、問題ない。」

と二人が行ってしまった。本当に大丈夫かな？秀吉に死亡フラグが立ったようにしか見えない。

ピンポンパンポーン

「神崎龍斗、神崎天音、至急教頭室まで来るように。」

なんか怪しさ満点だなあ。天音もすごくめんどくさそうな顔してる。

『行こっか？』

「……………面倒。」

とりあえず行くだけ行きますか。けど、なんか胸騒ぎがする。

☆

『失礼します。』

「……………失礼します。」

ノックしてから教頭室に入ると、中にはソファに座っている教頭がいた。

「来たか。とりあえず座ろうか。」

と促されたからまずは来客用のソファに座る。

「飲み物はあるかね？　といってもコーヒーしかないが。」

『いません。』

「……………それよりも、本題は？」

「……………君達と取引がしたい。」

『取引？』

「そうだ。君達には、私がこれからやることに手を出さないでほしい。」

『……………具体的には？』

「今の学園長を失脚させるために、Fクラスの吉井くんと坂本くんだったかな？　この二人に決勝で負けるように説得、もしくは力づくでもいいから止めてほしい。それが成功して私が学園長になったら、ここの試獣召喚システムを君の会社に売ろう。どうかね？」

……ふざけるな。

『却下だ。アンタの私利私欲のためにそんなことをするなんてな。』

それに、そんなことをするヤツだ。きっと軍関連の会社にも売るに
違いはない。こいつを失脚させる方がいいな、ほかにもいろいろやっ
てそうだし。

「そうか。それは残念だな。しかし、時間は稼がせてもらったよ。」

『は?』

なんのことだ? 時間を稼がせてもらった?

「私に協力したまえ。君たちの恋人や友達がどうなってもいいのか
?」

「……………どういうこと?」

「なに、彼女たちには少し別の場所に行ってもらったただだよ。決
勝戦は明日だ。明日までに説得してくれればいい。」

そういうことか!

『くっ! 行くぞ天音。』

「……………うん。」

教頭室を出て急いで教室まで戻ると康太が駆け寄ってきた。

『どうした?』

「……やられた。Fクラスの女子と、木下優子と霧島翔子がさらわれた。」

チッ!

「……向こうは2つに別れている。」

『私は優子がいる方を助けに行く。天音はもう一方を、康太もそっちに行つて。』

「………わかった。」

「……任せろ。」

「おいおい、俺らのことも忘れるなよ。」

「僕も行くよ。」

ちようど戻ってきた雄二と明久がやってきた。

『じゃあ私と天音が二人で行くから、そっちはお願い。』

「任せておけ。悪鬼羅刹と言われた力を見せてやる。」

「わかったよ。」

「……（コクッ）」

『行くよ天音。急ぐから全力で走るよ。』

「……………わかった。」

場所はわかってる。後は、優子をさらったヤツを半殺しにして優子
を助けるだけだ。

第38問 優子奪還へ

other side

普段は人の来ない町外れにある廃工場。その中に数人の人影があった。

「今日こそ、今までの復讐ができるんだな。」

「ああ。昔アイツに俺らのチームが壊されてからずっとついてなかったもんな。」

そこにいたのは昔龍斗によって潰された暴走族の人達で、今はチンピラをやっている男達約30人だった。

「それにしても、依頼主も変なやつだよな。自分の学校の生徒を誘拐させて、しかもそれに何してもいいって言うなんて。」

そして、その男達の足元には優子、秀吉、サラの三人が気絶して横たわっていた。

「う、うゝん。あれ？ここは？」

最初に目を覚ましたのは優子で、他のメンバーも順番に起きていった。

「たしか、こいつはアイツの彼女だったか？」

「ああ。そうだ、コイツをあゝの野郎の前で犯してやろうぜ。どんな

反応があるのか見てみたいぜ。」

「依頼主の話だと、あの野郎自身も女になっているらしいぞ？」

「ア、アンタ達！今すぐアタシ達を解放しなさい！これは犯罪なのよ！」

「あゝあ？黙ってる！」

解放するようと叫んだ優子に男達はキレ、手を振り上げたとき。

『……殺す！！』

「あがあっ！」

「ぎいっ！」

「ウギヤアア！」

優子に手をあげようとしていた人と、それに一番近くにいた人の右の肩にナイフが深々と刺さっていた。そして、別の人の前には、刀を降り下して太ももを斬った龍斗がいた。

「だ、誰だテメエは！？」

男の一人がそう聞くと、龍斗は返り血に染まっている顔を上げ笑った。だが笑っているだけで何も答えなかった。

「舐めてんじゃねえぞこの野郎が！……ギヤアアッ！」

その態度で舐められていると思った男が持っていた鉄パイプで殴りかかろうとした瞬間、龍斗が刀でその肩を斬った。

『私？私の名前は神崎龍斗だよ♪』

ここに来てようやく、先ほどの質問に答えた。口調は朗らかに、表情は笑顔で、眼だけは全く笑っていない龍斗はとても恐ろしく、男達の数人は腰が引けてた。

「テ、テメェらっ、相手は一人だ！一気にかかれ！」

そのリーダーらしき人の声で男達は気を取り直すと、各々の武器で龍斗に襲いかかった。

『ハッ！！返り討ちだ！！』

龍斗は烈火の如き気迫と共に前へ進むと、そのまま刀を持った右手で目の前の鉄パイプを持った人を殴り飛ばし、流れるような動作で左手をコートの中へ入れ、

「いぎゃあぁっ！」

「うぐうっ！」

拳銃を取り出して他の六人に一発ずつ発砲した。そして、また近くにいる男に斬りかかろうとしたとき。

「動くな！コイツがどうなってもいいのか？」

『なっ！？卑怯者！！』

「へっ！何でも言えばいい。」

そこにいたのは優子にナイフを突きつけているリーダーらしき男だった。

『今すぐ優子を離——』

ゴッ！！

『ぐうつ！！』

龍斗の意識が全て優子に向くと、タイミングを図っていたかのように別の人が龍斗の後頭部を鉄パイプで殴った。意識が飛ぶことはなかったが、体に力が入らなくなった龍斗はそこに倒れた。

「龍っ！！」

倒れた龍斗の側にいた男達は鎖で龍斗の手足を縛るともう一方を近くの柱に巻き付けた。それを見た男は優子を別の男に任せると龍斗に近づいていき、思いつき蹴りつけた。

『ぐうつ！！』

「お前もずいぶんと惨めになったな。なあ、神崎龍斗？」

男は龍斗の髪を掴むと上に引っ張り無理矢理視線を合わせ、そう言った。

『う……るせえ。』

「おゝおゝ、怖いねえ。せっかく女になれたんだからそんな顔するなって。それにこれから楽しいショーが始まるんだからよお。」

『ショー……だと?』

疑問に思った龍斗はそう聞き返すと、男は心底楽しそうに、醜惡な笑みを浮かべて言った。

「ああ。お前の目の前で、お前の彼女を凌辱しつくしてやるよ。ハッ！」

『っ!? やめろ!! クソッ!! ぶっ殺してやる!!』

何とか体に力が入るようになった龍斗はそれを止めようとするが、鎖に阻まれて動くことができなかった。男はそれを見ると更に笑みを深めてから優子の方へ歩いていった。

「ひいっ! 来ないで!」

優子は男から逃げようとしたが、別の男に捕まっていた逃げることができなかった。

「いやあっ!! 来ないで!!」

あまりの恐怖に優子は泣き出したが、男はそれすらも楽しむかのようになんて笑っていた。

「ギャハハッ! 安心しろよ。お前が終わった後は他のやつらもやってやるからよ。」

そう言うってから優子に手を伸ばした男はいきなり動きを止めて倒れた。

「がっ！……グフウッ！」

「えっ！？り、龍？」

倒れた男の後ろにいたのは龍だった。両手足には鎖を無理矢理引きちぎったせいで皮が剥け血だらけになっていて、表情は長い髪で見えなくなっていた。

『……クロス。』

そう呟き顔をあげた龍斗の顔には表情がなく、ただ目から涙だけが出ていた。そんな龍斗を見た男達は恐怖し脇目も振り返らず逃げ出そうと走っていった。

『コロシテヤル！！』

「もう止めて！！」

逃げ出した男達を追いかけたようとした龍斗だが背中から聞こえた声、背中から感じる温もり、背中から香る安らぐ匂いに動きを止めた。

「もう、大丈夫だから。ありがとう、助けに来てくれて。」

『……ごめん。』

力が抜けた龍斗はその場に座り込み、優子に顔を見せないまま謝っ

た。

「何で謝るの？」

『だって……だって！優子を守ることができなかった！守るって言ったのに！私はそれを守ることができなかった！』

顔を向けないまま激しく慟哭をする龍斗を、優子は慈しむように頭を撫でていた。

「こっちを向いて？」

優子は一度体を離すとそう言った。

『……………』

「ねえ、向いて？」

そう優子に言われ、龍斗は振り返って優子を見た。龍斗は目が真っ赤に充血していて、涙に濡れる顔には激しい後悔の表情があった。そんな龍斗に、優子は優しくキスをすると抱きしめた。

「でも、結果的には助けてくれたじゃない。まあ、確かに怖い目にあったけど、こうして助けに来てくれたじゃない。だから、大丈夫よ。」

『……本当に？』

「ええ。それよりも疲れたでしょ？もう休んでいいよ。」

『うん……ありがとう……おやすみ。』

優子にそう言われて緊張の糸が切れたからか、体力が尽きたからか倒れるように眠りについた龍斗の頭を、優子は優しく慈しむように撫でていた。

最終問題

『うう……あれ？ここは？』

ここ、どこだろう？どっかの病室っぽいけど。それよりも、何かすごい違和感が。

『ああ、これか。でもどうして？』

違和感を感じるところ、両手を見てみると包帯が巻いてあった。しかも頭にも。何で？

「……………姉さん、おはよう。」

『ん？天音か。おはよう。』

声がした方を見ると、天音が椅子に座っていた。

「……………いきなりだけど、姉さんは廃工場のこと覚えてる？」

廃工場？たしか……そうだ、優子が誘拐されたって聞いたからその廃工場まで行って暴れて、その後泣いて優子に慰められて、そこから記憶にないってことは寝たのかな？

『うん。全部覚えてる。』

「……………そう、ならその後の事から話す。多分、少し長くなる。」
長くなる？もしかして、私ってかなり寝てた？

『えっと、私ってどれくらい寝てたの?』

「……………5日間。その間、優子はトイレとお風呂以外の時間はずっとここにいた。私と秀君は一日交代でここにいた。」

うわぁ。優子にはかなり迷惑かけちゃったなぁ。二人にもだけど。

『迷惑かけてごめんね?』

「……………いい。むしろ優子の方が心配だった。」

『どうして?』

何で優子?もしかして、やっぱりあの男達に何かやられたんじゃない?……

「……………トイレは必要最低限、お風呂だって皆に促されてから、睡眠時間もろくに取らないで、ほとんど起きて姉さんが起きるのを待ってた。」

そうなんだ。何か優子には心配かけっぱなしだなぁ。

『優子は?』

優子がどこにいるか気になった私は天音に聞いてみると、黙ってまま視線を私のお腹の方までずらした。私は体を起こして見てみると、

「すう…………すう…………」

ベッドの横の椅子に座りながら上半身をベッドに倒して寝ている優

子がいた。

「……………寝始めたのは2時間前。仮眠程度に2、3時間は寝ることとはあっても、本格的には寝てない。」

そっか、私ったら何をやってるんだろ。優子に迷惑ばかりかけちゃって。

『天音も、ありがとう。』

「……………いい。それに、まずは優子に言うべき。」

『……………うん、そうだね。でも、ありがとう。』

「……………どういたしまして。」

私は寝ている優子の頭を撫でながら顔を見てみると、やっぱりクマが見つかった。

☆

「んう……………あ、あれ？アタシ寝ちゃった？」

その後、天音から私が倒れた後のことを聞いていると、優子が起きた。

『おはよう。優子。』

「龍！？起きたの！？」

『うん。ごめんね？迷惑ばかりかけちゃって。』

「うう……グスッ……うわああああん！！」

ええ！？いきなりどうしたの！？

『ゆ、優子！？どうしたの！？何かあったの！？』

「グスッ……龍が、起きなかったら、どうしよう……グスッ……って思ってた……本当に、龍だね？」

『うん。もう大丈夫だよ。これからは優子に黙っていなくなることは絶対にしないから。』

「うう……うわああああん！」

泣いている優子を抱き締めながら頭を撫でて私は決意した。もう絶対に、優子を置いてどこかに行くなんて、しない。

『あれ？優子？』

「すう……すう……」

『寝ちゃったか。ふわあ、私も眠いし一緒に寝ちやうかな。』

私はそう決めると、優子をベッドの中に入れて抱き締めながら眠った。

「む、二人とも寝ておるのか？」

「……………うん。私がいるの忘れて優子をベッドにいれて寝た。」

「うむ、そうか。また明日、出直してみるかのう。」

「……………今日は一緒に寝よ？」

そんな会話が聞こえた気がした。

そんな日々から数年後。

「行くわよ、龍斗。」

『了解。それにしても、久々の日本だね。皆元気かな？』

あれからいろいろ大変なことが起きまくった。男子全員が女子風呂覗きに行ったりとか、三年と対決したりとか、数えだしたらきりがないくらい。

その中でも印象的なのは、試召戦争の大会の優勝賞品のチケットを使って雄二と翔子が遊園地に行つて、皆の手助けがありながらも結ばれたこと。

天音のおかげで秀吉がAクラスに入れたり、サラのおかげで明久がAクラスに入れたり、雄二が自力でAクラスに入つたこと。三人とも、特に秀吉と明久はすごいよね。

あとは、何を血迷つたのか姫路かまたFクラスに入つたこととか。

三年になってからやっと性別転換薬ができて男に戻ることもできたし。

文月学園卒業後は、俺と優子はアメリカの大学に進んで卒業後に結婚。あと数年したら会社を引き継ぐことになる。

秀吉はハリウッドに行つて新人ながらもすごい有名になって、少し落ち着いてから一緒についていった天音と結婚。

明久と雄二は日本の大学を出て起業。雄二が実務を、明久が意外にもいろんな企画をしたりと、まだ小さいけどすぐに大きな会社になりそうだし。明久はサラと、雄二は翔子と結婚。

康太は大学を出てから日本政府の諜報機関に就職して、愛子と結婚。と、皆がいろんな道を進んでいった。

「何してるの？早く行くわよ。」

「お父さん早く行こうよ。」

「早く早く。」

『今行くよ。』

優子と子供たちが急かしてくるし、急ぐか。

最終問題（後書き）

こんな中途半端な終わり方ですいません。時間も取れない、先も思いつかないなど、いろいろと限界でして。これ以上やっても、ぐだぐだで元々無い中身が更に無くなりそうなので終わらせていただきます。本編は今話で終わりですが、この小説自体は来週の番外編で終わりです。内容は明久とサラの出会いなんですけど、それもいまいちで。

もし、何かを新しく始めるとしたら、受験が終わってからですね。今まで見てくれた皆さん、本当にありがとうございます。

番外編 バカとアルビノの出会い

高二のとある日の朝。紅き瞳を持つ少女は、目を覚ましてボーっとしている、ふと昔の事を思い出した。自分が初めて吉井明久と出会った、まだ自分の容姿が嫌いだった小さい頃のあの日を。

それはサラが10歳のある日のことだった。

「おーい、サラー」

「なに？お父さん。」

少し間の抜けた声で話す男性はレキシントン・ヨークタウン、友人達にはレックスと呼ばれている、サラトガ・ヨークタウンの父親で発明家をしている人だ。

「今日お父さんの友達とその子どもがこの家に遊びに来るよ。」

「そうなの？じゃあ、そのときは私の部屋にいるから。」

「いやいや、今日はサラも一緒だよ。」

レックスのその言葉にサラは驚いて聞き返すも、返ってきた肯定の言葉に嫌そうな顔をした。

「イヤよ。私はお父さん以外の人には会いたくない。」

「なんで？」

「だって、見られたくないんだもん。」

「そんなこと言わないでよ。その眼も髪も綺麗じゃないか。まるで天使みたいだよ。」

そう言うとサラは、頬を膨らませるとそっぽを向いた。レックスは、アハハと笑いながらサラの白い髪を撫でて、なんとかサラをなだめることに成功した。

「アハハ。じゃあ、今度ケーキ買ってきてあげるよ。」

「う、わかったよ。」

「うんうん、サラは良い子だね。ってヤバ、もう時間だから迎えに行ってくるね。」

「うん、行ってらっしゃい。」

しばらくそうしていた親子だが、レックスが腕時計を見ると少し慌てた様子で出掛けていった。

☆

それから一時間ほど時間が過ぎてレックスは男性とサラぐらいの少年の二人を連れて戻ってきた。

「ただいま。」

「おかえり。」

「お邪魔します。」

「おじゃまします。」

「……あ、あの、どうぞ。」

サラはレックスが帰ってきたらキッチンと迎えたが、他の二人が見えると急いでレックスの陰に隠れ、途切れ途切れになりながら迎えた。

「ほらほら、自己紹介しなくちゃダメだよ。」

レックスはそんなサラを見ると苦笑し、頭を軽く撫でながら促すと、サラはおずおずと自己紹介を始めた。

「サ、サラトガ・ヨークタウンです。10歳です。サラって呼んでください。よ、よろしくお願いします。」

「初めまして！吉井明久です！僕も10歳だよ！よろしくね。」

そう自己紹介をする明久の顔は少し赤くなっていた。

「僕は吉井明良。あきらレックスの友人だよ。それよりもサラちゃん。ウチの明久のお嫁さんになってくれないか？サラちゃんみたいなかわいい子なら大歓迎だよ。そうだ、今すぐにでも来ないかい？」

と明良が言った瞬間、レックスが前に出てきた。

「アハハ。何を言ってるんだい明良？いきなり。」

「いやなに。お前と一緒にいるとサラちゃんまで残念な子どもになっちゃうそうだからね。」

「いやいや、明久君こそウチに来るべきだよ。君のバカがうつたら可哀想だとは思わないのかい？」

と、二人はお互いに壮絶な笑顔を浮かべながら向き合った。

「いつかちゃんと決着を着けようと思ってた所だよ。」

「僕もそう思ってた所だよ。」

「もう、お父さんたら。」

「あ、待ってよサラちゃん。」

それを見ていたサラは、少し呆れたような目をしながら部屋へ戻っていくと、明久がそれについていった。

「何でついてくるの？」

「何でもいいじゃん！それよりも一緒に遊ぼうよ！」

「まあ、いいけど。何で私なんかと遊びたいの？」

父親であるレックスを除いて誰とも遊んだことのないサラは、少し狼狽えながらもそう答えた。

「サラちゃんと一緒に遊びたいから!」

「何で私なのよ。私のどこがいいのよ。」

「えっとね、宝石みたいにきれいな目とか、雪みたいな真っ白な髪とか、あとは、かわいいところとか!」

明久は頬を少し赤くしながら答えた。

「え!?!」

そして、それを聞いたサラは、動揺して狼狽えていた。

サラはなぜ自分が誰とも遊んだことがないかを知っていた。内気な性格も原因の1つかもしれないが、サラは聞いたことがあるのだ。自分は悪魔に憑かれた化け物だと。

サラは知っていたのだ、この宗教への信仰が強い町では、紅い瞳に白い髪は異質とみなされ嫌悪されていることに。

それ故に、体質的にあまり外出することがなかったサラは、滅多なこと以外で外出することが無くなった。

今まで忌避され続けていたこの紅い瞳に白い髪を褒められたのは、父親であるレックスを除いて初めてなのだ。

「嘘よ!?!」

「え!?!? どうしたの!?!」

故に、信じることができなかった。否、信じたくなかった。もしもこれが嘘だったらと思ってしまう、信じたくなかった。

「うるさい！あっちに行け！」

「僕何か嫌なことした？」

「嘘ついたでしょ！私の眼も髪もきれいなんかじゃない！」

「嘘じゃないよ！ホントだよ！」

「ふうん。じゃあ、大きくなったら私と結婚してよ！」

「え？」

「本当に私がかわいいと思うなら、お父さん達が言ってたみたいに、私と結婚してよ。」

サラはこれでこの少年もどこかへ行ってくれると思った。自分と結婚するくらいなら、嘘をついたことを認めてどこかへ行ってくれると思った。

「いいよ。」

「……………え？」

しかし、返ってきたのは自分の予想とは正反対の返事だった。

「……………な、何で？」

「えっと、あの、ひ、一目惚れしちゃったみたいだから。その、サラちゃんに……………／／／／／」

と、明久は真っ赤になって告げた。

「なっ!?!……………」

その告白とも取れる言葉にサラまで真っ赤になってしまった。

「えっと、サラちゃんが今幸せじゃないなら、僕が幸せにしてあげるからさ、大きくなるまで待っててくれない?」

「……………本当に?」

「うん!」

「それじゃあ、これからよろしくお願いしますね。一明久君（旦那様）♪」

「うふふっ。あの後お父さん達にバレて何だかんだで許嫁になりましたが、本当に、今は幸せですよ。一明久君（旦那様）♪」

隣で寝ている明久に軽いキスをしながら、サラは幸せそうにそう呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1854o/>

バカと龍と召喚獣

2011年11月15日11時54分発行